

フェンスレス 第4号 目次

はしがき——国語科教材が描く戦争…………… 友田義行 2

論文

愚痴をこぼす坑夫たち——宮嶋資夫『坑夫』論…………… 矢口貢大 5

プロレタリア文化運動と『コミンテルン三二年テーゼ』…………… 伊藤 純 23

「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」の資料集作業の中から

グローバル化時代の「闖入者」…………… 内藤由直 39

浅井花子の人と作品…………… 和田 崇 53

付：浅井花子著作目録

武田泰淳『富士』論…………… 藤原崇雅 75

——精神医療に対する作家の発言を手がかりに——

資料紹介

日本近代文学館所蔵 武田泰淳草稿類…………… 藤原崇雅 91

——『富士』『ある近代的な物語り、精神病患者の物語り』——

合評会記録

池田啓悟『宮本百合子における女性労働と政治

——一九三〇年代プロレタリア文学運動の一断面——』…………… 鳥木圭太 103

「禧美智章著『アニメーションの想像力』の著者に聞く」

をふりかえる…………… 水川敬章 109

書評

TOSAKA JUN : A CRITICAL READER…………… 雨宮幸明 113

竹内栄美子著『中野重治と戦後文化運動

デモクラシーのために』…………… 村田裕和 120

表紙 柳瀬正夢（『新天地』1927年4月号）

はしがき——国語科教材が描く戦争

二〇〇五年、目取真俊は沖縄から「戦後ゼロ年」という言葉を発した。在日米軍基地の大部分を押しつけられた沖縄が強いられる状況を鑑みれば、たしかに戦後は未だに到来していない。しかし、いくつもの政治的な節目を通じて、戦争は終わったとの歴史認識は早くから浸透していった。沖縄が本土復帰する遙か以前から「もはや戦後ではない」との言葉は列島を覆っていた。

今年は戦後七一年と位置づけられている。本誌第二号のはしがきでも言及されているが、戦争体験者の高齢化が進み、体験を持たない世代がいかにか証言を継承するかが、ますます喫緊の課題となっている。今夏は各紙で戦争体験者団体の解散が報じられた。体験者による証言の重要性はかねてから指摘されており、当事者が不在となった際に再び危機が高まるとの警鐘も鳴らされてきた。この間、二〇一五年九月には安全保障関連法が強行採決され、二〇一六年七月の参議院選挙では第九条を含む日本国憲法の変更を目論む与党が圧勝した。日本は法的にも戦争ができる国へと戻りつつあり、周辺諸国への警戒感を煽る報道が生み出す雰囲気は、戦後ゼロ年という認識の広がりを感じ知らせる。

ところで、体験者の戦争は、文学を通して、新しい世代にどのように伝えられているだろうか。多くの子どもたちが最初に戦争について知る機会は小学校の授業であり、中でも科目として学習するのは主に社会科と国語科ということになる。国語科教材に限ったとき、戦争世代の作家たちによるいわゆる戦争教材は、今も生き延びている。しかし、そこに描かれた戦争体験の中身に目を凝らすと、ある傾向が浮かび上がってくる。

圧倒的なシェアを占める光村図書の小学校国語教科書で、第二次世界大戦を背景とした物語教材には、あまんきみこ『ちいちゃんのかげおくり』（三学年）、今西祐行『一つの花』（四学年）がある。また、中学校では井伏鱒二『黒

い雨』（三学年）などが挙げられる。『ちいちゃんのかげおくり』と『一つの花』を読み並べると、不思議な符号に気がつく。両作品とも幼女が主人公であり、父親が召集を受ける場面が出てくる。出征を見送る際、前者では母親がこうつぶやく。「体の弱いお父さんまで、いくさに行かなければならないなんて」。後者でも地の文でこう書かれる。「あまりじょうぶでないゆみ子のお父さんも、戦争に行かなければならない日がやって来ました」。自ら志願したのではない一般市民を家族から引き離し、戦場に連れ出そうとする力への批判とも読めるし、身体虚弱的な男性であっても徴兵されることになった戦局の悪化を表す設定とも読める。もちろん戦死を予想させる伏線でもあろう。しかし同時に、虚弱な出征兵士という形象からは、加害者性が脱色されているとも言える。おそらく戦場で「活躍」することなく死んでいったと思われる彼らは、空襲や原爆によって殺害された人々（特に子ども）と同じく、純然たる戦争の被害者として表象されるのだ。

教材を含む児童文学作品は、読者に近い子どもの視点から描かれるものが多い。戦時を子どもの立場から描く場合、野坂昭如『火垂るの墓』に代表されるように、多くの場合飢餓と空襲の本土が舞台となる。戦争とは、物資が窮乏し、頭上からの圧倒的暴力にさらされ、父親を戦場に取られる悲劇に見舞われるものである。だからこそ戦争はいけない、ということになりかねない。竹山道雄の唯一の児童文学作品と言われる『ビルマの竖琴』でも、水島上等兵の足をビルマに止めたのは、日本兵の遺体の山であった。少なくとも義務教育で子どもたちが出会うことになる戦争教材が継承しようとするのは、戦争被害の物語と言わざるを得ない。

今年の全国戦没者追悼式における首相の式辞にも、加害や反省の言葉はなかった。参列者の中心が遺族であるためとの配慮らしい。戦争とそれに伴う占領や開拓の記憶を、特定の視点からの像に固定せず、無数の経験が交差する場に関き続けること。国語科教材研究においても、そのことは求められている。

（友田義行）

愚痴をこぼす坑夫たち

——宮嶋資夫『坑夫』論

矢口 貢大

1 はじめに——坑内に響く声

下層社会への変装取材を得意としたジャーナリスト・知久泰盛（峽雨）は、一九一二年、古河財閥の経営する足尾銅山への潜入取材を試みている。「足尾銅山鉱夫となるの記」^{（1）}によれば、坑口を潜るとそこには、カンテラの灯が「厚ぼつたい闇に圧へつけられるやうで光線の乏しい赤い焰が燃えるばかり漸く足元が見える」世界が広がっている。カンテラ一つを頼みに闇に覆われた別世界を歩むなかで、知久の聴覚は研ぎ澄まされていく。知久の筆がそこで記録するのは、坑内に響き渡る様々な種類の音である。鉱山電車の「轆轤の音響」、圧気機の「足元も岩天井もぶる／＼顫へるやうな轟音」、^{（2）}「耳を澄してゐると下の方でも横の方でも幽かに戛々^{（3）}と石を切る音」が響き、時折ダイナマ

イトの「頭上の岩天井が崩るかと思ふやうな大爆音」が空気を激しく振動させる。そして無機質なこれらの音の合間を縫うように、鉄槌の「戛々」^{（4）}という音で拍子を取りながら、坑夫たちは唄う。

アー坑夫様とはヨー知らずに迷うたヨー
と唄うと、他の一人は
やろやツたな

と囃やす。次に唄の下の句を続けて

アー聞けば奥山ヨードント坑^{（5）}ずまるよー、やろやツたな、ア、
ずん／＼

（知久泰盛「足尾銅山鉱夫となるの記」）

さらに「いくら叩いても、穴づりとれぬ石が堅いのかドント手の業か」といった悲調の唄や「足尾だるまと古河様は穴をほらしてドント金を取る」といった猥雑な唄まで、知久の筆は丹念にそれを記録していく。本書には、こうした「寂莫たる坑内に、鉄槌の嚙々たる音響と参差して、この音調を耳にする時は、無味殺風景なる坑夫の周囲にも、一種の哀音が漂う」ような風景が印象的に記されている。採鉱現場に響き渡る無機質な轟音の合間に耳を澄ますと、ともすればかき消されがちだが、そこには哀調を伴った坑夫たちの肉声が響いているのである。

また足尾銅山の坑夫からの聞書きという体裁をとった、江見水蔭「足尾銅山坑夫の話」⁽²⁾には、次のような坑夫の声が書きとめられている。

昼間十二時間穴の中で暮らすのですから、日輪を見る事が出来ぬ訳です。一処に行つた信州と言ふ男が、しみどゝ愚痴をこぼして「こんな事ならあちらに居た方が甘い物が食へて体も楽だ」あちらとは監獄の事です、何んと驚くではありませんか。

(江見水蔭「足尾銅山坑夫の話」)

ここで信州と呼ばれる坑夫は、かつて自身が身を置いた獄中と現在の足尾銅山の環境を比較し、前者の環境の方がまだ楽で

あったと述懐している。信州の発話は、坑夫という立場から、階級的に浮上することの困難な事情もあつて、いかんともしがたい生活の現状を嘆く日常言語のジャンルの一つである「愚痴」として、語り手に分類されている。

哀調を帯びた鉱山節や坑夫の生活を嘆く愚痴は、急速な近代化を推し進めるこの国の産業構造の末端から響いた軋みである。彼らは生活の悲哀を唄い、どうにもならない現実に対して弱々しく愚痴をこぼすことで自らを慰めるほかなかった。

またその一方で、鉱山の外の人間から坑夫は、「人を殺したり、放火をしたり、暴動をしたりする謎の人間」(平沢計七「坑夫の生活」⁽³⁾)のようにみなされている。粗暴で荒々しい坑夫像も、新聞報道等のメディアを中心に広く流布していた。



足尾銅山鉱夫となるの記

悲哀を込めて鉦山節を唄い愚痴をこぼす弱々しい坑夫と、粗暴で怖ろしい坑夫——こうした鉦山労働者の二面性をつぶさに描出した文学作品として宮嶋資夫の『坑夫』（一九一六年一月、近代思想社）が挙げられる。『坑夫』の登場人物をみると、本作の主人公・石井金次が「世間からは唯兇暴の一語を以て評し去らるべきあの人物」（堺利彦）⁵、「乱暴者として世を終つた」（大杉栄）⁶としてその粗暴さが強調される一方で、それと対照的に他の坑夫たちは「虚偽怯懦権力に媚び、友を売つて恬然たる、無恥無氣力の労働者」⁷として位置づけられてきた。

また『坑夫』をめぐる先行論においては、その粗暴さが強調される石井金次の形象をめぐって検討が重ねられてきた。佐藤勝は、石井金次の行動様式が、都会からの排除、資本家による詐欺、足尾鉦山暴動の敗北と仲間の裏切り、恋の破綻という四つの外在的条件に規定されていることを明らかにしている。そして森山重雄は、石井金次の疎外の構造を「まず仲間を疎外し、次には仲間から疎外され、ついにはかかる自己をも疎外してしまふ」という三段階において把握している。それに対し中山和子は『坑夫』の可能性を「政治と文学」の観点から捉えなおし、石井の「激しい憎悪と軽蔑とを込めた絶望の訴え」¹⁰として位置づけ、同時代における「実行と藝術」の影響を重視する森山との間で論争に発展した。また石井の「沈鬱」の分析を行った中村三春の論考や、千葉正昭による石井金次の「獣性」の分析などの議論が展開されてきた。

一方で石井金次以外の弱々しい坑夫たちのありようは、先行論において後景に追いやられてきたといえるだろう。本論のねらいは、これまで「卑屈」の一言でもつて切り捨てられてきたこれら弱々しい坑夫たちの存在を浮上させ、彼らと石井金次との間でどのような葛藤が繰り広げられたのかを考察することにある。その際に非常に示唆に富むのが、次の黒古一夫の指摘である。

私の判断では、この宮嶋の小説世界における〈日常生活〉の喪失こそ、宮嶋の政治性を反映し、また彼の文学の根幹に横たわる重要なフアクターに他ならないと思うのである。／宮嶋の小説世界の主人公達は、決して〈生活〉を掌中にしていない。彼らは〈日常性〉の環から逃れようとする意志を強固にすることで、その存在を主張するのである。この宮嶋文学の一大特徴は、処女作『坑夫』の主人公の石井金次の造形から始つていえると言える。

（黒古一夫「宮嶋資夫序説——〈日常性〉の喪失」）

黒古の指摘するように、『坑夫』の主人公・石井金次は〈日常生活〉を忌み嫌い、なかば追い立てられるように破滅的な生に身をゆだねている。それでは石井以外の弱々しい坑夫たちの場合はどうか。彼らは必死で日常生活に縋りつこうとし、そうした日常を固守するためには、本作の末尾で描かれるような陰惨

な暴力すらも厭わない存在なのである。そうした日常性への姿勢をめぐり石井とその他の坑夫たちの間には、大きな隔たりがあるのだ。

そして彼らの日常を支え、その悲哀を表白するスタイルこそ愚痴であったのではなかったか。『坑夫』に描かれているのは、坑夫たちの愚痴や不平といった日常言語のジャンルをめぐる闘争なのである。さらに、それは宮嶋の『坑夫』が生まれる母胎となった近代思想社の言語戦術に接続していくと考えられる。以下、考察を試みていきたい。

2 石井金次の言語戦術

『坑夫』の舞台は、常陸にある「池井鉾山」という架空の鉾山である。田上貞一郎の調査によつて、そのモデルは茨城県七会村(現・城里町)にかつて存在した高取タングステン鉾山であったことが明らかになっている。黒古一夫編「宮嶋資夫年譜」⁽¹⁷⁾によると、宮嶋は一九〇九年、数え二四歳の時に「茨城県水戸市郊外で親戚の経営していた高取タングステン鉾山の事務員」となり、翌年鉾山から帰り上京している。タングステンは、軍備拡張に邁進する日本において、兵器製造の側面から特に注目された鉱物であった。豊原信一郎著『タングステンとモリブデン』⁽¹⁸⁾(二九一六年)には、次のような記述がある。

換言せばタングステンを含有するが故に鋼の硬度を増大し、高温度に於てもよく其鋼の碎硬性を維持する特性を有すればなり、且又タングステンスチールは製砲、製艦等兵器の製作上一刻も欠く可らざる極めて重要な材料たるが故に軍器製造工業独立問題の喧伝せらるゝの今日、有識者のタングステン原鉱に注目怠らざる所以の者又以て思ひ半ばにすぐる所あるべし。

(豊原信一郎『タングステンとモリブデン』)

硬度と耐熱性に優れたタングステンは、近代兵器の生産に不可欠な鉱物であった。ことに第一次大戦開戦後、「時局の進展するに従つて兵器火薬の材料品相場は一斉に暴騰」⁽¹⁹⁾することとなる。タングステンを産出する鉾山が高取鉾山も含め国内にわずか四カ所ということもあり、「時局」を鑑みた政府は、一九一五年、突然輸出禁止を命じた⁽²⁰⁾。そうした状況のなかで、タングステン鉾山では労働環境への投資と釣り合わぬ、無理な増産計画が練られることとなる。むろんその皺寄せが向かうのは、末端の労働者である坑夫たちのものであった。『坑夫』には、鉾況が盛んになり、坑夫たちの生活環境の整備がまにあわない飯場の様子がありありと描かれている。

事務所では堀進を急ぐ為に、どし／＼人を増すので、飯場にも長屋にも坑夫は一杯になった。風通しの悪い沢合に建

てられたそれらの家の上を、日中は暑い日が容赦なくかつかと照りつけるので、夜になつても家の中はむん／＼してゐた。そればかりでなく裸のまゝで寝る人達の汗や脂肪を思ひ切り吸ひ込んだ夜具や、周囲の羽目にぶら下げた汚れくさつた仕事衣からは、たえず臭い匂を放つてゐるので、室の中にはむかつくやうないきれが一杯にたゞよつてゐた。生温くほてつた真黒な畳の上に、坑夫等がべと／＼に汗をかいたまゝごろ／＼寝転んでゐる有様は、人間の家と云ふより全く豚小屋に近いものだつた。

『坑夫』

こうした劣悪な生活環境で起臥する坑夫たちの口からは、当然ながら「あゝ畜生ツ苦しくつて寝られやしねえツ」といった愚痴がこぼれる。しかし、これら坑夫たちによる愚痴の合唱に、本作の主人公である石井金次は決して加わらない。なぜなら石井は「毎日同じやうに愚痴や泣言ばかり繰り返してゐる仲間達がごちやごちや集まつてゐる、埃っぽい騒々しい飯場へ帰るのが何よりもいや」だからである。日常的な生活環境への不満を言語化することは、石井にとつてもっとも忌むべき行為として位置づけられているのだ。

本作において、一貫して石井金次は愚痴をこぼさない労働者として造形されている。もっともこうした石井の態度は、自らの不満を言語化する場合に、それを愚痴に分類することをかる

うじて回避することによつて、成立しているのだ。飯場において石井が不満を漏らす、次の場面をみてみよう。

「あゝあ、つまらねえな」思はず大きな声で「石井は——筆者注」怒鳴つた。

「何がよ、兄弟」と側にゐた太つた男がきいた。

「だつてよ、考へて見ねえ、俺たちや何だつて此んな馬鹿げた苦しい目にばかり逢はなきやならねえんだ、蒼くなつて働いてよ、間誤つきや岩に打つつぶされて、雨の降る晩に冷てえ土ん中に埋められちまふなんて……それが当りめえの事なのか、鉦主は毎日甘い酒を飲んで美しい女を抱いてやがる……下らねえ端た錢の愚痴なんかこぼす時ぢやねえや。手前達やみんな寝呆けてやがら」とむか／＼する思ひを一ぺんに吐き出すやうに云つた。

『坑夫』

ここで石井は、坑夫の悲惨な境涯を嘆いているが、一見するとこの発話は他の坑夫たちの発話と同様の愚痴に分類されかねない危うさを内包している。しかしそれに続けて、「下らねえ端た錢の愚痴なんかこぼす時ぢやねえ」と、愚痴の発話主体に他の労働者たちを位置づけ、自身の発話をそれと差異化することにより、愚痴をこぼさぬ主体としての卓越した自身の位置を担保しているのである。そしてこの石井の発話は、石井に共犯

的な語り手により、「むか／＼する思ひを一ぺんに吐き出」すといった愚痴ならざる発話として分類されている。

人間が他者に向けて発話をする際になされる、聴き手や話者自身によるその発話のジャンルの分類は、対話において重要な意味を持っている。同じ発話内容であっても、例えばそれが真剣な「抗議」として聴かれた場合と、「愚痴」として聴かれた場合とでは、その発話の価値は大いに異なるだろう。そして社会的に下位に位置づけられる「愚痴」や「泣き言」といった日常言語のジャンルは、往々にして聞くに値しない発話として退けられてしまう。自身の発話がどのようなジャンルに分類されるのか、さらに誰がそうした発話のジャンル分類を担うのか——私たちの日常的な発話の背後では、無言のうちにこうしたジャンルをめぐる駆け引きが進行しているのだ。

そしてこうした日常言語のジャンル分類をめぐる闘争は、『坑夫』の様々な場面で展開されている。石井は、他者の発話を愚痴に分類する役割を積極的に担うと同時に、他の坑夫たちに対し、それらの発話を禁止する主体として機能している。『坑夫』の冒頭で、事務員の顔を蹴って鉱山を出ていくこととなった佐藤に対して共感を寄せる石井は、佐藤が「俺あ誰にも煽てられやしねえ」と否定するにもかかわらず、野田という坑夫を事件の扇動者であるとひとり決める。石井が佐藤とともに飯場に帰ると、野田を含む坑夫たちは「全く此の頃のやうに鉱石の買ひ方が矢筈しくつちや、こちとらとはとてもやり切れねえ。岩片^{ずり}

がちよいと這入つたつちや、二分引く、三分引くつて云はれたんぢや全く働く勢がありやしねえ、第一飯の喰ひ上げだ。一体此の山の現場員なんか労働者を馬鹿にしているからいけねえんだ。佐藤が怒つたなあ当り前だ、なあ兄弟達」と饒舌に喋りたてている。これに対し、石井は次のように挑みかかる。

「お前は随分よく喋舌つて人を煽てるけど、てめへちやまだ何にもした事がねえな」とこんどは攻めるやうに言つた。「だつて兄弟、話をしなけりや判らねえぢやねえか、此頃の鉱量係が余りに酷過ぎるからよ」

「ぢやお前はこゝへ何か愚痴をこぼしや、何うにかなる気であるのか、下らねえ野郎だな、お前達が泣き言をいやあ言ふ程見張の奴等あまだいぢめても大丈夫だと思つて高を括つてら、彼奴らあ何でも癪にさはつたら黙つて睨みつけて、ダイの一本も叩き込んでみる、慄へ上つて云ふ事を聞かあ、お前みたいに人計り煽てたり、見得で理窟を言つたつて何になるもんか、つまらねえ事あよせつてんだ」

『坑夫』

野田の饒舌な発話は、石井によって一方的に「愚痴」や「泣き言」に分類されている。興味深いのは、愚痴の禁止とともに石井の提示する代案が、「癪にさはつたら黙つて睨みつけて、ダイの一本も叩き込」むといった行動的なものである点だ。石

井の野田に向けて提示する枠組みのなかでは、饒舌な愚痴と沈黙を伴う行動とが対置されており、ここに日常的言説をめぐる闘争が展開されている。

佐藤勝⁽²¹⁾は、この場面の石井と野田の対決が「勇気と怯懦の対立」という倫理的な課題以上のもの——言いうべくんば自覚する少数前衛が大衆密着の情勢優先かという当代における戦術論の見取図を反映するもの——であったとしている。大逆事件以降のいわゆる〈冬の時代〉の戦術論として、近代思想社内部における大杉栄や荒畑寒村に代表される「無政府的個人主義」と、堺利彦の「多数平凡主義」⁽²²⁾との対立があり、『坑夫』にもそうした文脈が流れ込んでいるという佐藤の指摘には説得力があるだろう。しかし、ここで重視すべきはそうした運動の戦術論をめぐる作品外の文脈が『坑夫』という小説に形象化される際に、愚痴という日常言語のジャンルをめぐる闘争として表れているという事実であろう。換言すれば、日常言語をめぐるジャンル分類は、初期社会主義をめぐる主戦場の一つとして認識されていたのである。この近代思想社と愚痴をめぐる問題については、次節で詳しく考察してみたい。

さて『坑夫』における飯場は、坑夫たちの日常生活の愚痴が飛びかうトボスであり、石井はそこに戻ることを避けることで孤立を深めていく。しかし次に引く場面では石井が飯場でこぼされる愚痴への積極的な介入を試みている。

「あゝあ、稼がにやらねえし、借金にやなるし全くいやになつちまうな、——脱走でもしなきゃやり切れねえや」と誰か生ぬるい声でつぶやくやうに言った。

「まつたくよ、此の頃の銭にならねえつたらほんとに酷いな、そのくせ鉦^{かね}は随分出るんだけど」向き合つて寝てゐた男が、勢のない声で合槌を打った。

「なあに、鉦主が一人でうまくやつてるのよ、手前が儲けせへすりや好いもんだから、岩が堅くなるのに間代を下げやがるし、鉦石は矢筈しい事ばかり云やがるしよ、癪にさはる事ばかりだ」

「ストライキでもやらねえかなあ」と誰かが云つたので、皆が笑つた。石井はその時まで黙つてゐたが、「おい皆なもう下らねえ愚痴は止せよ、俺あ聞いてる丈けでも頭が痛くなら、お前達や意気地なし野郎ばかりだから、ストライキでもやらねえかなあ、なんて人ばかり当てにしてやがら、——株つたがりがよく揃つてら」と大きな声で我鳴つた。

『坑夫』

ここで坑夫たちは、搾取を強める資本家に対する不満を吐露するとともに、行動としてのストライキをほめかしている。それに対しそれまで黙つて聞いていた石井は、これらの坑夫たちの発話を「下らねえ愚痴」として位置づけてそれを禁止し、

彼らの他力本願な姿勢を糾弾する。しかし、そこで愚痴をこぼしていた坑夫の一人が、石井に食ってかかる。

「何もお前、愚痴を云ったつて俺達の勝手ぢやねえか」

「いけねえツ、俺あ愚痴を聞くなあ大嫌ひだから止せつてんだ、それでも云ひたきや俺と喧嘩しろツ」と彼れは突然起き上った。然し誰れも相手になる者はなかつた、いやな顔をして苦笑しながら、「まあいゝや、お前一人で威張つてろよ」と誰か云つたがそれきり皆黙つて了つた。やがて一人減り二人減りして皆何処へか出て行つて了つた。

『坑夫』

以上の愚痴をこぼす坑夫たちと石井との対決は、本作における日常的言語をめぐる闘争において重要な意味を持つている。石井は、坑夫たちの発話を一方的に愚痴に分類し、同時にそれを禁止するという戦術をとつてきた。それに対し、ここでの坑夫たちは「愚痴を云つたつて俺達の勝手」と、自らの発話のジャンルをすすんで「愚痴」と位置づけ、その発話の権利を主張するという新たな反応を見せる。すなわち発話のジャンル分類の権能を、石井の手から奪い返すことで、これまでの石井の発話をめぐる戦術に対抗しているのである。

かくして石井は、「愚痴」の代わりに「喧嘩」をすることを彼らに提案する。これは、野田に対してかつて石井が迫った「愚

痴」をこぼすか、「ダイの一本も叩き込」むかという、言語と暴力の対立軸の反復である。だが自らの愚痴を発話する権利を主張する坑夫に「お前一人で威張つてろよ」と一笑に付されてしまうことにより、石井の提案は空振りしてしまう。石井の提示した「愚痴」か「喧嘩」か、という枠組みそのものが、坑夫たちによつて拒絶されてしまうのである。

こうした石井金次の日常言語に対する闘争の敗北と、それとともになう孤立こそ、石井の殺害という『坑夫』の陰惨な結末を準備しているのである。以上を確認したところで、次節では本作に深く影響を与えていると考えられる雑誌『近代思想』の言説の分析を通して、愚痴をめぐる闘争を別の角度から検証していきたい。

3 『近代思想』と愚痴

『坑夫』は、一九一六年一月、近代思想社から出版された。本書の序文は大杉栄と堺利彦が執筆しており、近代思想社系の人々との密接な関係が窺える。本節では、『坑夫』と近代思想社との影響関係を、日常言語である愚痴の視座から考察する。

一九一二年一〇月、大杉栄や荒畑寒村らを中心に、近代思想社から刊行された雑誌『近代思想』は、大逆事件を経た（冬の時代）のなかで、社会主義者たちの文学を通じた橋頭堡の確立を目指していた。

村田裕和は、雑誌『近代思想』の言説の特徴について、「ひとことといえ、〈介入〉であつた。彼らは文学を過渡的な場所とみなしていたが、それを局外から批評するのではなく、相手のフィールドの一步内側へ入りこんで、そこに亀裂を走らせようとしたのである」と分析している。

ここで興味深いのは、『近代思想』の文壇への〈介入〉が、その創刊号から日常言語である愚痴という切り口からなされていたという事実である。『近代思想』創刊号には、文芸時評として荒畑寒村の「九月の小説」⁽²⁴⁾が掲載されている。そこで荒畑は志賀直哉の「大津順吉」〔中央公論〕一九二二年九月を次のような言葉で評価している。

藝術品として優れた作物である許りでなく、個人の自由、人格の権威の上に積み重ねられた家庭の邪曲に対して、社会的にも個人的にも今迄睡つて居た青年の間にこういふ作の現はれたのは、甚だ面白い意義ある事だと思ふのである。（中略）勿論、安藝者にフラれた愚痴より外書く能のない文士から、異端外道視されるのは承知の上で。

（寒）「九月の小説」

荒畑は、志賀の「大津順吉」を「個人の自由、人格の権威」の側面から評価する一方で、文壇の大勢を占めるのが「安藝者にフラれた愚痴より外書く能のない文士」であることを論難し

ている。ここでの荒畑の批判は、永井荷風、久保田万太郎、小山内薫、長田幹彦らに向けられており、のちの赤木桁平による「遊蕩文学撲滅論」⁽²⁵⁾の論点を先取りしていると言えるだろう。また荒畑は、一九一三年の『近代思想』に掲載された「二月の小説」⁽²⁶⁾においても、文壇に対して「愚痴」という語を用いた糾弾を試みている。

生活が苦しい、家庭が面白くない、家を飛び出して酒を飲む、女を買ふ、そういう生活を描写し出してから文壇は約十年に垂々とする。そして未明なんていふ人はまだそんな事を書いて居る、（中略）君等の衆愚と罵つて居る多数の民衆さへも、もつと深い、大きな、意義のある煩悶をし、もつと自由な、幸福な、合理的な生活をなさんとして、惨ましい犠牲を払ひつゝ努力を続けて居るではない乎。こんなものが小説なら、愚痴な女の泣言は不朽の傑作だ。

（寒）「二月の小説」

荒畑は、「文壇」においてなされる「生活が苦しい、家庭が面白くない」等々の日常生活に根差した発話を、「愚痴な女の泣言」以下のものとして切り捨てている。「文壇」で流通する「愚痴」のような文学作品に対する仮借ない批判には、荒畑の当時の文学観が表れている。荒畑は「藝術か戦闘か」⁽²⁷⁾においても「多くの創作家は、未だに無関心と耽美の夢から覚めない。彼等が

江戸時代の追想に酔ふて居る時、時勢は如何に先覚者の犠牲に依て進歩しつゝある乎。彼等が只管に耽美の夢を追ふて居る時社会は如何に衆愚の努力に依て進歩しつゝあるか」とし、「不義と戦ひ奸悪に反抗する勇氣が無い」ような文学者たちを追及している。それらの批判対象の文学者を攻撃する際に、相手の言語を「文学」にいたらしめ日常的な発話、すなわち「愚痴」に括りこむという戦術が採用されていたのである。

また論敵を批判する際に相手の言説を愚痴に振り分ける戦術とは対照的に、自分自身の革命家としての未熟さを、なかば自虐的に愚痴と位置づけていく言説も、雑誌『近代思想』には掲載されている。社会主義運動とは一定の距離を保ちつつ、『近代思想』の執筆陣に加わっていた生方敏郎は「虫けらの心——大杉兄へ——」を、一九一三年九月の『近代思想』に発表している。

無暗に情けなくなつたんだ。

元来俺はバカだと云ふこと、

生まれてから今日まで何をクダらぬことをして来たらうと云ふこと、

平凡で単調な、苦も楽もない此生活

いつまで行つたら何うなるだらうと云ふこと、

近所の人は皆理屈ばかり云つてやがるし、

卅日には勘定とりにきやがるし。

俺はつい先達までこんなグチは思はなかつた

今月は午の一白水。星が悪いに違ひない。

（生方敏郎「虫けらの心——大杉兄へ——」）

「あはれ、このむだ花の蜜をあさる／虫けらの徒の存在を許せ。」という文句からはまるこの詩は、前月号の『近代思想』に発表された大杉栄の詩「むだ花」の「むだ花の蜜をあさる虫けらの徒よ」という文句に対する応答となつている。大杉の「むだ花」が「生のあきらめ」を胸に抱え、「生の闘ひ」を回避する人々を嘲った詩であつたのに対し、生方はその批判を内面化し、自らの日常生活の維持に汲々とするありさまを「こんなグチ」として露悪的に自己言及している。換言するならば、自身に与えられるであろう「こんなグチ」という他者からの糾弾を先取りし、自ら言語化するという構図である。

さて『近代思想』に発表された創作において、愚痴はどのよう表現されたのだろうか。荒畑寒村訳「主の家にて」³⁰には、貧しく惨めな村の老祭司神父ジョンが村人の悔悛の秘跡を促す場面が描かれている。

『聖なる父、わたしの罪は多うございます。わたしには何から云ひ出して宜いやら、解らない位です……。わたしを助けて下さい……。わたしに尋ねて下さい。』

『あなたは神の全知なる命令に就て、愚痴をこぼした事がありますか。』

教父ジョンは、やや迫り来る暗黒に因て隠されて居る、屋根のヒズと、不完全とを見上げた時、こう聞き始めた。

『はい、聖なる父、わたしは懺悔します。わたしは愚痴をこぼし、苦情を申しました。そして私は大いなる罪人でございます。』彼女の唇は、痙攣的に動き、焦がすやうな涙は、その黒い皺寄つた頬を押し流れるのである。

（荒畑寒村訳「主の家にて」）

帝政期ロシアを舞台にしたこの作品は、圧政下にあつて宗教に頼るほかない貧しい人々を描いている。そのなかで「愚痴」は「大いなる罪人」による発話ジャンルとして告解されている。むしろ、本作が作者不明の翻訳作品であり、舞台が日本でないことを考慮に入れてもなお、前近代的で「無智」とされた登場人物の発話として愚痴が位置づけられることの効果は見逃すことができないだろう。

さて一九一四年九月、第一次『近代思想』は廃刊となる。そして同年一〇月より創刊された『平民新聞』が大杉らの主な活動の舞台となるが、発禁が相次ぎわずか六号をもつて廃刊となってしまう。そこで再度、一九一五年一〇月より第二次『近代思想』として復刊されることとなる。この際に、執筆者として宮嶋資夫も加わっている。

第二次『近代思想』においては、以前よりその傾向がみられた愚痴への対決姿勢が、さらに先鋭化されることとなる。一九一五年一〇月号に掲載された荒畑寒村「英国大罷工の背後」⁽³¹⁾においては、南ウエールズの坑夫によるストライキに慌てふためくジャーナリズムに対し「彼の紳士閥新聞の愚痴を軽蔑を嗤ふのである」と所見が述べられ、ブルジョアジーのメディアが「愚痴」として位置づけられている。

また同号に掲載されている「僕等の生活」と題された記事には、『近代思想』を愛読する労働者たちの手記が並んでいる。それらの『近代思想』の読者である労働者たちの告白は、まさしく愚痴をめぐる言語戦術を、理想的に内面化したものであつたといえよう。たとえば「最も手近な敵」と小題の付されたある職工の手記⁽³²⁾では、食事の際の事務員と職工の待遇の違いへの不満が述べられている。

職工の不平が耳に入つたと見えて、重役が以後一切の平等を宣言せられ（表面だけにしても）事務員殿もコンクリートの上で腰掛で食事することにされた。二人の事務員がこの愚痴をこぼして、『第一田中のやつなぞが職工の癖に生意気が過ぎる』といった言葉が終らない中に、二人の会話を遮つたのは年若き労働者である。（中略）是が僕の会社での事務員である。けれども、こんな横暴は、僕の会社の事務員のみに限るのだろうか。そして吾々労働者の最も手

近な敵は、先づ此等の事務員ではあるまいか。

（僕等の生活）

この手記において職工の不満の発話は「不平」であり、「手近な敵」として見做された事務員の発話は「愚痴」として、その発話のジャンルが明確に峻別されている。読者もまた、『近代思想』にあらわれた日常言語をめぐる戦術を学習し、労働者としての立場からそれを行使するさまが看取されるだろう。日常言語をめぐる戦術において、この職工と『坑夫』の石井金次との距離は接近しているのだ。

そして本節の最後に、『近代思想』において最も明確な形で日常言語への介入を図った論考として、『坑夫』の刊行と同じ一九一六年一月に掲載された荒川義英「反逆者と不平家」に触れておきたい。ジョルジュ・パランド著、大杉栄訳「叛逆者の心理」の影響下に書かれたこの論考は、「反逆者」と「不平家」概念の差別化が試みられている。社会の不均衡に接した際に、「最も精悍なるものは一挙に此の不均衡を矯正しやうとする。是即ち反逆者である」とされ、その対極に在る「最も意気地なきものは、最後まで、持ちこたへて黙つて墓へ持ち込んでしまふ」という。そして、その中間に位置する存在が「不平家」であると荒川は規定している。

況して此の、不平家の場合になると、愚痴をこぼす事が甚

だ大きな快感となるのである。自己の弱点を語ることが、最も好い鞭撻であるとの誤算の下に、次第に自己の弱点を誇大に発表することを厭ふ。然るに是は、実は自己の行為の向上の苦闘に対する予防である場合が多い。

（荒川義英「反逆者と不平家」）

荒川の論考は、「反逆者」に到達することができず、自己の弱さを表白することを目的化してしまつた「不平家」の発話を「愚痴」として定義している。それに対する「反逆者」は、「あまり深く自己の行為を説明しない」寡黙な存在として定義される。ここには『坑夫』における饒舌に愚痴をこぼす不平家の坑夫たちと、沈黙を守る反逆者としての石井金次といった構図を重ねることができよう。

以上、考察してきたように、近代思想社の批評言説では、日常言語ことに愚痴への積極的な介入がなされてきた。『坑夫』における石井の愚痴への嫌悪と抗争は、ともすれば登場人物の生得的な気質へと回収されがちであるが、実はこうした近代思想社におけるディスコースの布置のもとに成立していたのである。

4 足尾鉾山暴動の時間

日常生活に根ざした発話である愚痴は、「人間の弱点、少し

く失敗」をすると「愚痴の百遍も繰返」⁽³⁵⁾すと語られるように、失敗者や敗残者の発話という側面も有している。⁽³⁶⁾『坑夫』に描かれる鉱山労働者たちの一部は、一九〇七年の足尾銅山暴動において敗北した人々であった。棚沢健は、『坑夫』が「足尾銅山暴動を物語の背景に、そして暴動以降をテーマにしつつ、「暴徒」として語られた坑夫に焦点をあてる」作品であったと指摘している。

一九〇七年二月四日、賃上げをめぐる交渉がこじれた足尾銅山に火の手が上がった。その第一報を当時の新聞記事は次のように伝えている。

足尾銅山坑夫は、過日来しきりに賃金引上げ運動をなし居りしが、事ついに破裂し、今四日午前九時半、同鉱山通洞内一番坑内に在りし坑夫五百余名、同二番坑内に今朝入坑したる坑夫四百余名、都合九百余名合体して、外部へ通信の出来ざるよう電線を残らず切断し、坑内を暗黒にし、すべての見張所を爆裂弾にて破壊し、すこぶる大騒擾を極め、同時に四百余名の坑夫、郊外に密集して熾んに声援を与え、暗黒なる坑内は実に悲惨なる修羅場と化せり。足尾分署の警察官総出、取り鎮めに尽力せるもなんらの効なし。

(賃上げこじれ、坑夫九百人が暴動)⁽³⁸⁾

この暴動で足尾銅山は全山廃墟と化すことになった。ことを

重く見た政府の指示により二月七日、高崎歩兵第一五連隊は三個中隊を組織し、⁽³⁹⁾ただちに足尾銅山に派兵を行う。さらに戒厳令が敷かれ、足尾坑夫約六百名が検挙される形でようやく収束に至ることとなった。『坑夫』の石井金次は、かつて足尾銅山暴動の英雄であった。

野州の山に大暴動の起つた時も、生れつきしな／＼と機敏な身体を持った彼れは、暴動の主唱者よりも勇敢に闘つた。手から離れると直ぐ爆発する導火線の短いダイナマイトを投げつけ、家を焼き人を傷つけて、血と火の漲る叫喚の裡に、全身に充ち渡つた反抗の念を溶け込ませたが、怖ろしい軍隊の力に圧迫されて重だつた者の多くが捉へられたときも、素敏い彼れは、山伝ひに巧みに逃げ終せた。

『坑夫』

この暴動を鎮圧するために動員された「怖ろしい軍隊の力」は、坑夫たちの労働によって産出されたタングステン製の武器によって支えられていたということに、この時代の坑夫が置かれた残酷な疎外状況が浮かび上がる。そして石井は大半の坑夫たちが検挙されるなかで、軍隊の手を免れ「山伝ひに巧みに逃げ終せ」ることができた暴動の生き残りであった。『坑夫』の冒頭で佐藤に対して「もうそろ／＼野州花も咲き出すから、足尾坑夫も巣立ちをする時分だなあ」と語っているように、国家

権力の包囲網を潜り抜けて検挙を免れた石井は、今なお足尾銅山の暴動の時間を生きているのである。

一方で、軍隊の力をありありと見せつけられ敗北を味わった坑夫たちは、弱々しい敗残者としての存在と化すこととなる。本論の冒頭で触れた知久泰盛は、足尾鉾山暴動後の弱々しい坑夫たちの姿を目にした驚きを、次のように書きとめている。

予は坑夫生活を為して数日の後殆ど生命がけの仕事をしてゐるこの労働者に想像した程の放胆な気力の無いのに一驚した彼等は他の労働者の空元気でも威勢の好いのに引きかへ雌猫のやうに穏かなのだ斯うした人々が嘗つて去四十年の暴動を起した杯とは思ひも寄らぬ事であつた。

（知久泰盛「足尾銅山鉾夫となるの記」⁽¹⁰⁾）

こうした点を見るならば、『坑夫』において足尾暴動の時間を生き続ける石井金次と、暴動鎮圧後の時間を生きた坑夫たちのディスコミュニケーションこそ、『坑夫』における愚痴をめぐる葛藤の基底にあったと考えられる。

過酷な労働環境に対して愚痴をこぼすのをやめ、「ダイ」を資本家に投げつけるという選択肢は、物語のわずか数年前には、現実にあつたものであつた。しかし坑夫の気質や鉾山労働をめぐる制度も、足尾銅山暴動を境に変容してしまうこととなる。

二村一夫の研究⁽¹¹⁾によれば、足尾銅山暴動後、資本家の手により徳川時代以来の伝統を持つ友子同盟と飯場制度の改組・再編が行われることとなった。さらに石井金次のような渡り坑夫たちは、暴動後に取り締まりの対象として警察に睨まれる存在となったのである。⁽¹²⁾

一九〇七年の足尾銅山暴動を境に、日本の鉾山労働の環境は大きく変化することとなった。『坑夫』に描かれた鉾山労働者たちの日常生活の愚痴の背後には、こうした暴動の敗北の記憶が流れているのである。

5 おわりに

本稿では、鉾山労働者たちの愚痴の分析を通して、『坑夫』における日常言語をめぐる葛藤を読み解いてきた。『坑夫』においては、労働者たちの発話をどのようなジャンルに分類するかをめぐる暗闘がなされていた。そして日常生活の悲哀を嘆く労働者たちの発話は、石井金次によって「愚痴」や「泣き言」に分類され、聞くに値しないものとして処理されてしまう。資本家との直接的な闘争ではなく、こうした労働者たちの日常言語への介入こそが、『坑夫』で描かれた運動戦術なのであつた。さらに『坑夫』におけるこうした日常言語への介入は、「反逆者」の発話と「不平家」の発話を峻別し、後者を「愚痴」と分類して退ける近代思想社のメディア戦略を引き受けたものであつた。

そして愚痴が敗北者や失敗者の發話であるという意味において、『坑夫』に描かれた愚痴には、一九〇七年の足尾銅山暴動の敗北の記憶が流れ込んでいる。

見方を変えるならば『坑夫』に描き込まれているのは、石井金次に形象化された近代思想社の理想主義が、運動に転化することが困難な労働者たちの日常的不満を、「愚痴」や「泣き言」として酷薄に切り捨ててしまう過程であった。小説の末尾で語られる石井の破滅は、そうした介入戦術に伴う孤独が、必然的に招いてしまった悲劇的結末である。それを鉱山労働者たちの「卑屈」な氣質に短絡するのではなく、日常言語をめぐる闘争の場において捉えなおすことにより、本作の持つ可能性の一端が開かれると考えている。⁽¹³⁾

注

- (1) 知久泰盛「足尾銅山鉱夫となるの記」、『人生探訪変装記』、一九一四年一月、互盟社。
- (2) 江見水蔭「足尾銅山坑夫の話」、『避暑の友』、一九〇〇年五月、博文館。
- (3) 平沢計七「坑夫の生活」、『労働者の叫び』、一九一九年六月。
- (4) 宮嶋資夫『坑夫』、一九一六年一月、近代思想社。なお引用は、『宮嶋資夫著作集 第一巻』（一九八三年四月、慶友社）に依った。
- (5) 堺利彦『坑夫』の序、『坑夫』、一九一六年一月、近代思想社。引用は、『宮嶋資夫著『坑夫』復刻版』（一九九二年七月、法政大学西田勝研究室・不二出版）に依った。

- (6) 大杉栄「序」、『坑夫』、一九一六年一月、近代思想社。引用は、『宮嶋資夫著『坑夫』復刻版』に依った。

- (7) 『坑夫』出版広告、『近代思想』、一九一五年二月。

- (8) 佐藤勝『坑夫』論、『日本近代文学』、一九六五年一月。

- (9) 森山重雄「宮嶋資夫論——刃物の思想——」、『実行と藝術——大正アナーキズムと文学——』、一九六九年六月、塙書房。

- (10) 中山和子「宮嶋資夫論」、『文学』、一九六五年十一月。

- (11) 森山重雄「宮嶋資夫」、『日本文学』、一九六二年一〇月。

- (12) 『坑夫』をめぐる論争については、黒古一夫「宮嶋資夫序説——「日常性」の喪失——（『大正労働文学研究』、一九七八年一〇月）に詳しい。

- (13) 中村三春「宮嶋資夫『坑夫』における〈沈鬱〉の様態——「カインの末裔」を補助線として——」、『日本文化研究所研究報告』、一九八七年一月。

- (14) 千葉正昭「宮嶋資夫『坑夫』の《獣性》——大正労働文学の嚆矢——」、『解釈』、二〇〇四年二月。ならびに「宮嶋資夫『坑夫』の超人性／獣性」、『国文学』、二〇〇九年一月。

- (15) 注12参照。

- (16) 田上貞一郎「宮嶋資夫『坑夫』の舞台」、『解釈』、一九七三年一月。

- (17) 黒古一夫編「宮嶋資夫年譜」、『宮嶋資夫著作集 第七巻』、一九八三年一月、慶友社。

- (18) 豊原信一郎『タングステンとモリブデン』、一九一六年五月、工学書院。

(19) 「重石と水鉛」、『時事新報』、一九一五年一〇月五日。

(20) 「勃興せる重石採掘業」、『大阪朝日新聞』山陽版、一九一六年八月一七日。

(21) 佐藤勝「坑夫」「補注四七」、『日本近代文学大系五一 近代社会主義文学集』、一九七一年九月、角川書店。

(22) 堺利彦「大杉君と僕」、『近代思想』、一九一四年九月。

(23) 村田裕和「近代思想社と大正期ナショナリズムの時代」、二〇一一年三月、双文社出版。

(24) 寒（荒畑寒村）「九月の小説」、『近代思想』、一九一二年一〇月。

(25) 赤木桁平『遊蕩文学』の撲滅、『読売新聞』、一九一六年八月六・八日。なお、『遊蕩文学』の撲滅が収録された評論集『藝術上の理想主義』（一九一六年一〇月、洛陽堂）の「自序に代へて」において、赤木は次のように述べている。

予等が、夢寝の間にも猶ほ覺めてゐるものは、今すこしく生命の根底に突込んだ藝術である。言葉を換へていふと、一時の流行や、一時の好尚に司配されないだけの恒久性を保証された藝術である。かういふ意味の藝術は、疑ひもなく追懷哀愁のみをこゝとする情緒中心の藝術でもなければ、また愚痴愁訴をのみこゝとする生活中心の藝術でもない。

ここでもまた、「愚痴」が論敵を批判する際のキータームとして機能している点は、見逃せないだろう。

(26) 寒（荒畑寒村）「二月の小説」、『近代思想』、一九一三年三月。

(27) 荒畑寒村「藝術か戦闘か」、『近代思想』、一九一三年三月。

(28) 生方敏郎「虫けらの心——大杉兄へ——」、『近代思想』、

一九一三年九月。

(29) 大杉栄「むだ花」、『近代思想』、一九一三年八月。

(30) 荒畑寒村訳「主の家にて」、『近代思想』、一九一四年四月。

(31) 荒畑寒村「英国大罷工の背後」、『近代思想』、一九一五年一月。

(32) 「僕等の生活」、『近代思想』、一九一五年一月。

(33) 荒川義英「反逆者と不平家」、『近代思想』、一九一六年一月。

(34) 大杉栄「叛逆者の心理——ジョルジュ・パランド——」、『近代思想』、一九一四年四月。

(35) 今井雷堂『修養その日その日』、一九一二年二月、応来社。

(36) 一方で野中進は、ジャンルとしての愚痴の分析において、「愚痴によって開示される内奥とは「弱さ」のことに他ならない。（ただし内面が弱いのではなく弱さが内面化されるのだが）」（「愚痴について バフチンの「ことばのジャンル」論より」、『埼玉大学紀要』、二〇〇二年三月）と述べている。あらかじめ抱えていた弱さを吐露するから愚痴なのか、愚痴を通して弱さが内面化されるのかはここでは決しかねるが、いずれにせよ愚痴は「弱者」や「敗残者」に関わる発話なのである。

(37) 棚沢健「大正五年の坑夫——宮嶋資夫『坑夫』論——」、『国文学研究』、一九九七年一〇月。

(38) 「賃上げこじれ、坑夫九百人が暴動」、『東京朝日新聞』、一九〇七年二月五日。

(39) 「暴動ますます激化、軍隊三個中隊到着」、『時事新報』、一九〇七年二月八日。

(40) 注1参照。

(41) 二村一夫『足尾暴動の史的分析 鉱山労働者の社会史』、一九八八年五月、東京大学出版会。

(42) 『渡坑夫取締』、『大阪朝日新聞』、一九〇七年七月四日。

(43) 作者の宮嶋資夫に関しては、後年「愚・痴」(『仏門に入りて』、一九三〇年一〇月、創元社)という文章を執筆し、そこで次のように述べている。

カン口具をはめられた犬みたいに、餌も食へなければ喋れもしないこんな生活が、嗚呼いつまで続くのか。／云へる事は愚痴だけだ、愚痴ならば、先づ差支へないだらう。これが出版物取締と云ふ規則だから。／愚痴も云ひたくなくなつてしまつた時は、僕等は何をしたら好いか考へる。／それにしても如何に愚痴ばかり多い事か。／全く空を仰いで悠然と息をつきたくて堪らなくなつてくる。／が然し、これも一つの愚痴に過ぎない。

運動が困難な状況に際して再び宮嶋が「愚痴」の問題に向きあつたことは、興味深い事実であるが、本格的な考察には別稿を要する。

附記

引用に際して、漢字は旧字から新字に改めた。また「」内は引用者による注、／は改行を示している。本稿は二〇一五年二月二七日に立命館大学衣笠キャンパスにて開催された、第二一回占領開拓期文化研究会での口頭発表の内容を大幅に修正したものである。また発表に際しては、多くの貴重なご教示をいただいた。ここに記して感謝を申し上げたい。

プロレタリア文化運動と

“コミンテルン三二年テーゼ”

「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」の資料集成作業の中から

伊藤 純

一、はじめに

現在われわれは「昭和戦前期プロレタリア文化運動資料研究会」の資料集成作業として小樽文学館所蔵池田壽夫旧蔵書^{ひさお}^①、元関西大学教授浦西和彦先生所蔵資料など、主として全日本無産者芸術聯盟（NAPF）、日本プロレタリア文化聯盟（KOPF）関連の生資料約一万点の画像化、データベース化を行っている。

この過程で、それらの資料——ビラ、檄文、パンフレット、各種の機関文書などに、繰り返し出現する独特の定型的な言葉、論理展開に辟易しつつ注目せざるをえなくなった。一体これは何なのか、なぜこのような「同義反復」の氾濫が生じているのか。

しかもこれらは、一次資料、同時代資料であり、誰かが意図的に作成した虚構の文書ではない。この時代の多数の人々が「その気になって」時には危険を冒し、疲労や睡魔と闘いながら、

無償の正義感に燃えてガリ版（謄写版）を切って作りあげた歴史の実在物である。一体そこには何があったのかを、考えてみないわけにはいかない。

現時点では上記の集成事業は完成途上で公開に到っていないが、小樽文学館の「池田壽夫旧蔵書」（以下池田旧蔵書と略記）は同館で閲覧可能となっているので、主にそれらを参照して検討する。

二、日本プロレタリア作家同盟の文書に見る定型的表現

その言い回しの代表的な一例として池田旧蔵書所収の日本プロレタリア作家同盟「第六回大会中央委員会報告」^②という文書を例示しよう。この文書は小林多喜二が築地警察署で虐殺された三ヵ月後、未ださめやらぬ怒りと恐怖の中で書かれたもので



(図①)「第六回大会中央委員会報告」の表紙と目次部分。

あることは、注意しなければならぬ。原文は難読の謄写版印刷物であるが、その冒頭の部分を書き出してみる

……一九三二年から今日に到る期間を特徴づけるものは、国際的、国内的情勢の

義の一般的危機の条件下に於て、既に狹隘化した市場間に対立の極度の激化を導いた。

資本主義的安定の終焉は戦争の新たな週期への直接的な突入を意味する。……日本帝国主义は、今や北支進入を目前にして此の両帝国主義（*英仏・筆者注、以下同じ）との対立が激化し、アメリカ帝国主義との矛盾は太平洋をはさんで異常に激化し爆発はまさに点火せんとしつつあり硝煙は太平洋を掩はんとしつつある。

（……は中略を示す、以下同じ）

一九三三年の文書としては、よく十年後の戦争を予言していることが注目されるが、この種の文章の書き出し部分の定型が、十分に表出されている。すなわち「資本主義の一般的危機の深化で動乱は旬日に迫っている」、それにたいして「新興ソ連の社会主義の発展は目覚ましい」という対比的文言である。

三、プロレタリア美術家同盟の文書

同じく池田旧蔵書にある、文化聯盟傘下の日本プロレタリア美術家同盟の同時期の文書も、瓜二つの言い回しが氾濫している。さらにこの文書では、作家同盟文書では明確には言及されなかった「戦略の変更」という言葉が出現する。

異常なる変化である。資本主義の一般的危機の激化と社会主義的工業化、共営化及び文化革命の大綱領を巨人的テンポを以て遂行しつつあるソヴェート同盟にあつて、階級の最後の精算と、国の全勤勞人口を階級なき社会主義的意識・積極的建設者へ転化する事を目標とする第二次五年計劃が開始され、社会主義的世界革命の根拠地としての国際的威力が万国の労働者農民勤勞階級に確固たる道標と自信を与へつゝある。

他方資本主義世界においては、経済恐慌は益々激化し、……国粹主義、排外主義の必死的努力にも拘らず、不斷に成長しつつある世界経済恐慌は、生産の可能性と資本主



(図②)「新しい情勢と美術運動の新しい任務
1933・3・18／日本プロレタリア美術家同盟常任
中央委員会」

A. 戦争の拡大

と革命的危機

の切迫……新

しい情勢、それ

は「資本主義安

定期の終焉と

ソヴェート同

盟に於ける昂

揚」をもつて特

徴づけられて

居る。ソヴェー

ト同盟では第

一次五ヶ年計

画を四ヶ年に

完成し……第

は「戦略の変更」が説明される。

D. 我々の新しい任務……重要な問題——それは、プロレ

タリアートの戦略の変更に伴ふプロ文化・美術運動の新た

なる段階である。戦略の変更の問題とは、その基本的な部

分は、日本に於て当面する××（*革命）の性質に関する

規定を、「社会主義革命への強行的転化の傾向を持つブル

ジョア民主主義××（*革命）である。」と云ふ様に、最近

改められたことに最も関係して居る。このことは何よりも

先づ、日本における農業××（*革命）の意義と××（*

天皇）制の役割とを過小評価することから我々が脱却しな

ければならないことを要求する。

……我々は今まで「戦争とファシズムに対する闘争」を

我々の主要課題として来たが、日本におけるブルジョア

「地主的××（*天皇）制の比重が正当に評価された今日、

この課題は、戦争と絶対主義に対する闘争と改められなけ

ればならぬ。

二次五ヶ年計画の遂行へと邁進しつつあり……
しかるに資本主義世界では——経済恐慌の深刻化、帝国
主義諸国並びに植民地諸国に於ける××（*革命）的昂揚
の成長、帝国主義諸国家間の対立の一層の激化……かくし
て、資本主義の相対的安定の終焉の時期が到来した

ここでは、型の如く「資本主義安定期の終焉」と「ソヴェー
ト同盟に於ける昂揚」が述べられているが、さらに「D」章で

美術家団体の文書として見ると、奇異な感じが否めない。こ
の美術家団体の「外部」の何処かで何者かによって、運動戦略
の変更が決定されたのでそれに従って、直ちにこの美術家団体
でも考え方と行動を変えることが「要求」されていると会員に
対して下達しているのである。

ここで「我々の新しい任務」として指し示されている変更点
は要約すると――

①目ざすべき日本革命戦略の基本は、当面は近代的民主主義
を求める反封建革命であり、その過程で革命勢力の努力に
よって、社会主義を目ざす革命に変質させていく。

②従って、当面の闘争の相手は、封建的地主勢力と資本家勢
力の利益を代表する「天皇制官僚体制」である。

――という二段階革命戦略を指し示し、直接に社会主義を目ざ
す一段階革命戦略からの変更を告知している。

そしてこの告知は、コミンテルンの「日本問題テーゼ三一年
草案」から「三二年テーゼ」への変更に符節を合しているの
である。

四、「コミンテルン日本問題テーゼ」の変遷

コミンテルンは当初は、世界各国の社会主義運動を支援する
運動センターとして始まった。

しかし、現実には最も状況が切迫していると評価されたドイ
ツでさえ革命は失敗し、ヨーロッパを中心とした高度に発達し
それ故に体制の矛盾と行きづまりが極限に達しているはずの資
本主義国から革命が起こり、世界に連鎖するという「世界革命
のイメージは成立しないことが明らかになってきた。一九二八
年のコミンテルン第六回大会に登場したスターリンはこの「世

界革命」イメージをトロツキズム⁽⁴⁾として排斥し、資本主義諸国
家に取り巻かれた状況でも、一国で社会主義国家は建設できる
という「一国社会主義論」を主張し承認された。

この変化によってコミンテルンの役割は、世界革命の「輸出
センター」というよりは、世界の資本主義国の渦中で、一国だ
けの社会主義国家として生きて行かざるをえなくなった「ソビ
エト社会主義共和国連邦」を社会主義の前衛として擁護する「世
界共産党の総本部」へと変貌していった。そしてこのコミンテ
ルンは、ことに、帝制ロシア以来東北アジアで利害の対立する
ことが多い日本に強い警戒感を抱き、次に示すような日本に特
化したテーゼ (tagge ≡ 方針書、綱領) を何度も出しているの
である。⁽⁵⁾

◆一九二二年の「日本共産党綱領草案」

一九二二年(大正十一年)のテーゼは比較的短文だが、その
後の日本関連テーゼの基本的スタンスを方向付けたものといえ
る。その要旨は――日本を「封建的遺制・君主制権力が支配の
根幹をなす国家」と規定し、これにたいする「民主的権利を要
求する、一種の近代化革命が先ず求められ、それが社会主義革
命の露払いになる」という典型的二段階革命論を唱えている。

◆一九二七年「日本に関する決議」(二七年テーゼ)

一九二七年(昭和二年)のこのテーゼは――

日本国家の民主化、君主制の精算、現存支配閥の権力よりの駆逐等のための闘争は……資本が高度のトラスト化の水準に達した国においては不可避的封建的残存物に対する闘争より資本主義それ自体に対する闘争に転化するであろう。日本のブルジョア民主主義革命は極めて急速度には社会主義革命に転化するであろう。⁶⁾

として、二二年文書の二段階革命論を踏襲しつつ、資本主義の高度化に伴って社会主義への転化がより早急に起こりうる、と一段階革命論に近い印象を受ける。

もっとも「二七年テーゼ」の、それが発せられた時点での最大の訴求点是一段か二段かという「歴史認識」よりも、当時の日本の社会主義運動の落ち込んでいた分裂状態——山川イズムと福本イズムの分裂を解消し戦線を統一することへの勧告であった。

◆一九三一年の「日本共産党政治テーゼ草案」

「三一年テーゼ草案」は、さらに進んで従来の「二段階革命論」を修正し、

かくして若き日本資本主義国は、国内の労働者農民の血税と、植民地反植民地民衆の鮮血を吸うて急速に成長し……

この時代における基本的な階級的矛盾はブルジョアジーとプロレタリアートとの対立である。

かくて来たるべき日本の革命の性質は『ブルジョア民主主義的任務を広汎に抱擁するプロレタリア革命』である。⁷⁾

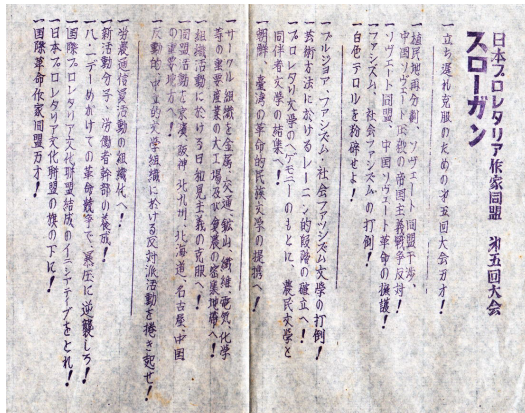
と、直接社会主義革命を目ざす一段階革命論を表明したことで注目されているが、起草者の失脚によって草案のまま廃棄された。しかし、一段階革命論に立ったということは、日本が半封建的絶対主義段階から抜け出して、近代金融・産業システムを獲得した進んだ資本主義国の段階に到達したと認めることを意味し、歴史認識の大きな変化といえる。そしてこのテーゼは「草案」ではあったが日本の社会主義運動、文化運動に一定の影響を与えた。

「三一年テーゼ草案」はモスクワの共産大学で五年間学んだ風間丈吉が起草に関わったとされ、一九三〇年帰国し共産党を再建した風間によって『赤旗』紙上に発表された。この風間が委員長となり一九三一年一月から一九三二年十月まで存続した共産党組織は後に「非常時共産党」の名で知られる。そのおどろおどろしいネーミングにも関わらず「非常時共産党」は、大衆化を狙いシンプ（同情者・資金提供者）組織を拡大する開放的政策をとった。シンプは多くの有名人、はては皇族の一部にまで及び、機関紙『赤旗』が活版・週刊で発行されるまでになり、党勢は戦前期では最大に拡大したといわれる。⁸⁾

このような大衆化、党勢拡大は、基本政策の上で、直接社会主義革命を志向するというわかりやすさと、反封建・天皇制廃絶という日本人の心情になじみにくいスローガンを蔭に隠したという効果が関わっていたと考えられる。

一九三二年五月開催の日本プロレタリア作家同盟第五回大会のスローガンにも

- ・ 帝国主義戦争反対！
- ・ ソビエト同盟、中国ソビエト革命擁護！
- ・ 社会ファシズム文学打倒！
- ・ サークル組織を重要産業の大工場と貧農の密集地帯へ！



(図③)「日本プロレタリア作家同盟第五回大会スローガン」

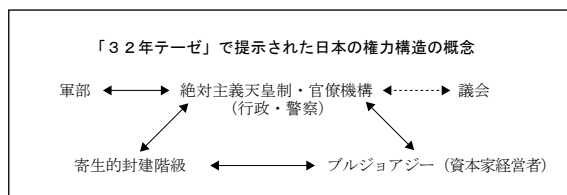
などが列挙されているが、天皇制への言及は避けられている。しかしこの「大衆路線共産党」には、驚くべき「闇」が組み合わされていた。五人の中央委員（風間大吉、岩田義道、宮川寅雄、紺野与次郎、

飯塚^{みつのぶ}盛延）の一人、飯塚が、現在ではスパイM、あるいはスパイ松村として活動の実態が解明されている警視庁毛利特高課長直属のスパイだった⁽⁹⁾。スパイMは風間共産党の資金と設営という非法法活動の根幹を担当し、一九三二年末までにほぼ共産党組織を壊滅に追いこんだ。

一面から見ると、この時期のシンパ組織の大衆化路線は、周辺同情者までを一網打尽にあぶり出すための毛利特高課長の「泳がせ」戦略だったとも見える面があり、事実この時期にはスパイMの正確な情報に基づく作家同盟周辺のシンパ、資金供与者への検挙が的確になされていることが、(脚注8)の貴司の記述などからもわかる。

◆一九三二年の「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」(三二年テーゼ)
三二年テーゼは、三一年テーゼを否定し、二七年テーゼ以上にラジカルな「二段階革命論」に立ち戻った。このテーゼの根幹をなす基本的文言は――

日本の天皇制は、一方で主として地主として寄生的封建的階級に立脚し、他方では又急速に富みつつある強欲なブルジョア^{ブルジョア}にも立脚し、これらの階級の棟領と極めて密接な永続的ブロックを結び、仲々うまく柔軟性をもって両階級の利益を代表し、それと同時に、日本の天皇制は、その



(図④)『32年テーゼ』で提示された日本の権力構造の概念

独自の、相対的に大なる役割と、似而非立憲的形態で軽く粉飾されているに過ぎない、その絶対的性質を保持している。(※傍線は筆者、なお「天皇制」という訳語は「君主制」にかわって「三十二年テーゼ草案」から使われるようになった¹⁰⁾)

全軍事行動(※「満州の占領、上海及び支那その他の地方における血腥き諸事件」とテーゼ冒頭に書かれている)は、現在の世界経済恐慌の諸関係の下に最大の帝国主義強国の一つによって行われた最初の、広汎な計画を持つ軍事的進出である。¹²⁾

日本において独占資本主義の侵略性は絶対主義的な軍事的「封建的帝国主義の軍事的冒險主義によって倍加されている。¹³⁾

である。奇妙なリズムを持つ悪文(悪訳?)¹¹⁾だが、「寄生的封建的階級」「ブルジョアジー」という新旧二つの優越的経済勢力と柔軟な連携を保ちつつ、しかしその二階級の利益に完全には従属しない自由度を保つ独自の「絶対主義天皇制」が具体的な権力機構、暴力システムとして日本国民の上に君臨しているという独特のピラミッド型構造を提起した。議会は立憲制を偽装するための形骸的組織、軍部は天皇制権力をも相対化しうる独自の暴力組織として、三角形の外側に位置づけられた。

そして、このような構造を持った「日本帝国主義」の性質として――

と、極めて強い言葉でその軍事的侵略性の危険を指摘する。そしてこの侵略性、危険性を実際に具現する権力主体が絶対的天皇制であるとし、それ故、日本での闘争の第一は「天皇制の転覆」であると宣言する。封建的地主に対する「大土地所有の廃止」、ブルジョアジーに対する「七時間労働制の実現、資本主義的大経営の労農兵ソビエトによる統制」などの近代化項目は二番目三番目に位置づけられている。

これは、一段階革命論の「三十二年テーゼ草案」はもとより「二七年テーゼ」「二二年綱領草案」などに較べても著しくラジカルな「まず天皇制を打倒しなければ何事も始まらない」というウルトラ二段階革命論として、独自かつ極左的な本質をもったテーゼだと考えられる。

……強盗帝国主義の企てた

この「三十二年テーゼ」は『赤旗』一九三二年七月十日特別号

に掲載されたが、片山潜、野坂参三、山本懸蔵ら当時ソビエトにいた日本共産党メンバーとコミンテルンが協議して決定したという大まかな筋道が定説となっていた。⁽¹⁴⁾しかし、ソ連崩壊によつて当時の機密資料が公開されるにいたり、一橋大学加藤哲郎教授らの調査研究により、その生々しい策定経過が明らかになつてきた。⁽¹⁵⁾それによると、このテーゼ策定はオットー・クーシネン⁽¹⁶⁾らコミンテルン幹部によつてなされ、最終的に決定したとされる一九三二年五月の「コミンテルン西欧ビューロー会議」なるものは実在せず、片山潜、野坂参三らの関与もフィクションであり、日本人として関わつたのはコミンテルン東洋部の一職員山本正美⁽¹⁷⁾一人だったという。

前掲「テーゼ集」でも、関連論文としてはクーシネンなどコミンテルン側の解説論文が採録されているが、日本側の発言は「日本問題に関する新テーゼ発表に際し同志諸君に告ぐ」という「国際共産党日本支部／日本共産党中央委員会」の「承認必謹」の言があるのみである。

「テーゼ集」編者の一人である山辺健太郎も後書きの解説で

日本では、三二年テーゼそのものよりも、三二年テーゼにでていた絶対主義の概念を固定化してしまつたわれわれの側にまちがいがあつた……テーゼでは、明治維新で成立したものを絶対主義といっているのに、日本では、その後もずっと絶対主義であつたように理解していた。

と自己批判とも感想ともつかぬ言葉を残している。しかし、これはいささか無理筋というもので、テーゼは、現前の天皇制の打倒を口を極めて連呼し続けているのである。むしろそれに続く山辺の一言がこのテーゼの問題点を突くものとなっている。

（*テーゼが出た一九三〇年代に）天皇制がどういう性格のものになつていたかという分析が（*この三二年テーゼには）ない。これが三二年テーゼの一番の欠点だと私は思つてゐる。⁽¹⁸⁾

正にその後の研究の進展によつて「三二年テーゼ」は、日本の運動者の意見や総括から出てきたものではなく、コミンテルン内部で策定され、日本の運動の現場に突然提示されたものだったことが明らかになつてきた。

従つて、「三章」で例示したプロレタリア美術家同盟の文書が、何かよそよそしい他者の言として言及している「戦略の変更」

……その基本的な部分は、日本に於て当面する××（*革命）の性質に関する規定を、「社会主義革命への強行的転化の傾向を持つブルジョア民主主義××（*革命）である。」と云ふ様に、最近改められたことに最も関係して居る。

といった他人事のような言い回しもこのことに関わっているものと思われる。

五、「三三三テーゼ」のラジカリズムの源泉

一九三二年、プロレタリア文化運動の終末期に、極めてラジカルな「三三三テーゼ」が『突然』コミンテルンという国際的上部機関から提示された。それはあくまで、外から、上から提示されたものであった。

そのラジカリズムが、日本の主体的な社会主義運動、文化運動を窮地に追いこみ、第二次大戦を志向する軍国主義、ファシズムに抵抗する統一戦線の結集を妨げ、運動自体の崩壊を招いた——という見方は現在ではほぼ事実にと認められる。そしてそのようなラジカリズムがなぜ生み出されたかにについても概ね明らかである。

その起源は一九二八年七月から九月にかけてモスクワで開催された第六回コミンテルン大会の諸決定・綱領に求めることができる。要約すれば――

- ① 「第三期論」資本主義は崩壊の最終段階に入った。
- ② 「極左主義」攻撃的、極左的路線によってこの危機を激化させ資本主義を崩壊に導く。
- ③ 「帝国主義戦争反対」戦争の危機は資本主義最終段階の不可避的現象と捉え、これを内乱に転化し資本主義崩壊を決

定づける。

- ④ 「社会ファシスト排撃」共産党以外の全ての穏健な左派は、革命情勢を曖昧化する主要な敵と規定し排撃する。

という非常にラジカルな戦略を表明している。

確かにこの翌年には誰しもが資本主義の終末を想像せざるを得なかった世界大恐慌が起こり、ファシズムの台頭、第二次世界大戦へとつながっていく。コミンテルンはそのような大変動を予見したといえるかもしれない。

それはしかし結果論であって、大会決議の一つ「帝国主義戦争に反対する闘争と共産主義者の任務」¹⁹⁾を見ると、コミンテルンはやや異なるポイントに注意を集中している。それは、帝国主義戦争の予先がソ連邦に襲いかかってきはしないかという恐怖と警戒感である。そのような事態を回避するためにそれぞれの帝国主義国家内にある共産主義者に、三万字に及ぶ長大な論文で神経質なまでの詳細な指示と注意を与えているのである。

この警戒感は一国社会主義というシベリアな道を選択せざるをえなかったソ連邦ないしスターリンの基本的なトラウマであり、コミンテルン第六回大会が指し示したラジカリズムはその必然的な防衛反応だったと考えるべきであろう。

そして、一九二八年という時点ではまだナチスドイツは台頭しておらず、ソ連邦にとって最も危険な勢力は、欧州の帝国主義諸国以上に、中国大陆に露骨な軍事侵攻を開始した天皇制日本の帝国主義である。それ故、コミンテルン第六回大会

のラジカリズムが「天皇制を主敵とする闘争」という「三二年テーゼ」のラジカリズムとなって日本の運動に賦課される。そして、枚挙にいとまのない「言葉」の氾濫がパンフレットにもビラにもチラシにも溢れるのである。

六・総括・「三二年テーゼ」の受容と終焉

「三二年テーゼ」のラジカリズムが、日本の社会運動、文化運動に及ぼした影響の帰結については、一般論としては語り尽くされた観もある。——革命は近い（三期論）という幻想をふりまいてリアルな民衆・運動者・文学者を混乱させた、社会ファシズム論によって反ファシズム戦線を分裂させた、政治主義によって文学運動を混乱に陥れた……などなどである。

しかし、同時代文書をみていくとそれで「話はすんだ」とはいえない。運動の現場の人々が、この「テーゼ」をある感動と共感を持って受け入れ、運動の実際に生かそうとしたという報告もある。

◆榎村浩の事例

例えば、高知の詩人榎村浩の詩集『間島パルチザンの歌——榎村浩詩集』の後書きに、同時代に榎村とともに運動をした浜田勇の述懐が記録されている。

阪神地方の秘密アドから、三二年テーゼ草案が送られてきた時、私たちは一夜がかりでそれを写して廻し読みし、すっかり興奮しました。……高知四四連隊への反戦ビラまきなどその決定によってやりました。

彼等は「テーゼ」に感応して兵営内にビラを撒くといった危険をあえて冒し当局を震撼させたが、それだけではなく、紡績工場の寮に塀を乗り越えて通い、文学サークルや資本論研究サークルを組織するといった日常活動も重ねており、作家同盟の支部も結成している。「テーゼ」には、現場を持たない中央の「知識人」とは異なる、実際の運動者が「興奮」して受容できる何かがあったということである。たとえそれが上からのラジカリズムの反映であつたとしても、記憶に留めるべきことはあろう。

しかし「無理筋」はやはり「無理筋」である。

かつて「間島パルチザンの歌」や「生ける銃架」など深刺とした反体制の進軍歌を生み出し、活動の渦中において捕まり数年の服役を終えた詩人榎村浩が、貴司の前に「狷介不遜の」しかし「惨たんたる病人」となって現れ、理解に余る詩稿「ダッタン海峡」⁽²⁰⁾を提示する。元来榎村の詩は、何となくことのない固有名詞・地名すらが詩のなかで生き生きとした輝きと暗喩の翼を与えられるという特質を持っている。しかし「ダッタン海峡」では、それらの言葉の異様な乱舞が人を途惑わせる。それは詩

人の「身体」と「詩」が「テーゼ」のラジカリズムに屈服した姿だといわざるをえない。

◆小林多喜二の事例

自分の文学に「テーゼ」の教条を極めて忠実に生かそうと正面から努力した、おそらくただ一人の小説家が小林多喜二であろう。

しかし他方で、多喜二が八十年以上たっても再版が続く数少ないプロレタリア小説家の一人となりえている理由は「テーゼ」に忠実な政治性にあるのではなく、小説を徹底的に「物語り」……テラードストーリーとして捉える作家的スタンスにある。「蟹工船」や「党生活者」のような長篇でも、稿紙六枚ほどの掌編「テガミ」でもそのスタンスは変わらない。一般に思われているのとは逆に、多喜二の創作方法は物語りが「主」であり政治は（三二年テーゼは！）「従」なのだ。「従」は「主」の内部に埋設される……「物語化」される。それによって、八十年後の読者は小林多喜二に面白さを感じる。（もちろん、埋設された「従」を掘り起こすことばかりに興味をもつ読者もいるであろう。それは読者の勝手だが、作品にとっては不幸なことというほかない）

ただ、この「埋設」は、やはり「無理筋」であることに変わりはない。「テーゼ」が日本のリアルと乖離していればいるほどその「埋設」は無理な力わざとなり、物語の作り手を痛めつける。楨村浩はその無理に耐えられず病んだというべきだろう。

しかし小林多喜二は「今のところ」その力わざの闘いから退却したという兆候は見出せない。

それは、小林多喜二が物語作家として類い稀な強靱な「身体」を持っていたためだと思われる。凡百のプロレタリア作家の中で、何故彼がそのような物語作家としての強固な身体を獲得したのか、それは作家論として秘鑰中の秘鑰であろうけれど、今それを考え詰める余裕はない。

いずれにせよ「三二年テーゼ」によって要請された運動・文化・文学の課題は、無数の文書、ビラ、チラシの文言の氾濫に関わらず、運動の崩壊によって結末を迎えた。

一九三四年二月、鹿地亘の悲鳴のような解散声明を残して作家同盟は解散する――

我が同盟の活動的作家たちは、……機関誌の発行の擁護、同盟費の納入、組織活動遂行等の一切の義務を放棄することによって、絶対多数を以つてそれへの不信を表明しつゝあり……過去の政策に於ける機械的な極左的欠陥……の克服を以つてしても、従来形式はもはや作家をつなぎとめ得ない。……して見れば、かかる組織の維持は意味をもたぬ。⁽³⁰⁾

ところが栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代』によると

ナルプ（*作家同盟）の解散をプロレタリア文学の発展とみる林房雄、徳永直、山田清三郎らは、いつせいに長編小説にとりかかった。「文学批評の官僚的支配を蹴って、のびのびと、自由に、大いに創作しよう」という徳永の呼びかけは、まさにこの人たちの合言葉でもあった。林房雄の「青年」、徳永直の「黎明期」、山田清三郎の「地上に待つもの」、橋本英吉「炭坑」等々の長篇が現われた⁽²⁴⁾。

という意外な結果となる。作家同盟の解散、つまり「三二年テーズ」の呪縛からの解放が、プロレタリア作家に大きな開放感と創作意欲を取り戻させるという逆説的成果を生み出したのである。

ただ、注意すべきは「解放」によってプロレタリア文学はもとの地点に立ち戻れたということではない。時代は文学を踏み越えて大きく動いてしまっていた。

第一次世界大戦の終結によってもたらされた一時の平和は、一九二九年の世界恐慌によってきしみ始める。一九三一年日本は東北中国の一角を軍事占領して「満州国」とする。一九三三年、ヒトラーが政権を掌握する。その同じ冬、小林多喜二が特高警察によって虐殺される。一九三四年日本は国連から脱退する。そして一九三七年日中戦争が始まる。

「三二年テーズ」から解放された小説書きを待ち受けていた

のは、反抗も批判も許さない軍国主義の「絶対主義的権力」であり、人々はそれとどう折り合いをつけて己の生きる場所を確保するか奔走するほかなかった。

一九三五年第七回コミンテルン大会は、漸くファシズムの危険性を認知し、社会民主主義勢力を社会ファシズム呼ばわりした近親憎悪的な政策を撤回し反ファシズム人民戦線政策に転換した。そこで一九三六年二月、日本に対してもこの転換を告知する「日本共産主義者への手紙」が発せられるが、既にその頃、日本にはそれを受けとるべき組織も運動体も無くなっていた。

元来、日本の近代文学の一翼を担うはずだったプロレタリア文学運動（プロレタリア文化運動）が、ラジカルな文言をまき散らしたまま突然、途切れるように消滅するというのは、奇妙な事態といわざるを得ない。中央の、ないし上部の推移を見ているだけでは事の真相は分からない。おそらく、頭記の資料集創作業などによって見出された「現場」の動きや想いの焼き込まれた一次資料と、全体とを照合し直すことによって……さらには、戦後のサークル運動などにつながる、時代の底深くをかいぐぐった地下水脈をさぐることで、新たな地点が見出されるのではないだろうか。（2016/2/14）

(1) 小樽文学館所蔵「池田壽夫旧蔵書」…この文庫は戦前日本プロレタリア文化聯盟(KOPF)の働き手であり、評論家でもあった池田壽夫(1906-1974)が蒐集保存したもので、ご遺族によって小樽文学館に寄贈された。多数の単行本、雑誌、およびビラやチラシなどの生資料からなり、同文学館で閲覧可能である。

(2) 日本プロレタリア作家同盟「第六回大会中央委員会報告」…池田旧蔵書所収の、表紙とも三〇頁の謄写版刷り冊子である。表紙に「一九三三年六月十一日(日) 午前十時 於 築地小劇場」とあるが、実際に開催された形跡はない。『日本プロレタリア文学大系6』(二一書房 一九五四年刊)の巻末年表には、実質は拡大中央委員会として六月五日に開かれたと書かれている。

おそらく、官憲の介入を避けるために十一日というダミーの開催日時を公表しておいて、その何日か前に縮小した形でひそかに会合したのであろう。拡大中央委員会なら個人宅でも密かに開くことが出来る。

因みに、一年前の一九三二年五月に築地小劇場で実際に開かれた第五回大会は、臨場警官に解散を命じられ、争乱状態の中で十人近い幹部や作家が検挙拘留されている。当時もはや通常の形で左翼運動の大きな会合を開く自由は、日本には存在しなかったのである。

(3) コミンテルン…一九一九年、社会主義革命を成就したソ連邦の首都モスクワに創設された、世界の社会主義運動の総本部。各国の共産党はこのコミンテルンの支部という位置づけとなり、コミンテルン執行委員会や大会の決定事項を各国共産党は遵守する

ことを求められた。一九四三年廃止。
[https://ja.wikipedia.org/wiki/ロニンテルン] (2016/2/13 閲覧) などによる。

(4) トロツキズム…本来は、ロシア革命においてレーニンに次ぐ指導者であったレフ・トロツキー(1879-1940)の革命思想を指す。永続革命と反官僚主義を特徴とする理想主義的な革命論で、スターリンの現実主義的な一国社会主義論とは原理的に相容れない。トロツキーはレーニン死後、スターリンとの抗争に敗れて亡命、執拗に迫り迫った刺客によってメキシコで殺害された。

一般に「トロツキズム」「トロツキスト」といういい方は、スターリン時代に形成された「裏切り者」「ニセヤク」といった攻撃的な蔑称として用いられることが多い。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/トロツキズム]
[https://ja.wikipedia.org/wiki/レフ・トロツキー] (2016/2/13 閲覧) などによる。

(5) 日本に特化されたコミンテルンのテーゼ…石堂清倫、山辺健太郎編『コミンテルン／日本にかんするテーゼ集』(以下『テーゼ集』と略記) 青木文庫 一九七三年刊、によると

◆ 「日本共産党綱領草案」一九二二年

◆ 「日本に関する決議」(二七年テーゼ)

◆ 「日本共産党政治テーゼ草案」一九三一年

◆ 「日本における情勢と日本共産党の任務に関するテーゼ」(三二年テーゼ)

◆ 「日本の共産主義者への手紙」一九三六年

などが著名なものとして挙げられている。

(6) 前掲『デーゼ集』 31頁

(7) 前掲『デーゼ集』 51～53頁

(8) シンパ組織と党勢の拡大…貴司山治の小説「一九三三年」にその時期の思い出が書かれている。

三二年の祝田（＊風間丈吉あるいは岩田義道？）の再建活動は、祝田自身の天才的な指導で、中央部は地下深くにいて、……党機関紙『赤旗』の活版印刷、週刊実現——それによる党のセクト主義の清算、大衆化への躍進と、見事な転換をやつてのけた。それは、これまでの党史にないような、不朽の業績といつてよかった。

一方この再建党のまわりには、合法面で多くのシンパサイザーの組織が行われ、大学教授、俳優、作家、音楽家、科学者……あらゆる方面に支持者の組織がのび、しまいには皇族の中からさえ献金者があらわれた。……

ところが三二年の祝田の党は、それらのシンパ網から破綻してきた。伊達が五月に不意に検挙されると、伊達の献金表とでもいった書類が警視庁特高一課の、係警部の手中にあるのがわかった。それは金をわたした日時、場所、相手方の変名、伊達の変名など、いちいち事実の通りであった。

(一九三三年)は『貴司山治小説集・丹波アリラン』貴司山治
net資料館 二〇一三年刊 57頁

(9) 飯塚^{みのぶ}延／スパイM／スパイ松村…渡辺政之輔のもとで組合活動での優秀さを認められモスクワの共産大学に留学。帰国後検挙

中に警視庁スパイに転身、風間共産党の中央委員となり家屋資金局を担当、地下活動の総てが警視庁に筒抜けになった。そして一九三二年十月の熱海事件での共産党幹部一斉検挙を段取った後、闇に消えた。(1902～1963)

戦後、小林峻一・鈴木隆一『昭和史最大のスパイ・M…日本共産党を壊滅させた男』ワック 二〇〇六年刊、立花隆『日本共産党の研究1～3』講談社文庫 一九八三年刊、などによりその闇の全貌がほぼ明らかになっている。

(10) 前掲『デーゼ集』 81～82頁

(11) 「三二年デーゼ」の訳文は戦後のより平明な村田陽一の訳文『コミンテルン資料集第五巻』大月書店 一九八二年刊)があるが、ここでは編者山辺健太郎が新仮名になおす以外は「もと発表されたままの文章にした」と解説でコメントしている前掲『デーゼ集』のテキストを引用した。

(12) 前掲『デーゼ集』 76頁

(13) 前掲『デーゼ集』 79頁

(14) 三二年デーゼ策定のいきさつは、例えばウイキペディア「32年デーゼ」には「日本からは片山潜、野坂参三、山本懸蔵らが参加して討議された」と書かれている。

[<https://ja.wikipedia.org/wiki/32年デーゼ>] (2016/2/13 閲覧)

(15) 加藤哲郎「三二年デーゼ」と山本正美の周辺『山本正美裁判記録文集・解説』新泉社 一九九八年刊

その概要は著者自身による up!lord

[<http://members.jcom.home.ne.jp/tekato/MASAMI1.html>]

(16) オットー・クーシネン…元来はフィンランドのコミュニストで、

オットー・クレーシネン……元來はフィンランドのコミュニストでロシア革命後獨立したフィンランドに親ソビエト政權を作つたが反對派に鎮壓され、モスクワに亡命した。以後、コミンテルン官僚として執行委員會書記にまで上り詰め「三二年テーゼ」作成にも関わつた。スターリンに重用され、多くの亡命フィンランド人が肅清される中でその地位を保つた。肅清迫害された妻を見捨て地位を保つたこと、反ロシアの氣風の強いフィンランド人でありながらスターリンの忠実な官僚となつたことなどから、フィンランド人からは嫌惡される存在でもあつた。ところがスターリン死後はスターリン批判に移行しペレストロイカの基本路線を策定する仕事もした。いろいろな意味で極めて『有能』な官僚理論家だつたと考えられる。(1881～1964)

[<https://ja.wikipedia.org/wiki/オットー・クーシネン>]などによる。(2016/2/13閲覧)

因みに、妻アイノも日本と関わりの深い教奇を極めた経歴を持つ。オットーと結婚後コミンテルン職員となり一九三四年赤軍参謀本部の「正式の」スパイとして二度に亘って「スエーデンの女流作家」という触れこみで日本に滞在、美貌とコケットによって広い人脈を築き、著名なスパイゾルゲとも連絡があったと思われるが戦後に到るまで彼女がスパイだったことは誰にも知られなかった。一九三八年以降肅清の波に巻き込まれて拷問、シベリア送りなど辛酸をなめ、一九五五年漸く名誉回復、故国フィンランドに帰る生涯を閉じた。(1886～1970)

[<https://ja.wikipedia.org/wiki/アイノ・クーシネン>]などによろ。 (2016/2/13 閲覧)

(17) 山本正美：一九二七年から五年間モスクワの共産大学で学び、ロフインテルン（赤色労働組合インターナショナル）、コミンテルンの職員として働き、一九三二年末帰国して崩壊状態の共産党の委員長となったが一九三三年五月には検挙投獄された。公判廷での長大な陳述は貴重な資料として戦後刊行されている（『山本正美治安維持法裁判陳述集』新泉社 二〇〇五年刊）。一九四三年満期出獄。戦後は「湯本正夫」の筆名で多くの新聞雑誌に執筆。共産党組織で働いたが一九六二年「社会主義革新運動」に参加し共産党を除名され、以後新左翼系で活動、労働運動研究所創立に参加した。（1906～1994）

[<http://www.imv.co.jp>] の『山本正美治安維持法裁判陳述集』書誌情報 [[https://ja.wikipedia.org/wiki/山本正美_\(日本共産党\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/山本正美_(日本共産党))] などによる。(2016/2/13 閲覧)

(18) 前掲『テーゼ集』255頁、山辺健太郎「解説」

(19) 村田陽一編訳『コミンテルン資料集第四巻』大月書店
一九八一年刊 378～413頁

(20) 横村浩：高知の詩人、本名吉田豊道。一九三〇年代早期の社会主義活動家。詩に天才的才能を発揮し「間島パルチザンの歌」「生ける銃架」「明日はメーデー」など、人々の脳裏に焼き付く叙事詩を残した。一時貴司宅に滞在したこともあるが、拘禁と拷問により健康を害し二十六歳で死去。貴司はその原稿を長く保存秘匿し、戦後「間島パルチザンの歌——横村浩詩集」を出版、また彼

を愛惜する高知の人々によって、その詩稿、評論など著作はほとんど復元刊行されている。(1912～1938)

- (21) 貴司 山治・中沢啓作編『間島バルチザンの歌——槇村浩詩集』新日本出版社 一九六四年刊 156頁

(22) 槇村浩の「ダッタン海峡」は、最も新しい校訂版である平和資料館・草の家刊『槇村浩詩集』(二〇〇三年刊)の猪野睦氏の「解説」によれば出獄後の一九三五年後半の作と推定される。その年十一月槇村は貴司宅を訪れ、詩集出版を依頼して他の多くの詩稿と共にこれを貴司宅に預けた。その時の槇村を貴司は前掲『間島バルチザンの歌——槇村浩詩集』の後書き「槇村浩の時代」で槇村は二十三歳になっていて、昔みたような少年の青くさはうすれていたが、惨たんたる病人で、狷介不遜は以前より鮮やかだった。と記している。

「ダッタン海峡」は、北海道の監獄にいる市川正一、徳田球一、国領五一郎らを励ます祝祭的な詩といえるが、ソビエト赤軍の大軍が北海道、ひいては日本列島を「解放」するイメージを「日本をひたすサヴェート同盟の／人民革命の保持者として声明する」と歌い上げる。

- (23) 作家同盟解散声明(ナルプ解体の声明)・・・現在公開準備中の資料にその原文コピー(校正紙? 山田清三郎の印と誤字訂正書き込みがある)が収録されている。とりあえずは『日本プロレタリア文学大系6』三一書房 一九六九年刊 294～299頁、などで閲読できる。

- (24) 栗原幸夫『プロレタリア文学とその時代』インパクト出版会 二〇〇四年刊 165頁

グローバル化時代の「闖入者」

内藤 由直

一 はじめに

本稿は、安部公房の「闖入者」⁽¹⁾を、グローバル化時代の新たな植民地主義を描き出す小説として再読することで、本作品の表現が持つアクチュアリティを引き出そうと試みるものである。

「闖入者」は、日本がアメリカ軍の支配下に置かれていた戦後占領期に発表された小説であり、深夜に突然闖入してきた家族が強要する民主主義によって破壊していく主人公の姿を描く物語内容から、当時のアメリカ占領軍と日本人との関係をアイロニカルに表現する作品として読み解かれてきた。⁽²⁾

例えば、山田博光は、駐留するアメリカ軍の評価を巡って国際派と所感派に分裂した日本共産党の五〇年問題に応答する作品として「闖入者」を捉え、「アメリカ占領軍は日本に闖入者としてやってきて、形式的な民主主義で日本人を支配し、日本人の独立を奪う存在だというのが、安部公房の回答である」(「安

部公房」『社会文学』一九九七年六月)と述べている。同様に田中裕之も、共産党員であった作者の立場を踏まえ、「当時の安部の思想的立場からすれば、この作品が、反体制の側から、植民地化されている日本および日本人の姿を描いたものであるのは明らかである。民主主義を振りかざして「ぼく」の自由を奪う「闖入者たち」はGHQおよびアメリカに対応している」(「比喩と変形」『梅花女子大学文学部紀要』二〇〇三年十二月)と指摘している。いずれも、作品発表時の時代状況を背景にして、「闖入者」の寓話が喚起するイメージをコンテキストに即して浮かび上がらせた読解であり、時代と密接に関係しながら存立する本作品の歴史的位相を明示したものであると言える。

しかし、石沢秀二が闖入者家族の形象に看取される「抽象的リアリティ」(「友達」『国文学 解釈と教材の研究』一九七二年九月)の特質を指摘し、「もともと具象的写実性をそなえた物よりも非具象的抽象性をそなえた物のほうが、その物自体から触発さ

れるイメージはより一層、自由に開放される。したがって、「闖入者」のイメージは、プロットに描き出されている「民主主義」とか「隣人愛」とか「ヒューマニズム」とか、現代社会におけるアクチュアルな問題性を越えた「なにかしらこわいもの」の侵略を恐怖のうちに予感することもできる感覚的拡がりをもっている（「同前」と述べるように、本作品に備わる高度の抽象性に注目するならば、一九五〇年代当時のアメリカ占領軍と日本人との対立構図に止まらない別様の意味を読み取ることが可能となるはずだ）。

ゆえに、本稿では、作品が描き出す闖入者家族と主人公Kとの抗争を、発表当時の時代背景と重ね合わせてアメリカ占領軍と日本人との戦いと読む先行論の枠組みを退けた上で、一度抽象化することを試みる。そして、作品の表現自体から立ち上がるリアリティを現在における我々の現実性として把握することで、先行論が充分に開示できなかった、「闖入者」に備わるグローバルゼーション時代の植民地主義批判の文脈を浮かび上がらせる。過去ではなく現時の支配と搾取を象徴的に描出する作品の強度を確認することによって、国境を越えた社会・経済・文化等のネットワークが拡大するグローバル化の渦中にある現在の場合、もはや戦後でもなければ戦前でもなく「戦時下」にあることを示し、「闖入者」という往時の作品を今ここで読むことの意義を鮮明にしたい。

二 国民化の陥穽

一九四五年の敗戦後、進駐してきたアメリカ軍は、日本の社会システムを根底から変革させようとした。なかでも、連合国最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）が力を注いだのは、日本の民主化であった。³ 勝者の軍隊によって日本にもたらされた急激な変化は、「配給された「自由」」（河上徹太郎「配給された「自由」」『東京新聞』一九四五年一〇月二六―七）と揶揄されるほど人々に戸惑いを与えたが、敗戦国としては所与のものとして甘受しなければならなかった。ジョン・ダワーが述べるように、「占領期全体とその後においても、敗戦日本にたいするアメリカの一連の改革を、「上からの民主主義革命」を押しつける試みと表現することは、勝者の側でも敗者の側でも、ごく普通であった」（『増補版 敗北を抱きしめて（上）』三浦陽一・高杉忠明訳 岩波書店 二〇〇四年）のである。小説「闖入者」はこの押しつけられた上からの民主主義革命を寓話化した作品である。

「闖入者」の物語は、ある日の深夜、九人の家族が主人公Kのアパートへ忍び寄る足音から始まる。突然押しかけてきた家族は、Kの部屋を自分たちの部屋であると主張し、我が物顔で生活を始める。そのことにKが抗議すると直ぐさま会議が招集され、多数決によって家族の主張が採択される。絶対多数である家族の論理が、民主主義の美名の下に強制されるのだ。

当初、Kは、あくまでも自分の権利を主張し抵抗するが、ファシストと罵られ、屈強な父親と兄弟の力によってねじ伏せられてしまう。会社へ通う定期券と壊れたシャープ・ペンシル、そして手帳以外の全てを奪われたKは、それでも抵抗することを考え、アパートの管理人や住人たちとともに家族を追い出そうとするが上手くいかない。警察への訴えもまた、民事不介入を盾にして相手にされなかった。Kは恋人のS子に給料袋を預けたり、闖入者家族の長女キク子を味方につけようとしたり、弁護士に助けを求めるなど様々な画策や抵抗を試みるが、全て徒労に終わってしまう。闖入者家族に仕える奴隷として屈辱の日々を過ごしながら、Kは最後の抵抗として秘密裏にビラを作成し、アパート住人に団結を呼びかけようとする。だが、その計画も家族に露見し阻止されてしまい、終にKは追いやられた屋根裏で首を吊って息絶えてしまうのである。

このような「闖入者」の物語内容は、当時の読者に眼前の現実を想起させ、日本が外国軍隊による占領下にあるという事実を突きつけるものであった。例を挙げれば、黒井千次は本作品の発表時を振り返り、「当時は政治の季節であり、対日講和条約、日米安全保障条約が調印される時期であり、火炎ビン闘争が盛んな頃でもあった。そんな時代の風に捲き込まれるようにして読んだ『闖入者』は、占領軍（進駐軍）とか支配者とかいうイメージを若い頭脳の内にストレートに喚起した」（『夜と風』『新潮』一九九三年四月）と述べている。黒井はまた、闖入者家族がK

のアパートへ押しつけてきた理由が作品内で明示されていないことについて、「時代の状況からして、民主主義をスローガンに有無を言わず暮しの中に押し入って来る者の姿は誰の眼にも見えていたので、説明する必要がなかったのだろう」（同前）とも述べている。当時、この作品を読んだ者は、闖入者家族の形象にアメリカ占領軍が、破壊に追い込まれる主人公Kの姿に読者である自分たち自身が重ね合わされていることを、自明のものとして受け取ったのである。

こうした同時代状況をより鮮明にするために、呉美姪は、一九五〇年代前半に議論されていた国民文学論争を新たな分析軸として導入し、さらに精緻な読解を試みている（呉美姪『安部公房の〈戦後〉』クレイン 二〇〇九年）。戦後国民文学論争は、竹内好による「今日、私たちは国民文学への念願を捨ててゐるわけにいかない」（『近代主義と民族の問題』『文学』一九五一年九月）という揚言から始まった日本近代文学史上最大の論争である。国民文学論争における竹内の問題提起は、「日本が今日、独立を失っている、他国の隷属下におかれている」（『文学における独立とはなにか』『岩波講座文学第三巻』岩波書店 一九五四年）という現状を打ち破ろうとするものであった。その問題意識は野間宏によって「アメリカ軍から日本民族を解放するたかいである」（『国民文学について』『人民文学』一九五二年九月）とさらに明確に具体化され、国民文学はアメリカ軍に対する「レジスタンス文学抵抗文学」（同前）と概念化された。呉によれば、「闖入者」

と国民文学論争は、「アメリカという他者とそれに対抗する日本国民という主体の問題」『安部公房の《戦後》前掲』を共有しているという。その上で呉は、同時代の国民文学論が国民の観念を实体化し、同質的な国民共同体を議論の前提としていることに対して、「闖入者」およびその作者は「同質の共同体を想定するのではなく、むしろその亀裂を露呈し、その中に真の国民的主体を見出そうとするスタンス」(同前)であったと指摘する。国民文学論争の渦中に露顕することとなった、複雑多様に存在する国民主体をいかにして具体的に把握するのかという課題を「闖入者」は先取りしており、作品には「ありうべき(主体)」としての国民が不在であることへの焦り(同前)が反映されている、というのが呉の考えである。小説のラストシーンで描かれる「Kの死は、個人を超える国民や民族という集団的な主体が、いまだに成熟していないという状況を暗喩している」(同前)という呉の評価は、アメリカ軍への抵抗という目的を完遂できず、最終的に失敗に終わった国民文学論争の結末を予見する批判的言明としても捉えることができるだろう。

だが、呉を始め前節でも言及したような先行研究が把握する「日本人」あるいは「日本国民」とは、一体誰のことを指し示すのであろうか。周知のように、「闖入者」が発表された一九五一年の段階において、未だ植民地の領有権を法的に放棄していなかった日本は、様々な人種・民族が混在する国家であった。小熊英二が『日本人』の境界(新曜社 一九九八年)で詳

述するように、当時、日本国籍を所持する日本国民には多様な人種・民族が包含されており、日本人ではない日本国民が多数存在していたのである。ゆえに、人種や民族といった種的一性に基づく特定の国民主体を見出すことなどそもそも不可能だったのであり、「日本人」と「日本国民」とを単純に同一の集団として重ね合わせることはできないのである。

「闖入者」を読み直す過程において、アメリカ占領軍への抵抗主体として浮かび上がってくる存在を、もしも人種としての「日本人」として把握するならば、それは非日本人を疎外した排外主義的な主体となるであろう。逆に、国籍に基づいた「日本国民」として捉えるならば、それは雑多な人種・民族を内に孕んだ分裂した主体となり、そこに統一的なアイデンティティを見出すことはできない。いずれにしても、アメリカ軍の占領下で抑圧・支配されている主体を、特定の共同体として一律に把握することは困難であるのだ。

「闖入者」で破壊に追い込まれるKの姿に特定の民族・国民主体の姿を捉えるこれまでの読解は、現在の「日本人」や「日本国民」の観念を過去に投影しているに過ぎない。それらは、五〇年代前半の文学的・政治的実践の中で歴史的に形成されたもののなのである。

例えば、五一年から五五年まで盛んに議論された戦後国民文学論争は、その論理の核心に、他者を排除し自民族中心主義へ閉塞していく機制を備えるものであった。等しくアメリカ軍の

隷属下にある多様な人種・民族の中から非日本人を選択的に排除し、日本人のみを国民として特権化する議論を展開していたのである。⁴⁾ 同様の作爲は政治の領域でも行われており、内地戸籍を持たずに在住していた在日朝鮮・台湾人は「五二年にサンフランシスコ講和条約が発効したあと、日本国籍が無条件に一斉剥奪」（小熊英二『日本人』の境界』前掲）され、非日本人として日本国民から排除された。また、武装闘争方針を掲げアメリカ軍に抵抗していた日本共産党は、五五年七月の第六回全国協議会において、五〇年代前半の活動を自己批判した上で、「武装闘争」方針を放棄、それと同時に在日朝鮮人との組織的「二重性を解消して「日本人」のみの党になる」（道場親信『占領と平和』青土社 二〇〇五年）。共闘していた在日朝鮮統一民主戦線との関係を清算し、日本人でない者を革命の主体から排除していたのである。

つまり、五〇年代前半に文学と政治の双方の領域で企てられたのは、「非日本人」を疎外し、民族や国籍に基づいた「純粋日本人」のみの主体あるいは共同性を想像的に構築することであったのだ。そうした文学的・政治的实践は、丸山真男の言う「第三の「開国」」（『開国』講座現代倫理第十一巻「筑摩書房 一九五九年」の後に繰り返された、国民化の過程とも捉えることができるのである。

こうした五〇年代前半における国民化の歴史を等閑に付したまま、「闖入者」に描き出される抵抗主体を「日本人」や「日

本国民」と把握することは、あたかも現在において観念されるそれらのみがアメリカ軍からの抑圧・支配を受けていたという誤った読みを導き出すことになるはずだ。

それでは、他者が排除されていた歴史的過程を本作品の解釈に組み込めばよいのか、と言えば簡単にそうとは言い切れない。なぜなら、作品発表時の歴史性に固執することで、「闖入者」が喚起する問いの拡がりを制限し、本作品が持つ時間や空間を超えた普遍性を蔑ろにしてしまう恐れがあるからである。次節で見るように、「闖入者」は、歴史や場所を超越して、それぞれの読者がいる現場で読まれ、意味を生成する作品であるのだ。

三 占領と搾取の普遍性

「闖入者」は、突然やってきた九人家族と平凡な一人の男 K との間で展開される抗争の物語である。この物語は、必ずしも作品が発表された一九五〇年代当時の歴史的文脈と対応させて読まなければならないということはない。本作品を読む者は、各々が今、存在する場において、それぞれが直面する問題を描き出す小説として、これを解釈することができるのである。

一例を挙げると、「闖入者」をチェコ語に翻訳した V・ウインケルヘフェロバーは、本作品を読む度に「ミュンヘン協定と私の国のヒトラーによる占領からはじまりベトナムにいたる、個人的なユーモラスな体験やら、けっしてユーモラスとは

思えない体験など、矛盾だらけの連想にとらわれてしまう」「作家と作品 安部公房」『日本文学全集85 安部公房集』栗栖継訳 集英社（一九七二年）と述べ、一九三八年のナチスによるチェコスロバキア侵攻や、フランス・アメリカによるベトナムへの介入を想起している。あるいは、栗栖継は、ウィンケルヘフェローバーによつて訳された「闖入者」を読んだチェコスロヴァキアの読者たちは、三十年以上前のミュンヘン協定やナチス・ドイツによる侵略と占領や、遠いベトナムの状況よりも、長いあいだ最大で最上の友人と信じこませられてきたソ連による侵略と占領という、身近かでなまなましい現実を連想したにちがいない」『安部公房と翻訳の問題』『ユリイカ』一九七六年三月）と、本作品が六八年のプラハの春を思い起こさせたはずだと述べている。⁶このように、「闖入者」の物語は、歴史や場所を越えた普遍性を持つものなのであり、読む者の想像力によつて、読者が今、生きている渦中にある種々の抗争現場を喚起する抽象性を備えているのである。

では、本作品のどのような表現が、時間や空間を飛び越える多彩な読みを喚起するのであるうか。

物語の中で最も目を惹くのは、正義を掲げて闖入してくる家族たちの振る舞いである。彼らは深夜、Kの住むアパートを目指して押しかけてきた。許可を得ることなく部屋に入り込んだ家族たちに対してKは「何をしに來たんです？」と問うが、家長である紳士は「自分の家に來たのに、何をしに來たと

は、どういう意味かね。君は、おかしな口のききかたをする」と、Kの部屋が自分たちの居場所であると主張する。猛烈に抗議するKに対して、家族は会議を開き多数決によつてここが自分たちの家であることを決定するが、この決定の正当性は単なる数的優位によつて保障されているわけではない。彼らの正当性を担保しているのは、Kの力を凌駕する物理的な暴力なのである。闖入者を追い出そうとするKに対して家族たちは次のように述べ、Kを「正義の力」によつて抑え込む。

「こいつは、自分に都合が悪くなると、多数の声を踏みにじつて、暴力に訴えようとするんだ。この老婆を、この可憐な子供たちを、この夜空に追出そうという、悪魔のような奴。私たちの自由を守るために、私たちの取るべき手段は……」すると紳士の長男がその後をつづけて言いました。「ヒューマニズムの陣営を武装することだ。」つづけて次男が、「暴力には正義の力をもつて闘わなければ^{ママ}ならない。」

Kは抵抗する度に紳士と長男・次男の三人に殴られ、羽交い締めにされ、彼らの言う正義の力によつて従順を強いられるのだが、正当性の根拠がそうした圧倒的な暴力に支えられている以上、多数決は単なる形式的な手続き以上の意味を持ち得ない。たとえKに家族があり、闖入者たちより数的優位に立つ

たとしても、対抗する力が弱ければ、闖入者家族はヒューマニズムの名の下に少数の権利を主張し、暴力によってそれを押し通すことができるだろう。彼らは、ベンヤミンの言う「法措定の暴力と法維持的暴力」（『暴力批判論』ヴァルター・ベンヤミン著作集Ⅰ）野村修訳 晶文社 一九六九年）の双方を兼ね備えた存在なのであり、合法的な権力をも合法化して他者を支配することができる。闖入者家族は、他者の領域へ侵攻し、占領する威力そのものの表象なのである。

ところで、闖入者たちはどのような目的を持ってKの部屋にやってきたのだろうか。家族たちによる突然の闖入の後、殴られ気を失ったKが翌朝、目を覚まして気付いたことは、「第一に財布がなくなつて」いたことだった。闖入者たちは、場の占領とともに、Kの金を目当てとしていたのだ。彼らはすぐにKの「貧弱な財布で道具をそろえ、もう一銭も残っていない始末」となり、Kが会社から持ち帰る給料で生活を維持しようとする。Kの給料日は既に家族たちに把握されており、帰宅するなり「K君、月給袋を出したまえ。」と、全ての金銭を差し出すことを要求されるのである。Kは恋人のS子に給料袋を預け、闖入者たちには渡すまいとするが、結局は奪い取られてしまう。闖入者たちには部屋を占拠された上に、Kは搾取される立場に追い込まれてしまうのである。Kが最後の抵抗として準備したアパート住民へ団結を呼びかけるピラには、次のように書かれていた。

私は不当にも未知なる一族によって、突如住居を奪われ、全生活を支配されるに至つた。私は一切の自由を失い、餓死寸前にある。しかも私は労働によって彼らを養わなければならないのだ。こうした不当なことを、彼らは多数決という美名にかくれ、家族の人数をたのみに、合法的に押しつけてくる。諸君、こうした非合理が許されるとしたらば、社会は破滅以外にたどる道がないではないか！

自己の労働によって、自らを支配する他者を養わなければならないという搾取の構造は、Kの生活のみに降りかかった特殊な災難ではない。右記の引用文に続けてKは「私一個の問題ではない。明日に待ち受けている諸君の運命である」と記しているが、作品の中では長女キク子の口から、これまでもKと同様、搾取され死んだ人間が幾人もいる事実を告げられる。また、実際にKが助けを求めて駆け込んだ弁護士の家は、既に一三人の別の闖入者家族によって襲われていた。これらの挿話は、強者による弱者の労働力搾取が一個人の身に起きた悲劇ではなく、普遍的な事態であることを示している。そして、言うまでもなく、そうした事態は、虚構世界の中だけに限定されるものではない。マルクスが「資本主義的生産の不可欠の条件」（『資本論第1巻第2分冊』大内兵衛・細川嘉六監訳 大月書店 一九六八年）として労働力の搾取を捉えたように、資本が流

通する現実の世界であればどこにでも、容易に見出すことのできる光景なのである。

「闖入者」の物語を構成しているのは、以上のような暴力による占領支配と搾取のモチーフである。それらを体現する家族の形象は、個別の具体性を剥ぎ取られて「写實的リアリティよりも抽象的リアリティ」（石沢秀二「友達」前掲）を持ち、「なにかしらこわいもの」の侵略を恐怖のうちに予感することでもできる感覚的拮抗」（同前）を備えている。ゆえに、特定の時代や場所に制限されることなく、読者が本作品を受け取る任意の時間と空間で、占領と搾取が実行される多様な現場を想起することが可能となるのである。「闖入者」は、国境を越える世界性を備えた小説であると同時に、読者が生きる時代に応じて読み解かれる可変的なリアリティを表出する作品であるのだ。

四 グローバリゼーションと〈新〉植民地主義

闖入者家族とKとの関係は、力尽くで従属を強要する者とそれを受け入れざるを得ない者とは対峙する様々な場を喚起するアレゴリーとなっている。この寓意は、個々の読者がそれを読む時代と場所に対応する即物的な意味を生成するものであり、本作品を読む者にいかなる不正義が行使される現場で生きているのかを問いかけるものでもある。

では、現在の日本において「闖入者」を読む時、そこにはど

のような情況が看取されるだろうか。本稿は、物語の基軸となっている占領支配と搾取の問題を、より複雑な関係の中で捉えることで、自らが生きる場を浮かび上がらせることができると考える。その手掛かりとして、作品には闖入者たちがKに対して自己犠牲を要請する場面が描かれている。家長の紳士からお茶を入れるよう命じられたKが、要求を拒否する次の場面がそれである。

「お茶なんてありませんよ。」とぶつきら棒に答えると、「ないとかあるとか聞いているんじゃない。いれてくれと要求しているんだ。そんな態度で共同生活が成立つと思っているのかね。」

「ないものは仕方がない。」

「手に入れる努力をすればいいじゃないか。福音書にも言っている、善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりに刈り取るべしとね。共同の福祉のために努力を惜しんじやいけないな。キリストはまたこうも言っている、与うるは受くるよりも幸いなりとね。さあ、行つて隣人にその幸いを授けて来たまえ。それとも君は、私たちにそれだけの信用がないという口実をもつて、私たちに侮辱を与える気かね。」

ここで紳士が神の言葉を敷衍してKに要請しているのは、

公益を維持するためには個別の利益を棚上げし、共同体のために進んで善き行いを実践せよということである。もちろん、それを論ず紳士は自分自身の利益を優先しているのであり、挺身するKには不平等な損失しかもたらされない。紳士の行為は、他ならぬ自らの口から吐き出された言葉を裏切っているわけである。

これが笑えないレトリックであるのは、紳士の口振りを真似る者が今、我々の目の前にいるからだ。日本政府は次のように述べている。

在日米軍施設・区域がその機能を十分に發揮するためには、これを抱える地元の理解と協力が欠かせない。(中略) 沖縄は、米本土やハワイ、グアムなどに比べて東アジアの各地域と近い位置にある。また、南西諸島のほぼ中央にあることや、わが国のシーレーンにも近いなど、安全保障上きわめて重要な位置にある。こうした地理的特徴を有する沖縄に、高い機動力と即応性を有し、様々な緊急事態への対処を担当する米海兵隊をはじめとする米軍が駐留していることは、日米同盟の実効性をより確かなものにし、抑止力を高めるものであり、わが国の安全のみならずアジア太平洋地域の平和と安定に大きく寄与している。

(防衛省編『平成27年版 日本の防衛―防衛白書―』日経印刷

二〇一五年)

在日アメリカ軍は、二〇一四年三月三十一日現在、日本国内に八四箇所の専用施設を持ち、総面積三〇八二三千平方メートルの土地を占拠している。⁷⁾ また、在日米軍関係経費として、二〇一五年度予算では総額七二五〇億円が、我々の納めた税金から拠出されている。⁸⁾ これだけを見れば、アメリカ軍は本作品が発表された時代と変わらず今もなお、日本を占領支配し搾取する闖入者である。だが、アジア太平洋地域の平和と安定という公益のために、沖縄のような一部の地域へ過度の負担を強要し、理解・協力せよと要請しているのは日本政府である。それは、決して抑圧されるKの立場にあるわけではない。支配と搾取を代行する日本という国家は、アメリカ軍と同じ闖入者家族の一員であるはずだ。

このような支配・搾取される地域の内部において入れ子型に構造化される別様の支配と搾取は、マイケル・ヘクターの言う「国内植民地主義 Internal colonialism」(Michael Hechter. *INTERNAL COLONIALISM*. London: Routledge and Kegan Paul, 1975.) と捉えることができるだろう。ヘクターは、中核―周辺間の相互作用に起因する地域間の構造的な不平等が、海外植民地と同様国内においても周辺領域を社会構造の中で従属的な地位に押し込めると論じている。

西川長夫は、この「Internal colonialism」の認識枠組みを国民や民族の領域を越えたより普遍的な場に据えることで、現

在のグローバル化過程で進行している新たな植民地主義を理解することができると考えている（西川長夫『（新）植民地主義論』平凡社 二〇〇六年）。

西川によれば、資本や労働者、文化や情報といった様々な人や物が国家の枠組みを超えて地球規模で移動するグローバルゼーションは、世界を相互にネットワーク化し、資本を中心に向着て集積する回路を作り上げる。国境によって遮られることのない経済的・文化的な交換によって超国家的な秩序が形成され、国民国家の単位では状況を認識することができない新たな世界を出現させるのである。この世界を、国家の集合としてではなく、地球規模で実践される経済資本・文化資本の再生産システムとして理解する時、「Internal colonialism の internal はもはや「国内」ではなく「地球内」と訳さなければならない」（『（新）植民地主義論』前掲）と西川は述べている。国境という障壁が縮小し平面化した地球という連続する領域の内部全てが植民地主義の搾取対象となり、複雑に構造化される格差によって形成された差異を原動力として、資本は自己増殖を継続するのである。

こうした地球規模で実践される資本の再生産は、旧来の植民地の概念を大きく変化させる。グローバル化された世界における植民地主義は、ある国家が軍事力を行使して他国の領域を占領下に置き搾取を行うという形態を取らず、物理的な領域支配を必要としない「植民地なき植民地主義」（同前）として現象

すると西川は指摘する。なぜなら、労働者が容易に世界を移動できるようになった現在においては、労働力の担い手となる移民を資本が集積する中心領域に呼び寄せることは造作ないことであり、これまでの植民地のように固定化された領域を継続して維持管理することの方が困難であるからだ。⁹⁾ グローバリゼーション時代の支配と搾取にとって重要なのは、過去の植民地主義のように労力をかけて特定の地域を領有することではなく、資本や労働力を周辺部から世界の中核へと効率的に移送することなのである。¹⁰⁾

こうしたグローバル化過程の植民地主義において諸個人が担わされているのは、世界の中心へと流れていく資本の中継地点としての役割である。資本そのものの支配者となれない以上、そこでは自らが他者を収奪し、そして自らも他者によって収奪されるという両義的なポジションを引き受けざるを得ない。これを本稿の文脈に即して言い直せば、グローバル時代を生きる一人一人が、「脅迫と飢えに疲れはてて」「自死に追い込まれるまで搾取されるKであり、「すべてを耐えうる愛の道に向つて逃出すの」と犠牲を堪え忍ぶよう強要しながら他者を支配する闖入者家族でもあるということだ。

グローバル化が進む現在の日本という場において「闖入者」を読む時、闖入者家族とKとの関係を、往時のように、国家間に惹起する占領支配―被占領支配、搾取―被搾取の単純な二項対立と捉える見方は成立し得ない。これまで考察してきたよ

うに、支配・搾取する者とされる者とは、相互に入り組みながら混在しているのであり、それぞれの立場が明確に分かたれていないわけではないのである。グローバルな領域内に生きる我々は、他者を略取する主体であり、略取される主体でもある。「闖入者」は、そうした現在に生きる自らの両義的な在り方を目の前に突きつけるのだ。

五 反転する日常／戦場

以上のように本稿は、「闖入者」に備わる抽象性を自らが生きた今この場所に引き寄せながら読み解くことで、グローバル化時代における支配と搾取の重層的な構造を浮き彫りにし、本作品が新たな植民地主義の様相を剔抉するものであることを明らかにしてきた。

現在を覆うグローバル化の波は、既存の世界システムを再編し、これまでの植民地主義の在り方を大きく転換させるものであった。だが、グローバル化によって変化させられたのは、植民地の構造だけではない。グローバル化の過程は、植民地主義の原罪とも言うべき「戦争」の意味をも変えたのである。

近代の戦争は、クラウゼヴィッツの古典的な定義によれば、「他の手段をもつてする政治の継続」(『戦争論上巻』清水多吉訳 現代思潮社 一九六六年)であり、「敵をしてわれらの意志に屈服せしめることを目的とする暴力行為」(同前)である。主権国

家体制を確立した一六四八年のウェストファリア条約以降、この暴力行為を担ってきたのは相互に独立して対峙する国家であり、それらは互いに競い合って他国を搾取し続けてきた。

ところが、二〇〇一年九月一日にアメリカで起きた事件とその後の戦争が象徴的であるように、国家ではないものが戦争の主体を担う状況が現れてきたのである。ニューヨークの世界貿易センターに二機の旅客機を突入させることで宣戦布告もなく合州国を攻撃したのは、「国家を超えてネットワーク化された一種の暴力的なNGO」(ウルリッヒ・ベック『ナショナリズムの超克』島村賢一訳 NTT出版 二〇〇八年)であるテロリストたちであった。この時、国家と国家が闘うという従来の戦争の前提が崩れたのだ。国家のプレゼンスが低下するグローバル化した世界では、「すべての戦争は内戦となるか、あるいは超国家的な巨大な暴力に対する、内部からの非合法的な反撃となる」(西川長夫『戦争の世紀を越えて』平凡社 二〇〇二年)のである。

こうした戦争概念の変化を踏まえるならば、アパートの一室というドメスティックな空間内でKが給料を取り上げられた際、「激しい怒りの発作に襲われ、敢然と立つて挑戦」して暴力を行使しようとしたことは、テロリズムの、そしてグローバル化の、そして「闖入者」の舞台となっているアパートの部屋は、グローバル化する現在における戦場の空間であるのだ。闖入者家族の論理を非合法的な反撃によって崩そうとしたKの行動は彼ら

からの報復を招き、「次男坊の拳で右眼をいやというほど腫らされた」が、過剰な暴力で被抑圧者の異議申し立てを封じ込める闘入者たちの行動は正義を掲げテロ以上の法外な破壊と殺戮を世界の各地にもたらしながら「テロとの戦争」を遂行する強権の姿を髣髴とさせるものである。ここで、最終的に「脅迫と飢えに疲れて」死に迫いやられるKの姿を思い起こせば、圧倒的な火力を行使する国家の暴力とテロの暴力とを区別する見方は無効となるはずだ。テロであろうと正義の戦争であろうと、暴力がもたらすのはいずれも個人の死であることに変わりはない。この小説に見出せるのは、剥き出しの身体を暴力の現場に晒さねばならない現在を生きる諸個人の姿であり、生活空間が突如として自らの生命を脅かす戦闘現場へと様変わりしてしまう不安定な日常の状況なのである。

アパートの一室で勃発する戦争は、日常の世界が不意に戦場へ反転することを示唆している。今、世界各地でテロが行われているように、日常生活を送る現在において、いどこで非法的な暴力による抵抗に遭遇するかは誰にも分からない。あるいは自らが実力行使によって抵抗しなければならない情況に追い込まれるかも知れない。グローバル化する世界において、戦争はもはや非日常の事態ではなく、海の向こうで始まるものでもない。Kと闘入者との闘いは、そうした理解が既に過去のものであることを示し、現在が常に既に戦時下であることを告げているのである。

注

(1) 本作品の初出は、安部公房『闘入者』『新潮』一九五一年一月)

である。作品本文の引用は、校訂により誤記が修正された初刊本(安部公房『闘入者』未来社 一九五二年)に拠った。本作品は、一九五五年にラジオドラマ化されており、一九六三年にはテレビドラマ化されている。また、「友達」と改題して戯曲化されている(安部公房『友達』『文芸』一九六七年三月)。「友達」は、後にシエル・オーケ・アンデション監督によって映画化されている。映画版「友達」については、友田義行「地下茎状の原作」『文学』二〇一四年一月)が原作との関係をも含めて詳細に論じている。

(2) 「闘入者」は早くから、GHQが敗戦後の日本にもたらした民主主義の問題を中心に据えて読解されてきた。例えば、浅見淵他「小説月評」『文学界』一九五一年一月)はデモクラシーへの諷刺は見当違いであり、まず独裁政治や全体主義を批判しなければならぬと苦言を呈し、関根弘「安部公房著『闘入者』」『近代文学』一九五三年三月)はブルジョア・デモクラシーへの抵抗がアナキズムに陥っており、プロレタリア革命へ至る組織的な闘争が描かれていないと批判している。こうした戦後民主主義を巡る問題はその後も作品解釈の基軸として敷衍され、小田切秀雄「鑑賞」『日本短篇文学全集第48巻』筑摩書房 一九六九年)、野口武彦「評伝的解説(安部公房)」『現代日本の文学47』学習研究社 一九七〇年)、田中喜一「友達」『国文学 解釈と鑑賞』一九七四

年三月)、宮西忠正「安部公房と三島由紀夫」(『三島由紀夫研究⑦』鼎書房 二〇〇九年)などがGHQ占領下の形骸化した民主主義の問題を描いた作品として「闖入者」を読んでいる。だが、それらはいずれも、「闖入者」の場合には、ごく単純に言えば、誤解された民主主義、もしくは多数という大義名分の機械的拡大解釈に対する、諷刺がそのテーマの中心におかれていたと言つてもいいだろう。作者としては、たとえば自由に対するアメリカ的神話、もしくは、保守政党の巧妙な多数原理の煙幕の利用、そして、奇しくもそれらとメダルの裏表のように一致している、左翼政党の偽似多数原理……そうした現代の皮肉な現象にホンロウされている、平凡な一市民を描き出すことに最大の目的があった(安部公房「友達」『安部公房全集20』新潮社 一九九九年)という作者の言明の枠内に止まっていると言えるだろう。近年では、作者の意図とは異なる視点から本作品を読み直す研究成果が現れている。例えば、小松太一郎「安部公房「闖入者」(『りりばーす』二〇〇三年一〇月)は、作品に描き出される家族の表象に注目することで近代の家族制度に備わる政治性への批評意識を浮上させるながら、「都市をネガティブに語り出す視座を内破しよう」とまで試みた(同前)本作品の意義を明らかにしている。小松はまた、「対アメリカという視点にだけ固執してしまうことは危険でもある」(同前)とも述べており、限定的な視点に囚われることによって敗戦後における世界的なポストコロニアル情況に対する観点を見失ってしまうと指摘している。他にも、岩本知恵「『闖入者』

論」『もぐら通信』二〇一三年一月)は、闖入者家族と主人公Kの論理に共約される同質性を明らかにし、双方が同じ民主主義の論理を内面化していると指摘した上で、「民主主義が闖入してきた」とは言えない(同前)と、これまでの先行研究の認識枠組みを根底から覆している。本稿は、こうした近年の研究成果から大きな示唆を得た。

(3) 「降伏後ニ於ケル米国ノ初期ノ対日方針」(外務省特別資料部編『日本占領及び管理重要文書集第1巻』外務省政務局特別資料課 一九四九年)を参照。

(4) この問題については、同時代に国民文学作品として評価された佐多稲子の小説「みどりの並木道」を具体例に挙げて論じたことがある。詳しくは、拙稿「佐多稲子「みどりの並木道」論」『昭和文学研究』二〇〇七年三月)を参照された。

(5) Kōbō Abe, *“Vetřelci” Červený kokon*, translated by Vlasta Winkelhöferová, Praha: Odeon, 1971.

(6) 元駐日ポーランド大使で安部作品のポーランド語への翻訳者でもあるヘンリック・リプシツ(Henryk Lipszyc)は、「『闖入者』をリライトした戯曲「友達」が一九七〇年にポーランドで上演された際、舞台の演出家と話した時の会話を書き留めており、自らと演出家がともに、男の家に突然闖入してくる家族の表象にプラハの春を連想したと記している。ヘンリック・リプシツ「時代を先駆ける「友達」」『へるめす』一九九三年一月)を参照。

(7) 朝雲新聞社出版業務部編『平成27年版 防衛ハンドブック』朝雲

新聞社 二〇一五年を参照。

(8) 外務省編『外交青書2015(平成27年版)』日経印刷

二〇一五年を参照。このうち、いわゆる「思いやり予算」と呼ばれる在日米軍駐留経費負担の総額は一八九億円となっている。

(9) ネグリ／ハートも、グローバルゼーションがもたらした重大な帰結として労働者の移動性を挙げ、「資本のグローバルな規律的パラダイムによって導入されたこの新たな移動性から、いくつかの重大なマクロ経済的效果が生じる。さまざまな人口が発揮する移動性のおかげで、国内市場(とりわけ、国内労働市場)を個別に管理運営することはますます困難になっていく。資本主義的指令を適用するのにふさわしい領域は、もはや国境ないしは伝統的な国際的境界によってその範囲を定められたものではない」(アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート『帝国』水嶋一憲他訳 以文社 二〇〇三年)と述べている。

(10) ヨハン・ガルトゥングは、「新植民地主義という現在の帝国主義の段階では、支配は過去にみられたような直接的で具体的な形をとらない。ここでの支配は、二つの中心部を相互に結びつける輸送(そしてもちろんコミュニケーション)手段を介して行なわれる。このような支配は、以前のものほど具体的ではない。それは、物理的支配を必要とせず、結合をとおして行なわれる。そしてこの結合は国際組織という形をとる」『構造的暴力と平和』高柳先男他訳 中央大学出版部 一九九一年)と述べ、そうした支配の担い手として多国籍企業や国連、軍事同盟などの国際組織の存在

を挙げている。

【附記】本文や資料の引用に際し、漢字は新字に改め、ルビ・傍点等は全て省略した。また、引用・参考資料名の副題は省略した。

浅井花子の人と作品

付：浅井花子著作目録

和田 崇

一 文壇デビューまで

浅井花子は、いわゆる「無名」の作家であり「忘れられた」作家である。試しにインターネットの検索エンジンで調べてみても、第一回芥川賞候補になったという程度のわずかな情報しかえられない。そうした情報の少ない一人の女性作家について著作目録の作成とともに、その生涯の再現を試みたのが本稿である。

浅井花子についての唯一の評伝と言える『北海道文学大事典』収録の東野ひろ子「浅井花子」によると、浅井は一九〇三年（明治三十六年）に熊本県で生まれた。そのため、浅井の小説では、熊本で過ごした幼少期をモデルとしたと思われる描写がいくつも見られる。たとえば、「ちか子」『曠野大学』一九五六年十二月には、「失業者の六人目の末っ子として生まれ、古い城下町の

裏通りに育ち、小学校を出るとするに工場で働いた」とあり、「風見の鶏」『くま』一九五八年十二月）では、熊本市内の春竹町に住み、母親は六人の子どもを残して早くに亡くなり、小学校を卒業すると町で一番大きい印刷会社の文選見習工となったことが描かれている。そして、随筆「六月の心」『浮標』一九五三年八月）で記されたように、十七歳となった年の六月に、「メリンスの単衣に、一冊のノートと雑誌、僅かな旅費を懐に入れて」「放浪の第一歩を踏み出した」のだった。

随筆「エンジ色の春（日活篇）」『竹やぶ』一九五六年五月）によると、それから四年後、二十一歳となった浅井は、京都の大將軍にあつた「日活撮影所の第二部技芸員」となっていた。しかし、観客が抱く華やかなイメージとは裏腹の日活撮影所の「みじめで不安定なサラリーマンの生活」に幻滅する中で、「資本主義」という言葉に興味を持ち、本屋で「河上博士の資本論

解説、や赤い表紙のロシヤ革命史」などを買求めた。加えて「プロレタリア文学の「二週間」「赤い恋」「女工哀史」を読んだことは、後の彼女の創作に影響を与えている。そして、「総同盟が分裂して評議会が生れた時、背景部、タイトル、大道具、ライト掛りの人たちの手で日活キネマ支部が組織され、評ぎ会の合同労働組合に加盟し」、浅井の家でひらかれた研究会には、国領伍一郎がたびたび参加していたようだ。

この京都時代に関する浅井の回想が事実であることは、『京都地方労働者教育運動史』によつて確認できる。同書には、一九二六年（大正十五年）一月十四日、京都の合同労働組合（日本労働組合評議会系）千本支部において、谷口善太郎、橋本寅太郎、浅井花子、前川好子らが研究会活動を盛んに行わなければならないことを強調したことや、同月十八日、京都の電気工組合（同評議会系）の第四支部において、浅井が「無産婦人運動」という題の発表を行ったことが記されている。二十代前半の浅井は、京都にいた。

一九二三年に起きた第一次共産党事件から二八年（昭和三年）の三・一五事件にかけて、激動の時期を京都で過ごした浅井は、「迫害されつゝある×員の妻より」（『戦旗』一九三〇年二月、婦人欄）において、夫が第一次共産党事件で検挙され、生まれたばかりの赤ん坊とともに飢えにさいなまれたりスパイに追われたりする中、それでもたくましく生き、同志獲得のために闘う決意を述べている。このように、貧困の中で革命運動のために闘

う婦人闘士の姿が、いくつかの資料で浮かび上がる浅井花子のイメージである。

そして、浅井は上京した。その時期は定かでないが、少なくとも一九三三年までには東京にいたと考えられる。それは、間宮茂輔が、自身が「検挙される（一九三三年の——引用者注）二ヶ月ぐらい前」の出来事として、浅井との出会いを回想しているからである。間宮は、アジトにきた「小柄なレポーター」が火鉢の金網の上にあつた二つ三つの切餅を「ぺろっと平らげ」、追加で出した三つ四つも「またたくひまに食べてしま」ったことに驚き、帰り際に彼女にまた「三つ四つ古新聞にくるんで渡した」ことを述懐している。その「小柄なレポーター」こそが浅井だった。後でわかったことだが、当時の彼女は欠食（何とも食えずに）三日目であり、飢えながらも組合活動が続けていたのである。

こうして、一九三三年以降の転向の時期に入り、組織が弱体化する中で、浅井は引き続き末端の成員として革命運動のために活動した。しかし、彼女はそこで運動内部のさまざまな矛盾と直面する。そして、その矛盾により生じたアイデンティティの揺らぎが、彼女に筆を執らせることになった。

二 プロレタリア文学派の有力新人

浅井の文壇デビュー作は詩であった。『婦人文芸』の

一九三五年四月号に掲載された「バスケット」には、貧しい生活の中、我が子へのお土産であるバスケットを抱きしめながら、同時に幾万の貧しい子供たちへもこのバスケットを行き渡らせたいと願う母の気持ちが描かれている。この詩は、『婦人文芸』同年六月号の「巻頭言」において、神近市子が絶賛し、「作品の社会化」の実践例として紹介された。

つづいて、同年五月号の『文学評論』に小説「ある夫婦」が発表された。前掲の東野ひろ子によると、同作品は「宮本百合子に励まされ」て発表したらしい。「ある夫婦」は、三・一五事件で検挙された夫が釈放された後、極貧の状況下にある夫婦と一人息子の三人家族の生活模様を、妻の弘子に焦点化して描いた作品である。飢餓にさいなまれるその日暮らしの生活の中で、革命運動に対する不信も湧き上りながら、弘子は理想と現実の狭間で葛藤するのであった。

また、六月号の『婦人文芸』には小説「泥濘の春」が発表された。同作品は、紙芝居を興業して生計を立てながら、貧民窟で暮らす千枝が主人公である。千枝には秋田という同志の恋人がいて子供も生まれたが、インテリで階級的に没落したこの男と別れ、現在は母子二人で生活している。そんな中、千枝が紙芝居で使う画の配給先にいる外村はかつての恋人と似たところがあり、彼女の中に異性との恋愛感覚が思い起こされてくる。しかし、外村の女性蔑視の態度や周囲の男たちの彼女に対する差別に憤ることで、千枝は「しっかりと心を武装して生きなければ

ならない」と思うのであった。

冒頭で挙げたように、浅井は石川達三が「蒼氓」で受賞した第一回芥川賞の候補となったが、その候補作が右の二つの小説であった。選考委員の川端康成は、「詫びる」(『文学評論』一九三五年五月)で同じく芥川賞候補となった渡邊寛とあわせて、「渡邊氏と浅井氏は労働者の中より新しく生れて来た。プロレタリア文学としてその素材にも作者の生活にも、よい感動が溢れ胸打たれた」⁽⁵⁾と評している。つまり、浅井はプロレタリア文学派の有力な新人として文壇に迎え入れられたのである。

もちろん、一九三四年二月にプロレタリア作家同盟が解散して以降の作品に「プロレタリア文学」という呼称を与えることは、本来適切でないかもしれない。当時は、非合法で政治的任務を遂行する活動家のみならず、文化団体の関係者にまで検挙の手が及んでいた。国家権力による徹底した弾圧の下で萎縮した作家たちは、次第に政治的な主題を作品に描かなくなり、中には思想そのものを「転向」する作家も現れていた。しかし、この時期の浅井の作品の多くは、貧困と女性蔑視にさいなまれる中、退潮期の革命運動に婦人労働者がどのように参与するかを主題としている。そのため、転向期に新しい「プロレタリア作家」が誕生したと考えるのもよいのではないか。川端の指摘と呼応するように「作者の生活」がプロレタリア文学の「素材」となった浅井の創作意欲は止まらず、『文学評論』と『婦人文芸』を中心に次々と作品を発表していった。

戦前に浅井が発表した創作は、確認できた範囲で詩が四篇、小説が七篇である。その中で最も注目を浴びたのは、一九三六年五月号と六月号の『文学評論』に連載された小説「地下道の春」であった。同作品は、労働運動に携わる婦人労働者の千代が主人公である。千代は、同じく運動に参加する安子とわびしい下駄屋の二階で共同生活をしており、彼女らとともに階級的落伍者との失恋を経験していた。潔癖なまでに運動を一義的なものとする千代は、インテリの山川に対して、恋愛を労働運動と切り離すのではなく、その仕事の一部としてお互いを政治的にも高め合う階級的恋愛を求めた。しかし、山川の通俗的な恋愛観の前に、二人の関係は破綻する。また、婦人部で街頭レポをする彼女は、レポの仕事を軽視する支部常任委の態度に反発し、工場に基礎を置いた生活をしたいと願い、同志の山形の紹介で小さな印刷工場に入ってしまった。

「地下道の春」は、浅井の生涯で最も多くの論評を受けた作品である。同時代評は著作目録に記載しないため、ここで「地下道の春」評の主たるものを列挙しておこう。

- ・青野季吉「文芸時評（6）」『報知新聞』一九三六年五月三日
- ・松田解子「山鏡」「地下道の春」連載小説『人民文庫』一九三六年六月

- ・間宮茂輔「文芸時評 作品評を主として」（『文学評論』一九三六年六月）

- ・村山知義「文芸時評（二）」『国民新聞』一九三六年六月十七日
- ・徳永直「文芸時評」『文学評論』一九三六年七月
- ・金龍済「地下道の春」について『文学評論』一九三六年七月

評者がプロレタリア文学系の作家ばかりであることは言うまでもないが、にもかかわらず、その多くは作品の完成度に対して批判的なものばかりであった。たとえば、間宮や村山は、作者の主観性が煩わしいほど強いとし、描写に客観性がないことを指摘した。また、青野や徳永は、所々に穴が空きバラバラとなっていると、構成の曖昧さを指摘した。構成力の欠如は、後述するように戦後の浅井の作品に対しても指摘されていることであり、たしかに彼女の欠点である。しかし、それ以上に革命運動における恋愛や役割など、内容が提起する問題について特筆すべきではなかったか。

この点に唯一触れたのは金龍済である。金は「地下道の春」を「婦人闘士の愛情の問題をとり上げた力作」と評価している。だが一方で、作中の千代の態度が「思想や運動に対する態度（世界観や人生観）と人間性とを分離して二元的に考へてゐること——つまり愛情の問題を全階級生活の一部として考へないで、男女間の性生活をもつと奥深いものとしてゐるところに、非プロレタリア的な変態性をすら暴露してゐるのであり、「しかも、作者は彼女のプライドを非階級的な感傷的愛情（むしろ露骨な情欲）に引きずり込ませて、単なる女としての理解しが

たい屈服を非人間的な山川の前にさせようとしてゐるのではないだろうか」と批判した。この金の評には、組織崩壊前のプロレタリア文学運動で展開された公式主義の残滓が見え隠れする。結局、革命運動の一義性の前で恋愛は二義的ないしそれ以下であり、運動の全体性の中で個人は抹消されてしまう。また、「非階級的な感傷的愛情」を「単なる女としての理解しがたい屈服」として、階級観を無視した情動的な恋愛を「単なる女」がするものだとしている点も見逃せない。感傷的な恋愛観は女の持つ性質であり、「男性」運動家のように冷静になることを求めているのである。

しかし、「地下道の春」には、金の公式主義的な批判だけでは把握できない重層的な問題が内包されている。それは、「ある夫婦」や「泥濘の春」と同じく、貧困や恋愛、それらと革命運動をどのように止揚するかという問題である。とりわけ性差の問題については、先の二作品よりも発展的に描かれていると言つてよいだろう。たとえば、「泥濘の春」の千枝は、紙芝居という男性ばかりの職場で女性が働くことで揶揄され差別を受けるというように、女性蔑視の描かれ方が単純であった。ところが千代の場合は、婦人は街頭レボをするべきという性役割を与えられながら、しかも、その仕事は男性幹部によつて軽視されるという二重の抑圧を受けている。結局、千代は工場労働者となることで男性たちと同等の役割を果たすことを企図するしかない。このことは、革命運動に内在する女性差別を露呈した

に留まらず、政治活動において女性が認められるためには、恋愛を捨て、出産も放棄し（「地下道の春」において、組合員同士の結婚の条件として産児制限をするべきと男性労働者が意見している）、過度に男性化することが求められるという問題にまで敷衍できるだろう。

ただし、「地下道の春」を全面的に評価することができないのもまた事実である。たとえば、金も指摘した「思想や運動」と「人間性」の関係については、浅井自身も旧来の階級的恋愛観を脱していない。そもそも、プロレタリア文学における「愛情の問題」は、すでに一九三一年頃に議論された問題であったが、その時話題となった片岡鉄兵「愛情の問題」（『改造』一九三一年一月）や江馬修「きよ子の経験」（『ナツプ』一九三一年二月）など男性作家の諸作品では、通俗的な恋愛を求める人間は政治的にも没落し、組織の離反者となることが描かれていた。このような階級的落伍者の描かれ方は、浅井のいくつかの作品にも共通して見られ、基本的な構図はそのまま継承されている。また、転向期に革命運動と恋愛の関係を描くことに新奇性があつたかという点、そうでもない。政治運動における夫婦関係を主題としたものでは、佐多稲子の「くれなゐ」（『婦人公論』一九三六年一月）、『中央公論』一九三八年八月）や「山嶺」（『中央公論』一九三六年五月）、あるいは平林たい子の「女の問題」（『改造』一九三五年十一月）や「その人と妻」（『中央公論』一九三六年三月）など、著名な女性作家も描いている。また、同志間の恋愛と友

情をテーマとした利根川ユリ「歩み」(『婦人文芸』一九三六年五月)など、浅井と同じく無名の書き手も愛情の問題を描いた。

しかし、それでも浅井の作品を評価したいのは、革命運動に従順に参加し、作品の人物形象においても公式的な構図が見られながらも、感傷的な恋愛との葛藤や出産の問題、運動内部における性役割など、政治運動に参加する女性の内面の揺らぎを、当事者の視点で一貫して描いたからである。時系列を先んずれば、戦後に彼女が創作活動を再開した時にも同様のテーマが繰り返し描かれた。婦人闘士のアイデンティティに対する彼女のこだわりは、それだけ強かったのである。

他にも浅井は、後に小林多喜二の作品などとともに中国語に翻訳された小説「千人針」を一九三六年八月号の『労働雑誌』に、翌年四月には『文学界』に小説「古きもの」を発表するなど、精力的に執筆活動を続けた。しかし、三七年六月号の『婦人文芸』に、「作家訪問 浅井花子氏」と題して写真が掲載されて以降、戦前に彼女の著作は確認できない。この時、写真には次のような詩が付された。

はげしい風の日、雲は四散して、草木は非常時状態だ。

私は風の中に座つて、歴史の風雲を、胸一杯に感じてゐる。

ついに、彼女の身にも非常事態が訪れた。

三 北海道への逃避

文芸雑誌の誌面から姿を消した浅井は、北海道へ逃げていた。彼女は青森から函館に渡る船の中で「日支事変」⁽⁶⁾勃発の新聞記事を見ており、先の「作家訪問」に写真が掲載された翌月、盧溝橋事件が勃発した一九三七年七月に北海道へ渡ったようである。ちなみに、前掲の東野ひろ子は、「社会運動非合法中、全協オルグ活動、流浪、投獄に逢いながら札幌に潜入、活動家蔵前光家と結婚」と記している。この時期の出来事については、随筆よりも小説で多く回想されているため、すべてを事実と受け止めるわけにはいかないが、小説の記述を参考に可能な限り再現したい。

浅井が結婚した蔵前光家は、社会運動関連の事典に人名項目があるほどの有名な運動家であった。たとえば、三・一五事件で検挙され不起訴になった後には、神奈川県オルグだった田中清玄と交代して県委員会の責任者となっていた。⁽⁷⁾また、四・一六事件で検挙された後の公判の様子は、『特高月報』一九三〇年四月分に記載のほか、『東京朝日新聞』一九三〇年三月四日の記事では、「法廷内で革命歌を合唱乱舞」したことが伝えられている。

そんな光家と浅井が恋愛関係になり結婚したのは、一九四〇年頃と推定できる(「ちか子」前掲)。そもそも浅井は、光家と出会う以前に別の男性との間に子供をもうけたようであるが、そ

の子を残して北海道へ逃れていた。一方の光家も、大和サツシュ工場で争議が起こった際、警官や暴力団に対して体を張って仲間をかばう若い組合員の姿に同情し、社長夫人の座を捨てて争議団に合流した三浦ウメと結婚した過去があった。⁸運動と恋愛の両面において、ともに凄絶な過去を持つ二人の恋愛は、戦後の浅井の作品によって、出会いの甘美さとその後の結婚生活の凡庸さとのコントラストを伴いながら、たびたび描かれることになる。

蔵前夫婦は結婚後、小樽に渡り、光家は昔の知人を頼って岸鉄工所の旋盤工となった（「ちか子」前掲）。ちなみに、倉本稔の小林多喜二伝には、多喜二の「転形期の人々」に登場する中嶋鉄工所のモデルとして、同名の鉄工所が紹介されている。⁹中嶋鉄工所のモデルとなった「岸鉄工所」は、境一雄の友人の父親が経営していたため、小樽の労働組合は同鉄工所の部屋を借りて事務所にしていたそうだ。この「岸鉄工所」と光家の勤め先が同じかは定かでないが、思想犯で何度も検挙歴のある光家を雇用した点において、同一の可能性はあると言えるよう。

こうして、蔵前夫婦は小樽で新しい生活をスタートさせた。ところが、一九四一年十二月九日の早朝、光家は予防拘禁法によって検挙され、四四年の末まで予防拘禁所に拘禁されてしまう。それまでに多くの時間を革命運動のために費やした夫婦には、安息の日々はなかなか訪れなかった。そして、四五年七月、終戦の一月前に光家は拘禁所から帰り、そのまま元の職場であ

る岸鉄工所の現場監督となった（「風見の鶏」前掲）。

四 戦後小樽の文化人

戦争が終わり、占領軍の支配下という条件つきではあるものの、ようやく浅井のような婦人運動家が自由に発言できる時代となった。それを象徴するように、戦後の新聞紙上で最初に彼女の名前を確認できるのは、一九四七年一月に『小樽新聞』に連載された「婦人団体代表者を囲む座談会」という記事である。この座談会をはじめ、彼女は小樽在住の文化人として、『小樽新聞』や『みなと新聞』、『夕刊北海タイムス』など、小樽で発行された新聞に多数の記事を執筆した。¹⁰

記事の内容は多岐にわたるが、やはり婦人の政治参加に関するものが目につく。たとえば、一九四七年四月一日の『小樽新聞』に掲載された「現実のぬかるみから」では、戦後に広がった「デモクラシー」という言葉が形骸化し、古い空気が依然として残る中、婦人の政治に対する無関心を指摘し、関心を持つよう促そうとしている。また、四九年三月三十一日の『みなと新聞』に掲載された「四月の希望」では、四月十日の婦人デーによせて、日本の婦人運動の歴史やイブセンの『人形の家』の内容に触れながら、婦人が古い生き方を捨て新しい人生の一步を踏み出す必要性を訴えている。

この時期に書かれた記事の中で、浅井花子という女性作家の

一生を象徴するような随筆がある。それは、一九五〇年一月八日の『北海タイムス』に掲載された「新しい心」である。少し長いが重要な箇所を引用したい。

宗教と文学と、哲学と社会運動の思想の林をさまよい、新しいモラル、新しい生活、新しい社会を求めながら、さて、私のその内容は、結局現実にはネ返されることではなかった、私にとって、いままでの現実はまだ不合理で社会生活も家庭生活の空気も、自分の命を枯死させるようなものでしかなかった、何故か―それは私が女であることに つきる、

いままで女が女らしく生きることが、ゆるされたが、人間らしく生きることがゆるされなかった、女らしい寄生的な考え方を認められても人間的なモラルを追求することは非難された、

女が思想を持つ、何という大胆な―女は草花の様に弱く、すなおで強い力のかげに生きてゆくものときめられていたので、女の人間性、独立を主張する私の情熱はいつも水をかけられていた、

私の希む家庭は男女の自由な協力の具体化したものであるのに、人々はそれは家廃^{アパード}ではないと否定する、トゲのように私をとりかこんださまざまの否定、それはどこに根拠をもつていたろう、本来人間性の中にはない―封建的

な社会制度、社会ソシキ―社会思想の中に、それが意地悪く個人の生活内容にまでささつてきたのだった

「男女の自由な協力の具体化した」家庭を求めて、終戦後も彼女の煩悶は続いた。

五 同人雑誌と中央文壇

戦後、確認できた範囲で一九四七年から執筆を再開した浅井であったが、創作はしばらく発表しなかった。そして、戦後で最初に確認できる創作は、戦前の文壇デビューの時と同じく詩であった。

一九五二年九月に発行された『浮標』創刊号に「詩」とシンブルな表題が付され、埋草のように三段組の一番下に掲載された浅井の戦後最初の詩は、「芥川も死んだ 有島も死んだ 春月も死んだ」とあることから、昭和初期頃の心境をつづったものだと考えられる。「手を振った 生きて見よう／美しい心で―秀れた精神で―」と結ばれたこの詩の最後は、執筆時の現在と結びつけることで、浅井という一人の女性のみならず、戦争をまたいで約二十年間を「生き」た日本人が「美しい心」でいられたかを問ひ直しているようにも感じられる。

つづいて、浅井の戦後最初の小説は、同じく『浮標』の三号（一九五二年十一月）に発表された「女見川市場」であった。小

樽市内にある妙見川市場の立ち退き問題をモデルとし、市場を牛耳る暴力団と市との関係に民主主義が形骸化していく様子をとらえ、同時に社会運動家である夫との微妙な距離感を感じさせる内容で、戦後の浅井の置かれた状況を形象化した意欲的な作品であったが、残念ながら未完に終わっている。同作品の記述を参考にすると、この頃、彼女は小樽の市会議員選挙に無所属で出馬し、その様子は新聞でも報じられたらしい。また、繰り返し引用している東野ひろ子は、浅井が「婦人有権者同盟」をつくり市議選に立候補したと記しているが、事実確認までではなかった。いずれにせよ、浅井は小樽という北の小都市で起きるさまざまな社会問題に、戦後日本のデモクラシーの縮図を読み取り、それを小説で表現したのである。

一九五〇年代なかば頃の浅井は、前掲の『浮標』と、十三号（一九五四年八月）より作品を寄稿し始めた『竹やぶ』という、小樽で発行された二つの同人誌を中心に創作活動をしていた。五五年二月、『図書新聞』の招集で北海道代表として「地方文化を語る座談会」に参加した浅井の説明によると、小樽ペンクラブの機関誌『浮標』は、活版印刷で五百部を刷っており、同人数は発会時に八十名だったが、半年もたないうちに三百名となった。一方の『竹やぶ』は、小樽の労働組合運動で活躍している中小企業の労働者を中心に組織されていた。この二つの団体は対蹠的で、前者が市長や裁判長、市会議員といった市の有名人も参加するいわゆる「文学青年の集り」だったのに対し、

後者は、最初こそセクツ的傾向があったものの、広く労働組合の文化部員を中心に連結して、広汎な同人組織になったようである。¹⁾ 浅井は、小樽の文化人グループと勤労者の文化運動の両方に参加し、それぞれの事情に精通していた。

こうして、戦時中の混乱期に北海道へ逃れ、小樽という安住の地を得て地方で創作を続けていた浅井であったが、再び中央文壇の雑誌に彼女の書いた小説が掲載された。その小説とは、一九五四年九月号の『新日本文学』に発表された「死」である。そもそも「死」は、同年一月に発行された『浮標』六号に先に発表され、佐多稲子の推薦により『新日本文学』へ転載された小説であった。内容は、夫の義弟の父が自殺し、その通夜に出席する夫婦と一人息子の三大家族の様子を、妻のかな子の視点で描いたものである。生前国鉄の職員だった故人は、小商人気質で銭勘定のに敏感で、そんな彼の死に対して、かな子はあまり同情できなかった。そんな中、家の用事では金策をほとんどしない夫が、香典のために大金を借りてきたことにはかな子は苛立つ。さらに、喪服で身を包むかな子に対し、みすばらしい格好で通夜に参列する夫と息子に、彼女は苛立ちを強めた。通夜を一通り終えて散歩に出会った夫婦は、二人が戦前の治安維持法下で組織活動をしていた頃に出会ったことを思い出す。しかし、現在の苛立たしい心をもたらず夫の性質が、出会った当初からすでに前兆があったことにはかな子は気づくのであった。一読して明らかなように、「かな子」は浅井花子を、「夫」は

蔵前光家をモデルとしている。浅井は『浮標』発表時に、管見の限りこれまで一度も使っていない「銭屋弘子」という筆名を用いており、その背景にはおそらく近親者への配慮があったのであろう。階級的自覚を持った運動家の生活感覚のなさに対し、彼女の抱く「男女の自由な協力の具体化した」家庭という理想が崩壊する様子が、この小説を通じて読み取れる。

社会運動と夫婦や家庭との関係を前景化したこの小説は、しかし、きわめて浅薄にしか読まれなかった。高見順は「文芸時評」において、「死」の発表と同月の『中央公論』に掲載された中本たか子の「壁にかかる画像」をあわせて紹介しながら、「闘士札賛」のプロレタリア文学初期においては、「同志愛で結ばれた良人を、家庭の内側から妻がこれを「いやな奴」として書くというようなことはなかった」とし、「不逞」な偶像破壊が行われたことに興味を示しながら、『死』の「妻」は、「いやな奴」としての妻の姿が躍如としている。妻を、こういう風

れない」と発言していること⁽¹³⁾から、彼が夫婦崩壊の背景として想定したのは、革命運動そのものであったことがわかる。また、花田清輝の「文芸時評」も、高見と似た観点から批判的にとらえており、中本たか子「壁にかかる画像」と壺井栄「花」を紹介した上で、『新日本文学』の浅井花子の『死』は、中本の作品と壺井の作品をマゼあわせて二でわったようなもの」と評価した。⁽¹⁴⁾

高見と花田の両方の「文芸時評」に登場する中本たか子の「壁にかかる画像」は、中本と夫の蔵原惟人との夫婦生活をモデルにしたと見られる小説である。画家でありながらも絵の仕事の収入が少ない妻が、二人いる息子の世話と家事全般を行うのに対し、戦中に非転向を貫いて新時代の文化運動を指導する夫は全く家事をせず、時には妻に手をあげることもさもある封建的な態度を描いている。浅井の「死」とあわせて読めば、たしかに高見の言う「偶像破壊」と見えなくもない。遡れば、壺井栄の「妻の座」(『新日本文学』一九四七年八月・四九年七月)で、壺井の妹と再婚後すぐに離婚した徳永直の封建的な態度が暴露的に描かれたことがあり、浅井と中本の小説もその延長線上でとらえられたのであろう。しかし、浅井の「死」は、そのタイトルが暗示するように、治安維持法下に死を回避した二つの生命が出会い、そして結局はその融合が遂げられなかった葛藤を描いており、一方の中本の小説も、ただ運動家の封建性を暴露したのではなく、運動内部の分裂による夫の苦悩に妻が気づき、

夫も少しずつではあるが自分で家事を行うようになるなど、夫婦の融和が描かれている。高見のように革命運動そのものを悪因と見なすことは簡単だが、運動ありきの生活において、それを恋愛や夫婦関係とどのように止揚するかを模索した二つの作品の提起する問題を再考する必要があるだろう。

このように、五十年問題で日本共産党や新日本文学会が内部分裂をしていた時期に、中央文壇で浅井の小説はわずかに注目を浴び、そしてまた忘れ去られていった。以降、同人雑誌評を除いて、彼女の作品が全国紙に取り上げられることはなかった。

六「風見の鶏」から晩年へ

小説「死」の論評を、浅井はどのような思いで受け止めたのだろうか。残念ながら彼女がそれに対して言及した文章は一つも確認できていない。ただ一つ言えるのは、それ以降も作家・浅井花子は書き続けたという事実のみである。

ただし、「書き続けた」という言葉が表象するものは、文献を調査して浅井の著作が見つかったその数のみであって、彼女が何を思い、どのような生活状況で筆を執ったのか、それまでは再現できない。雑誌『竹やぶ』の同人の一人は、口減らしのため江差に住む友人へ息子を預け頑張っている蔵前夫婦をモデルにした詩を書いている。⁽¹⁵⁾ また、浅井の小説では、戦後になって夫は鉄工所で設計を担当し、鋳物工場の工場長になったもの

の、工場長とは名ばかりで、中小企業で資金繰りが厳しく、夫婦の生活にも影響の出ている様子が描かれている（「風見の鶏」）。小説の記述に創作的付加があるとしても、蔵前夫婦の経済状況が決して豊かでなかったことは容易に推察できる。

こうした中小企業が置かれた現実と運動家夫婦の生活、小樽の町と日本社会の行く末、その中で揺らめく一人の女性の内面を総合して意欲的に描こうとしたのが、浅井の唯一にして最後の長編小説である「風見の鶏」であった。同作品は最初、一九五六年十二月の『浮標』十二号および翌年八月の十三号に発表された。初回の十二号掲載時に、小松伸六が「同人雑誌評」⁽¹⁶⁾でわずかに言及している。つづいて、五八年十二月に発行された同人雑誌『くま』一号に『浮標』掲載分と新たに書き足した分を加えて発表した。この加筆分には、浅井の熊本時代をモデルとした回想が含まれている。また、六五年三月に発行された『小樽文学』三号にも同名の小説が掲載されており、それまでになかった戦時中の回想が描かれ、これが最後に発表された続編となった。

「風見の鶏」は、『くま』掲載時に同人雑誌としては珍しい大長編として注目され、八木義徳と荒正人が高く評価し、その年の『北海道年鑑』にも記録された。⁽¹⁸⁾ ただし、荒が指摘しているように「終りの部分の主人公の少女時代の想い出は少し唐突な感じ」であり、戦前にも指摘された浅井の弱点である構成立の低さが露呈している。また、構成への配慮を欠くほど主人公の

感情の赴くままに現在から過去、過去から現在へと物語が展開することから、これも戦前に指摘された「主観性」の強さが表れている。しかし、その強い主観性こそが、この小説を躍動させているようにも思える。

同作品の意義は、その主観がとらえた、めまぐるしく転換する社会状況を描いた前半部に集約されている。内容を要約すると、一九五二年の小樽を舞台に、婦人運動家のサダ子を中心として物語は展開する。サダ子は夫と息子の三人暮らしで、夫の三吉は中小企業の鉄工所が所持する鋳物工場で工場長をしている。サンフランシスコ講和条約施行後の軍需で仕事が増える大企業とは裏腹に、中小企業には仕事がない。サダ子の運動家としての才能を認め自由な活動を促す夫に対し、彼女は普通の家庭、愛情に時折愛おしさを感じる。また、婦人解放をめぐつては、家庭をきりもりする庶民の立場から、アメリカニズムに彩られたプチブルフェミニストの女性解放論には反対の立場である。そんな中、破防法撤廃を意気込んで北海道巡業に來た劇団先驅座の小樽公演に際して、サダ子は責任者となることを求められ了承するが、公演を鑑賞する態度とは思えない武装防衛をする青年たちを目にして、彼女は革命運動の矛盾を感じるのであった。

さて、このように大長編を書いた浅井も、最後の続編を発表した一九六五年には満年齢で六十二歳をむかえていた。そして晩年、彼女があり余る創作意欲を表現する方法として選んだの

は、短歌であった。

帯広の短歌雑誌『辛夷』に初めて浅井の名が登場するのは、一九六一年一月号の「新会員紹介」である。それによると、彼女は同誌の代表を務める野原水嶺の紹介で辛夷社へ入会したようだ。『辛夷』は、一九二九年八月から帯広神社で開かれていた「潮音」「新壟」帯広歌会を創刊の母体とし、二〇一六年現在も発行を継続している北海道を代表する短歌雑誌である。⁽¹⁹⁾短歌雑誌とは言っても比較的自由度が高く、浅井は短歌のみならず詩や随筆も盛んに寄稿していた。

「私の望む短歌」(『辛夷』一九六二年六月)と題する随筆で、「歌は作者の呼吸である」とし、「作者が何かを追求しようとする時の心の律動が、歌になった様な歌こそぞましいものである」と語った浅井は、自身の奥底から湧き上がる感情を率直に詠み、過去から現在まであらゆる自己の生を題材とした。その中には「子の父帰らず」(六一年四月)のように、吹雪の中を息子と二人で過ごし、夫の帰らない寂しさを詠んだ歌や、「悲しき月」(同年九月)のように、月夜の情景とともに札幌の刑務所に通った日々の孤独を詠んだ歌など、戦時中の暗い時代を題材としたものもある。

浅井の詠んだ短歌のうち、同人によって評価された首をいくつか挙げてみよう。

わが焦点少しづゝずれていつしかに傍観と云う淋しさに

在り 「妻の眼」(一九六一年十二月)

骨もくだけひしと抱き合う抱擁の中に永遠と云うものは
なきか 「カチユシヤ」(一九六二年三月)

その夫が解剖されてあらむ時痴呆の妻が魚をむしるよ

「悲しきひと」(一九六三年四月)

ベトナムの若き母らよわれも又かく子を抱きて恐れしこ
とあり 「私の秋とベトナムの間」(一九六三年十一月)

部屋の中光るばかりに掃除しぬ窓に射しこむ陽にはげま
され 「雀」(一九六八年四月)

特に一番目の歌は、「自分を中心にして物事を解しえた若い
時代、それが妻となり母となると家事に追われ又自分よりも夫
や子供中心の毎日が過ごされるように、そうしなければならな
い立場となつてゆく、作者はそれを淋しいとも、これで良いの
だとも思い自分に云い聞かせている」という同人評の言葉どお
り、「女」「妻」「母」の主体の揺らぎを定型律の中で巧みに表
現していると言えよう。浅井は短歌でも「女」の在り方を表現
し続けていた。

最後に、確認できた範囲で最後に掲載された短歌「老女彷徨」
(一九六八年十二月)の中から、三首を引用して本稿の結びとし
たい。

老人ホームに行くときめたる初雪のその朝 ひととは眠り

眠りで

電気製品光り冷たく褥しめけるアパートに老人の座なき
は当然

「さようなら」と云う必要もなき如く眠り眠りてそのまゝ
に逝く

最後の短歌は、老人ホームに向かう老女の悲哀と、その先に
待つ死の姿を予感して詠まれた。

注

- (1) 東野ひろ子「浅井花子」(北海道文学館編『北海道文学大事典』
北海道新聞社、一九八五年十月、一六頁)
- (2) 渡部徹監修・石田良三郎著『京都地方労働者教育運動史』(京都
勤労者学園、一九七九年三月、一一・一二頁)
- (3) 間宮茂輔「作家同盟の周辺にいて」プロレタリア文学運動の
回想』『文化評論』一九六九年十二月)
- (4) レポーターとは、組合活動に関わる極秘文書を成員から成員へ
伝達する係りで、主に婦人労働者がその役割を担われた。
- (5) 川端康成「選評」『文藝春秋』一九三五年九月、のち『芥川賞
全集第一巻』(文藝春秋社、一九八二年二月)に収録。引用は後
者の三三六頁による。
- (6) 浅井花子筆(和田崇翻刻・注)「徳永直宛書簡」『徳永直の会会
報』六六号、二〇一五年七月)
- (7) 栗木安延「蔵前光家」『近代日本社会運動史人物大事典2』日

外アソシエーツ、一九九七年一月、四五二頁)

(8) 同右。

(9) 倉田稔「小村多喜二の東京時代」『商学討究』五二巻二・三号、二〇〇一年十二月)

(10) 一九四二年、戦時中の新聞統制によって、小樽新聞社や北海タイムス社など北海道内の日刊新聞十一社が統合され、北海道新聞社となった。終戦後、『北海道新聞』はそのまま残ったが、『小樽新聞』や『夕刊北海タイムス』(大手の北海道新聞が朝刊であったためか当初は夕刊に限定)など、統合前の新聞各社も復刊した。そのような状況の中で、新北海新聞社が新たに誕生するも、やがて北海タイムスと合併し、この統合を嫌った編集関係者が小樽でタブロイド版の新聞を発行したのが『みなと新聞』であった。なお、一九四九年当時に小樽に支社のあった新聞社は、『みなと小樽(開港五〇周年記念)』(みなと新聞社、一九四九年七月)に、社屋の写真と住所が掲載されている。

(11) これに木原直彦『北海道文学史 戦後編』(北海道新聞社、一九八二年四月)の記述を補足すると、『浮標』の創刊時の編集人は市江弥門、発行人は国松登で、一九五二年の春頃から「戸田正彦、光野英親、原田浩らの新聞記者グループ、「新浪漫」に拠っていた市江、潮陵高校教師の湊誠、小樽商大同人誌「サイフォン」の同人らが協議を重ね、会員百二十人、賛助会員三十人という大きな組織となって九月一日に中央ホテルで花々しく発会式が開かれた。また、『浮標』より半年遅い五三年四月に創刊した『竹やぶ』は、「佐々木宣太郎らの創作が載った「小樽文学」の流れ

をひく民主主義文学系の孔版サークル誌で、因藤莊助、佐藤冬児、木皿稔、高崎徹らが主なメンバーであった」(二〇〇頁)。

(12) 高見順「文芸時評 同志愛結婚の末路」『東京新聞』一九五四年八月三十一日夕刊)

(13) 高見順・八木義徳・佐多稲子「第八十九回創作合評(一九五四・六)」「群像」一九五四年十月)

(14) 花田清輝「文芸時評 シラミつぶしに」『新日本文学』一九五四年十月)

(15) 斉藤克己「僕の太陽」『竹やぶ』十四号、一九五四年十月)

(16) 小松伸六「同人雑誌評 土着性こそ地方誌の特権―風土的な特異性をもつ北海道誌―」『日本読書新聞』一九五七年二月四日)

(17) 東野ひろ子「くま」『北海道文学大事典』(前掲)によると、『くま』は全二冊発行され、一九五九年に発行された第二号には「風見の鶏」続編が掲載されたと記されている(四四八頁)が、確認できていない。

(18) 八木義徳「道内同人誌評 力と情熱の所産「風見の鶏」／「産卵制限」」「面白い」小説に不満」『北海タイムス』一九五九年二月八日、荒正人「第二回道内同人雑誌秀作評 題材に鋭い特色」『北海道新聞』一九五九年七月十四日、無署名「本道の文学」『一九六〇年版 北海道年鑑』(北海道新聞社、一九五九年十月、三二二頁)。なお、荒正人が担当した「道内同人雑誌評」は、「第一回道内同人雑誌推薦作評」として一九五八年十二月三十日付で発表され、和田謹吾と八重樫実、北海道新聞学芸部の三者によって選ばれ、第二回からは上・下半期の二回に分け、和田と学芸部

とで選んだ。(木原直彦『北海道文学史 戦後編』前掲、一四七頁)

(19) 渡辺洪「辛夷」『北海道文学大事典』前掲

(20) 横尾幹男「十二月号感銘歌」『辛夷』一九六二年二月

浅井花子著作目録

和田 崇

- ・調査で判明した浅井花子の全著作を年次順に掲げる。
- ・浅井花子の作品を収録した翻訳書については、本のタイトルと出版社名を先に表示し、改行して翻訳者名と収録内容を示す。
- ・新聞・雑誌掲載分の「見だし・特集名」は（へ）で括弧表示する。ただし、省略した場合がある。
- ・「浅井花子」以外の筆名を用いて発表した著作については、（＊）で括弧表示する。また、掲載内容の種別についても、判明する範囲で（＊）で括弧表示す。
- ・情報を得ているが未確認の著作については「†」を付し、不明な発行日や巻号などを「＊」で示す。

一九二四年・大正13年

1・＊ くじやく草†

日活画報

一九三五年・昭和10年

一九三〇年・昭和5年

2・1 迫害されつゝある×員の妻より（婦人欄）

戦旗 3巻2号

10・1 神楽坂を上る（＊詩）
 ＊・＊ （タイトル不明）†

婦人文芸 2巻8号
 婦人文芸 2巻10号
 詩想 創刊号

4・1 ビスケツト（＊詩） 婦人文芸 2巻4号

5・1 ある夫婦（＊小説） 文学評論 2巻6号

6・1 泥濘の春（＊小説） 婦人文芸 2巻6号

8・1 本誌一周年記念 講演と映画の夕 傍聴記

婦人文芸 2巻8号

一九三六年・昭和11年

一九四〇年・昭和15年

3・1 ニーナの花（＊詩） 婦人文芸 3巻3号

3・1 三月を待つ（働く婦人のレポ）（＊小説） 文学案内 2巻3号

5・1 地下道の春（＊小説） 文学評論 3巻5号

6・1 地下道の春（二）（＊小説） 文学評論 3巻6号

6・1 『働く婦人』の感想（誌友のたより） 婦人文芸 3巻6号

6・1 限りなき道（＊小説） 婦人文芸 3巻6号

8・1 ゴリキイから学ぶ（ゴリキイの死に対して日本の勤労作家から贈る言葉） 文学評論 3巻8号

8・1 千人針（＊小説） 労働雑誌 2巻8号

2・1 江東橋の「夜の宿」にて（モダン東京風俗往来）（＊ルポ） 婦人文芸 4巻2号

4・1 初冬（＊小説） 婦人文芸 4巻4号

4・1 古きもの（＊小説） 文学界 4巻4号

6・1 作家訪問 浅井花子氏（＊写真・詩） 婦人文芸 4巻6号

出版月日未記載 『夜鶯文芸訳叢 千人針』 未名出版社（中国）

羅玉波編訳／浅井花子「千人針」、小林多喜二「追蹤着太陽の人們」『小林多喜二書簡集』の抜粋）、有島生馬「飼

鴿姑娘（鳩飼ふ娘）」、須井一「合唱（幼き合唱）」、佐々木

一夫「没落後」、永井荷風「牧場道上（牧場の道）」

一九四七年・昭和22年

1・1 婦人団体代表者を囲む座談会（1）（出席者…

蔵前はな、井口多美子、近藤静江、末岡睦子、小野春

江、横見ミヨ、村山千代、山本ミヨ、豊田千代、太田

糸、本社側…西谷社長、土門編集長、岡部婦人部長ほ

か） 小樽新聞 30号

1・＊ 婦人団体代表者を囲む座談会（2）† 小樽新聞 3*号

1・21 婦人団体代表者を囲む座談会（3） 小樽新聞 34号

1・24 婦人団体代表者を囲む座談会（4） 小樽新聞 36号

3・1 二月の言葉（＊随筆） 小樽新聞 53号

4・1 現実のぬかるみから（文化随筆） 小樽新聞 78号

4・3 女性も飛入り演説 人気を呼んだ小樽街頭討論会†

一九四九年・昭和24年

2・2 二月の随想（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 19号

3・6 女の一生を見て（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 51号

3・19 作品の二つの面について（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 64号

3・31 四月の希望（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 75号

4・10 鯨によせて（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 85号

4・19 アメリカのさくら日本のさくら（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 93号

5・1 みどりの芽に（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 105号

5・18 メーテルリンク青い鳥の思ひ出（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 121号

6・24 小樽図書館によせて（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 156号

7・9 月見草によせて（文化）（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 171号

7・13 朝の火事（＊随筆）† 小樽新聞 ＊号

8・19 啄木の歌碑建立をきいて（文化）（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 210号

9・1 市民の声集録（第一回）郷土市議会に望むもの（は

9・11 椿姫（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 233号

9・28 小樽の町に（＊蔵前花、随筆） みなと新聞 249号

10・8 子供の転校によせて（＊随想） みなと新聞 259号

10・16 人形に…（＊批評） 夕刊北海タイムス 1158号

一九五〇年・昭和25年

1・8 新しい心（＊随筆） 夕刊北海タイムス 1241号

1・22 壺井栄と林芙美子（＊批評） 夕刊北海タイムス 1255号

1・30 白雪先生と子供たち（＊随筆）† 掲載紙不明

3・31 シャートルのさくら（＊随筆）† 小樽新聞 ＊号

一九五一年・昭和26年

1・20 お正月の香り（＊随筆）† 読売新聞 ＊号

3・20 サテ、市会議員は!!† 小樽新聞 ＊号

4・14 春はニシンから北海道の春Ⅱ（文化と娯楽）（＊蔵前花名義、随筆） 婦人タイムズ 120号

6・21 アカシヤによせて（＊随筆）† 小樽新聞 ＊号

7・13 忘れ勿草（＊随筆）† 小樽新聞 ＊号

9・9 桔梗に寄せて（＊随筆）† 小樽新聞 ＊号

一九五二年・昭和27年

一九五五年・昭和30年

3・10	雪に寄せて（＊随筆）†	日本婦人新聞	＊号	2・1	握手（＊蔵前はな、詩）	竹やぶ	16号
9・15	詩（＊蔵前ハナ、詩）	浮標	創刊号	2・12	集り過ぎる原稿（小樽） 勤労者の文化誌（地方文化を語る座談会）（＊出席者…井上光晴、加藤忠夫、浅井花子、司会・国分一太郎）	図書新聞	283号
11・15	女見川市場（＊蔵前花、小説）	浮標	3号	3・6	半時間後（＊蔵前はな、詩）	竹やぶ	17号
12	28年度選抜方法を批判する	4父兄の立場から（特集・高校進学の問題をめぐって）（＊蔵前花、批評）		4・24	青春への言葉（＊蔵前花、随筆）	竹やぶ	18号
		北海教育評論	5巻12号	4・24	若い歌声（＊蔵前はな、詩）	竹やぶ	18号
				5・1	松田解子さんに（＊蔵前ハナ、詩）	竹やぶ詩集	1号
				5・1	歌わないで下さい（＊蔵前ハナ、詩）	竹やぶ詩集	1号
				7・1	詩集八千万のミイラに寄せて（＊蔵前花、批評）	竹やぶ	19号

一九五三年・昭和28年

2・15	私の朝（冬の随想）（＊蔵前花）	浮標	4号	8・25	六月の心（＊蔵前花、随筆）	浮標	5号
------	-----------------	----	----	------	---------------	----	----

一九五四年・昭和29年

8・25	子供の署名（＊蔵前花、随想）	竹やぶ	20号
8・25	伸びゆくものに―竹やぶ十九号の感想―（＊蔵前花）	竹やぶ	20号

1・25	上野広小路（＊蔵前花名義、随筆）	浮標	6号
1・25	愛（＊蔵前花、詩）	浮標	6号
1・25	死（＊銭屋弘子、小説）	浮標	6号
8・15	水爆反対（＊蔵前はな、詩）	竹やぶ	13号
9・1	死（＊小説）	新日本文学	9巻9号
10・1	小熊秀雄さん（＊蔵前はな、随筆）	竹やぶ	14号

一九五六年・昭和31年

12・25	髪（＊蔵前はな、詩）	竹やぶ	20号
12・25	ピストル（短篇特集）（＊小説）	竹やぶ	22号

12・1 巻頭言「0」に〈雁信〉（*詩）

辛夷 12巻12号（通巻134号）

3・1 椿（*短歌五首）

辛夷 14巻3号（通巻149号）

4・1 裁く人（*短歌八首）

辛夷 14巻4号（通巻150号）

4・1 雪の中の青空（*随筆）

辛夷 14巻4号（通巻150号）

4・1 悲しきひと（*蔵前花子、短歌十首）

辛夷 14巻4号（通巻150号）

一九六二年・昭和37年

2・1 『好きと云うこと』 Ⅱ辛夷によせてⅡ（*随筆）

辛夷 13巻2号（通巻136号）

8・1 朝見哲路氏への逆説（*批評）

辛夷 14巻8号（通巻154号）

3・1 カチユシヤ（*短歌十首）

辛夷 13巻3号（通巻137号）

8・1 放たれし子ら（*短歌二十首）

辛夷 14巻8号（通巻154号）

6・1 私の望む短歌（*随筆）

辛夷 13巻6号（通巻140号）

8・1 ゼロの感想（*随筆）

辛夷 14巻8号（通巻154号）

7・1 木々みどりなれども（*短歌九首）

辛夷 13巻7号（通巻141号）

11・1 私の秋とベトナムの間（*短歌八首）

辛夷 14巻11号（通巻157号）

7・1 母の歌研究（五月号から）（*批評）

辛夷 13巻7号（通巻141号）

辛夷 14巻11号（通巻157号）

10・1 『伯楽先生に』（*随筆）

辛夷 13巻10号（通巻144号）

一九六四年・昭和39年

11・1 去りし後（*短歌十首）

辛夷 13巻11号（通巻145号）

1・1 童話の刻（*短歌七首）

辛夷 15巻1号（通巻159号）

11・1 訪問者（*随筆）

辛夷 13巻11号（通巻145号）

3・1 痴呆の妻（*短歌八首）

辛夷 15巻3号（通巻161号）

一九六三年・昭和38年

1・1 一九三六年の回顧と展望（*批評）

辛夷 14巻1号（通巻147号）

6・1 冷酷な雨（*短歌七首）

辛夷 15巻6号（通巻164号）

2・1 求める（*詩）

辛夷 14巻2号（通巻148号）

5・1 刺のある雨（*短歌八首）

辛夷 15巻5号（通巻163号）

2・1 白い花（*詩）

辛夷 14巻2号（通巻148号）

一九六五年・昭和40年

3・1 表情なき子（＊短歌七首） 辛夷 16卷3号（通卷173号）
 3・1 風見の鶏（＊小説） 小樽文学 3号

一九六七年・昭和42年

6・1 母逝きぬ（＊短歌九首） 辛夷 18卷6号（通卷200号）
 8・1 裸体（＊短歌八首） 辛夷 18卷8号（通卷202号）

一九六八年・昭和43年

1・1 火の季節（＊短歌八首） 辛夷 19卷1号（通卷207号）
 2・1 初冬（＊短歌七首） 辛夷 19卷2号（通卷208号）
 2・1 暗い時刻（＊蔵前花子、短歌七首） 辛夷 19卷2号（通卷208号）
 4・1 雀（＊短歌八首） 辛夷 19卷4号（通卷210号）
 12・1 老女彷徨（＊短歌七首） 辛夷 19卷12号（通卷218号）

武田泰淳『富士』論

——精神医療に対する作家の発言を手がかりに——

藤原崇雅

一 はじめに

武田泰淳『富士』は、『海』に一九六九年一〇月から一九七一年六月にかけて連載され、一九七一年一月に中央公論社より初めて刊行された。翌年一〇月には、同社から特製愛蔵版が部数限定で発売されるなど、泰淳晩年の代表作として知られる作品である。本作は精神病院が舞台となったせい、実際に精神医療に携わる人々から批判を受けた。たとえば斎藤茂太「解説」『富士』中央公論社、一九七三・八）は、一九四四年頃にはすでに「インシュリン療法や電気療法」があつたにも関わらず、主人公が「治療を患者に施そうとしない」と述べる。医師でもある斎藤は、精神病院の実際と『富士』の作品世界の乖離を指摘している。^①

しかし、その精神病院の状況は、意図的に描かれたもの

と考えられる。「『富士』を書き終えて」『読売新聞』朝刊、一九七一・八・七^②で泰淳は、「ヤスパースの論文の話が出てくるということになると、八百屋お七の場合でいうと、いつでも吉祥寺に行けたら火を付けないでもすむわけでしょう」、「フロイトなどは原因さえつかめれば、すべての精神病は直せるという立場ですが、僕はどうもねえ」と述べ、^③「ヒューマニズムということは、うまくいかないことでも、うまくいくという希望を捨てないことでしょう。（中略）精神病学者がその考えを捨てたら何もできなくなるんだから。僕はこの小説でも院長の矛盾をつねに守る立場で書いている」と作品の企図を説明する。泰淳は治療がうまくいかないにも関わらず患者に相対せねばならない医師を描くことを目的としていた。本作では、精神科医の主体のありようという、抽象的な主題の追求が目指されたと

考えられるだろう。

『富士』が連載された一九七〇年前後は、日本精神神経学会内での論争⁽⁴⁾や、東京大学精神科病棟の自主管理⁽⁵⁾など、精神病院や精神科医のあり方をめぐって、多様な議論が展開された時期である。先行論においても、同時代言説と本作との関連性是指摘されてきた。たとえば、佐藤泉「曖昧な肉」『現代思想』二〇二・一〇⁽⁶⁾は、精神医療の改革に関する議論と、精神病院を批判する登場人物の意見との共通性を析出している。ただ、佐藤論には問題点も指摘できる。それは「精神医療改革、反精神医学の言葉は武田固有のこの「非・人間の曖昧さ」という」主題についてすぐれた触媒となった⁽⁷⁾とあるように、精神科医への批判を作品の主題として捉えている点である。先に確認したように、泰淳は本作を、精神科医を擁護する立場から描いていた。作中における精神科医への批判は、医療を改革していく可能性として提示されているというより、批判を受けた医師の立場の困難さを描くために設けられた設定と考えられる。泰淳の企図を十分に詳らかにした上で、作品を読み直すことも重要ではないだろうか⁽⁷⁾。

以上の見解に基づき本稿では、精神医療に対する作家の発言を起点として作品を再考することで、泰淳が描こうとした精神科医の主体のありようを明らかにしたい。具体的には、次のような論述を行う。まず、対談での発言を整理し、精神医療に対する作家の意見を確認する。次に、作品に取り込まれる「精神

病理学」⁽⁸⁾の知見を確認しつつ、本作において精神病院への批判者と医師の立場が対立していることを詳らかにする。その上で「予感」と「戦慄」、「神の指」と「神の餌」などの鍵語に着目し、本作の主題を明らかにしたい。また、作中に戦時下と戦後、二つの時間が設定されることの意味も考察する。

二 精神医療に対する泰淳の意見

『富士』は二〇章⁽⁹⁾からなり、一九六八年から一九六九年にかけて、大島（私）が富士山の近くにある山荘で、実習医をしていた桃園病院での顛末を手記として綴る小説である。戦時下の病院においては「嘘言症」の一条、「黙狂」の岡村、「てんかん」の大木戸、「色情狂」の庭京子、「麻痺性痴呆」の間宮などの患者が登場する。宿直を襲い、院長宅へ放火する患者に医師たちは翻弄されてしまい、最終的には病院全体が「集団発狂」してしまうのである。本作は「精神病者」や「精神分析学」をよく小説の題材としていた泰淳が、精神病院を物語の舞台として設定して世に問うた作品であった。

『富士』の連載が反響を呼んだこともあり、一九七〇年頃から泰淳は、精神科医や精神医学者との対談・座談会に出席している。たとえば「異常と正常のあいだで」『中央公論』一九七〇・七）では、作家兼精神科医の加賀乙彦・なだいなだ、桜ヶ丘保養院院長の野口晋二、精神医学者の宮本忠雄と、「文学と

狂気」『文学界』一九七二・四）では、作家兼精神科医の北杜夫と対談している。また、真継伸彦との対談「生きることの地獄と極楽」『中央公論』一九七四・一）でも、泰淳は精神医療に対して発言している。

本節の結論を先に述べておくなら、泰淳は精神科医の立場を困難なものとして捉えた上で、同情を示していたと考えられる。たとえば「異常と正常のあいだで」で加賀が、前に勤めていた「精神病院が火事になって十何人かの患者さんが焼け死んだ」際、「新聞記者がいつばい来て」「精神病患者をこんな格子のなかに閉じ込めておくから焼け死んだのだと」「書きたてた」と述べている。加賀の経歴を踏まえると、彼が勤めていた病院は千葉県市川市の式場病院と推定できる。¹²「市川の式場精神病院焼く」『朝日新聞』朝刊、一九五五・六・一八）によれば、式場病院は一九五五年六月一日の午前一時頃に出火、死者を多く出す惨事が発生した。記事では「監禁病舎は最も凶暴性の患者を収容していたため窓は厳重な鉄格子になっており、カギがかかっていた」、「火の回りが早かったため監禁病舎のカギを全部は開けることができず死者が多く出た」と、病院の不手際が非難される。新聞記者が取材に訪れ、病院の責任を問う記事が書かれたことに、加賀は憤っているのだろう。

この加賀の発言に対し泰淳は、「ずっと関係している人と、ときどきちょこつと関係したがる人との違い」がある、「専門でない人がやる場合には、ちょこちょこそのときだけ、問題

性を拡大」するため「ジャーナリズム」などの「暴露もの」で批判を行うのは「やさしい」が、「実際にやっておられるかたは受難者」であり、「受難者と、受難者を嘲笑うものとは違う」と述べている。『富士』を書き終えて「で泰淳は、精神科医を治療がうまくいかないにも関わらず治療を続ける必要がある（うまくいかないことでも、うまくいくという希望を捨てない）存在と捉えていた。「受難者」という言葉がそのような存在のことを指しているならば、その「受難者を嘲笑う」新聞記者とは、治療が失敗した時だけ騒ぎ立て、医師の責任を追及する存在であると理解できよう。泰淳は、精神科医の困難な立場に同情を示した上で、加賀を擁護しているのである。なお、泰淳は対談において「受難者」という言葉で表した主体のありようを、本作における医師の形象を通じて具体化していると考えられるが、そのことについては本稿第三節で詳述したい。

また、先の発言において「暴露もの」という言葉が見られるが、泰淳は他の対談においても、精神病院の不祥事を暴く動向に言及し、これを批判している。

武田（中略）預かった以上は監視してすね、いろいろやる人がいなくちゃ困るわけです。自由に往来させるというふうな開放病棟がありますけどね。しかし、そのみに頼るのは、また、無責任でしょう。そうするとどうしたって縛るといふか……。

北 個室に監禁する……。

武田 それは必要なんですね。その必要があるんだからね。いま、よく精神病院の暴露物がありますね。あれはぼくは非常に一方的な考えだと思うんですよ。

武田泰淳、北杜夫「文学と狂気」『文学界』一九七二(四)

武田 (中略) 精神病院の暗さとか、儲け仕事とか、患者の監禁状態の暴露ものが以前ありましたね。それはわざわざ患者になって入院状況を暴露するということですね。それを暴露するだけではとても解決できないわけですね。つまり脳が脳を裁くことができるかという問題になる。脳を切り刻んでいくら調べても、脳そのもの、あるいは集団発狂の現象は分からない。(中略) しかし気をつけなければならぬのは、これは集団発狂の現象であると決める判断では、患者以外できるかという、それはそうじゃないでしょう。だから、みんな患者なのに、しかしみんな患者だといって甘ったれて、なしくずしに全人類、全患者論にしてしまったわけですね、申し訳が立たないから。そこがほんとに全人類に対してやさしくするなんていうことはできっこないわけけれども、しかし少なくとも神経科の医者はやさしくしなければならぬわけですね。

武田泰淳、真継伸彦「生きること、地獄と極楽」

『中央公論』一九七四・一

「わざわざ患者になって入院状況を暴露する」という発言を踏まえると、泰淳が言及しているのは、一九七〇年三月五日から一二日にかけて『朝日新聞』夕刊紙上に連載された「ルポ精神病棟」であることが分かる。連載第一回(一九七〇・三・五)で「一分足らずの診断で、ニセ患者は、入院を必要とする重症患者に変わった」と述べられているように、このルポは記者・大熊一夫が患者を装って入院し、病院で起きている不祥事を暴露したものだ。連載第二回(一九七〇・三・六)では電気ショック治療の暴力性が、連載第五回(一九七〇・三・一〇)では鎖による患者の監禁が、痛烈に非難されるのである。

もちろん、ジャーナリズムは社会の不正を暴くものである以上、報じる対象への暴力性を常に有している。「ルポ 精神病棟」も、そのような暴力性は免れない。しかしながら、このルポは一九六四年三月に起きたライシャワー駐日大使が精神科治療歴のある青年に刺傷される事件に端を発して、精神医療が社会的に問題化されつつあった時期に発表されたことで、必要以上の反響を呼んだとも捉えられる。ルポは、通常の報道記事にも増して、医師たちの立場を強く抑圧してしまったのである。

ただ、同時代において、医師たちはメディアから一方的に批判されていたわけではない。ルポ掲載の少し前、日本精神神経学会の理事会は、「精神病院に多発する不祥事件に関連し全会員に訴える」(『精神神経学雑誌』一九七〇・一)を発表している。

この声明では、一九六九年の八月頃から全国の精神病院で、患者虐待などの不祥事が多発していることがまず紹介される。その上で、理事会は「患者の人間性を無視し、障害者を世の偏見と同じく単に異常者として扱おうとする考え」が「精神医療に対する恐ろしい感覚麻痺を招」いたとし、「精神科医とは何か」という問いに真剣に答「えていくことの必要性を訴える。理事会は不祥事を、精神科医が自らの立場を問い直す機会として捉えていたのである。

以上のように、一九七〇年頃においては、精神病院の不祥事をめぐって、ジャーナリズムと医師たちの立場が対立していた。そして対談での発言を鑑みるなら、ふたつの立場のうち泰淳は、精神科医の側に寄り添っていたことが分かる。特に「ほんとに全人類に対してやさしくするなんていうことはできっこないわけだけれども、しかし少なくとも神経科の医者はやさしくしなければならぬ」という言葉からは、精神科医が実は患者と同等の存在であるにも関わらず、そのことを自覚しつつ治療に当たらねばならないことへの理解が窺える。泰淳は精神科医の困難な立場性を察した上で新聞による精神病院への批判に難色を示していたのである。それでは以下、この作家の立場を踏まえ、作品分析を試みたい。

三 精神科医と精神病院批判者との対立

戦時下の大島は「K 大学医学部」の学生であり、同級生が「すでに出征して、各戦線であかっている」にも関わらず「右眼が視力を失って」「ため兵役にとられないで済んだ。彼は「戦争と狂気」（初出本文より引用、一章。以下章数のみを記す）という論文の作成を目指す、熱心な実習生であった。大島は理想的な医師を目指して、さまざまな「精神病理学」の知見を学び取る。たとえば「カール・ヤスパースの学位論文「懐郷と犯罪」（六章）は、その代表的なものだ。⁽¹⁵⁾ 古株の「看護婦」が「ドイツ語の本ばかり読んでいてさ」（八章）と揶揄しているため、大島が手にしたのは *Karl Jaspers, Heimweh und Verbrechen*. (Verlag Von F. O. W. Vogel, 1909) のような原著であると推定できる。大島は宿直の際この論文を読み、見識を深めるのである。戦時下の院長である甘野と会食した際、大島は「懐郷と犯罪」に記されていた、少女の症例を披露している。

「そら、川岸に来たわ。橋を渡った方がいいわ。投げこみやすい所は、どこかしら。傾斜の急なところの方が、投げやすいんだがなあ。ああ、ここがいい。ほら、投げちゃったわ。もう、誰にもわかりやしない。（中略）あの赤ん坊は、きつと睡ったまま死んじゃうのね。さあ、もどりましょう十五分たった。御主人が起きてきます。騒ぎ出したわ。うちの子供が誘かいされた、と叫んでいるのよ」（七章）

この箇所は、赤ん坊を溺死させた一四歳の少女、アポロニア・Sについて述べられた部分である。藤森英之による邦訳（ヤスパース『精神病理学研究 Ⅰ』みすず書房、一九六九・一）でもこの箇所は「彼女はすぐにその子供を連れて、川ばたまで走り、橋を渡り、他の岸の少し傾斜の急なところへたどり着き、そこで子供を水中に投げ捨てた。彼女はそれ以上振り返って見ないで、同じ道を急いで家に帰り、着物を脱ぎ、ベッドに横になった」と書かれている。ヤスパースが参照する症例を、大島はほぼそのまま甘野院長に説明している。¹⁶

大島が「懐郷と犯罪」を読むのは、以前に甘野の家で起きた、当時四歳であつた長男溺死の原因を探るためであつた。大島は、溺死事件の犯人として、甘野宅で子守をしている少女・中里きんを疑っている。きんは「白痴じゃないかと疑われるほど、無表情」かつ「陰気で、ひがんで」おり、親類からも「ありやバカか気持ちがいでしょ」（六章）と言われる人物だ。大島はアポロニアの症例を根拠に、きんが事件を起したと仮定する。そして「彼女をお嬢さんの子守りにしておくのは、よくない」（七章）と甘野に迫るのである。

しかし、大島の認識は誤つてしまう。脱走した患者が甘野宅に侵入した際、きんは勇敢にも犯人に抵抗を試みるからだ。あるとき、伝書鳩をこよなく愛する「麻痺性痴呆」患者・間宮は、自分の飼鳩を甘野が殺害したと思ひ込み、院長宅を襲撃する。間宮は炊事場に置かれてあつた手斧で、甘野の妻や娘に襲いか

かる。そのとき、きんは突然、間宮へ「何も叫ばずにおどりかか」る。きんは侵入者によつて斧で傷つけられながらも、院長一家を身を挺して守ろうとするのだ。この挺身を受け、大島は「私はかつて、中里さんの懐郷病犯罪者としての危険性を、カール・ヤスパース博士の論文を引き合いに出して、先生に言つてきかせ、甘野家から彼女を遠ざけるように忠告したのだった。その彼女が、先生の家族を守るために、かくも誠実に、かくも勇敢に行動したとは」（二四章）と、自省を余儀なくされる。ヤスパースの理論は、大島の認識を誤らせてしまうのだ。

大島の誤認に示されるように、本作における精神科医は患者をうまく扱えない。そのため、病院の存在をよく思わない人々から批判されてしまう。批判を行う者としては美貌青年・一条実見が挙げられる。彼は自らを「宮様」と主張する「嘘言症」患者だ。一条はもともと大島の同級生であり、精神科医を志していた。しかし、入院してから彼は精神病院を批判するようになる。それは、大島との会話の中で示される。一条はまず、甘野が「秩序の蜘蛛の巣のまんなかに坐っている一匹の親蜘蛛」で、大島も「親蜘蛛のまねをして」といると皮肉る。大島が「患者があるかぎり、病院なしではすまされないじゃないか」と反論すると、一条は「ぼくらに言わせれば、病院があるかぎり、患者が存在しなくちゃならないんだよ」と、大島の主張を反転させてしまう。さらに一条は「君の大切にし頼りにする社会、世界」こそ「あきらかに狂気におち入っている」（三章）と述べ、

社会全体が病んでいるかのような物言いをする。一条は、社会全体の異常性を述べることで、病院によって構成される正常と異常という対立が恣意的であることを明るみに出しているのだ。精神病院が患者をつくり出すという一条の論理は、医師への痛烈な批判となっている。

ただ、医師らは批判に応えてもいる。一条に対して大島は反論を試みているし、また会食の際、大島の「患者にやさしくできける人は、生れながらの性格として、そうできるんでしょか」という質問に対し、甘野は「あらゆる場合にやさしくありつつけることなんぞ、同じ人間だもの、できるわけがないよ」と応えた後、次のような見解を示す。

「君はかならず、精神科医師であることを投げすてたくなる。彼らが患者であり、ぼくらが医師であるという、その区別の垣をぶちこわしてしまいたくなる。そして、全人類精神病患者論へ、のめりこみそうになる。だが、ぼくたちは、あくまで医師と患者の区別を、守りつつけねばならない。人間のこゝろ^{ココロ}精神病患者なんだという議論ぐらい、いやらしい、甘ったれた、ずうずうしい言いのがれはないからね」(七章)

大島に應える中で甘野は、医師と患者が「同じ人間」であることを認めた上で、そのような「区別」を無化してしまう意見

を「全人類精神病患者論」という言葉で対象化し、これを難じている。また、引用箇所ですぐ後では「全人類精神病患者論」の立場が、「安易で無責任な態度」(七章)と批判されている。甘野は「全人類精神病患者論」が、実際に起きている問題を何も解決しない、責任を放棄する意見に他ならないと考えているのだ。このように本作においては、精神病院批判に対する反論も示されているのである。

以上のように本作では、医師と精神病院への批判者とが対立的に描かれる。ただ、このうち精神病院に対する批判が、作品構造の中で肯定されているとは考え難い。なぜなら病院を監督する憲兵・火田の発言は、一条の発言を留保するものとして読めるからだ。あるとき病院から失踪した一条は、警官に変装し、本物の「宮様」に「日本精神病院改革案」を手渡す。改革案は「宮様」が持ち帰ってしまったため、その内容は分からない。そこで火田は、案の内容を大島に尋ねる。大島はこれまでの一条の言を踏まえ、「日本全体を一つの精神病院に見たてて、その改革案を書いているんじゃないでしょうか」と推測する。それを聞いた火田は「それで、われわれ日本人は総精神病患者とすることか」と述べた後、「それで、奴ひとり、そうでないと言わうわけか」(二五章)と述べるのである。

大島が推測した改革案の論理と、それに対する火田の発言の論理を整理しよう。まず改革案は「日本全体を一つの精神病院」に見立てていることから、日本人全員を精神病患者のよう

な存在と仮定している。一条は社会全体を異常なものとした上で、その改革の必要性を説いているのである。その論理に対して、火田は「奴ひとり、そうでない」可能性を指摘する。日本全体を病院に見立てる一条の論理は一見、異常でない人間の不在を述べ、医師と患者の対立をなし崩しにしているようだ。

ただ、その論理を述べるとき一条は、病院を改革する立場を取ってしまう。つまり一条は、医師と患者の対立を無化する批判を行いつつ、同時に病院を改革するというまさにそのことによって、改革者と被改革者という新たな二項対立を招来してしまっているのだ。患者を治療する主体と、病院を改革しようとする主体は、作り改める客体の水準こそ異なるが、行為の質においては似通ってしまう。火田の発言は、精神病院批判の陥穽を、はからずも明らかにしていると考えられるのだ。

本作において「精神病理学」の知見は、診断を誤らせるものとして取り入れられていた。そのため医師は患者を治療できず、一条から批判される。しかし本作では、批判に対する医師側からの反論も描かれ、火田の発言からは病院批判の論理の陥穽も窺える。つまり『富士』は、精神病院に対して否定的な意見と肯定的な意見とが、登場人物の多声的な関係性を通じて表現された小説であり、否定的な意見も他の登場人物の意見により相対化されるものとして提示されているのである。そして本作のクライマックスである「集団発狂」の箇所において、大島の心情が詳細に描かれることを踏まえると、本作においては批判を

受けつつも患者に相対していかなねばならない精神科医の主体のありようが問題化されていると考えられる。次節で考察したい。

四 精神科医の責任

五章の後半から六章にかけて、「麻痺性痴呆」患者の間宮は、自分の飼っていた鳩を迎えるため、「黙狂」の岡村とともに院内の煙突に登る。医師たちは慌てて助けようとするが、無視されてしまう。結局、偶然にも鳩が戻り事無きを得るが、医師が患者を救うことは叶わない。大島ら医師は、この場面においても患者をうまく取り扱えないのだ。ただ、大島は医師としての立場を放棄しているわけではない。それは、煙突を眺めつつ大島が「我々もみんなも、見上げることをやめるわけにはいかなかった」、「止めれば、責任を放棄すること、頭上の二人の患者を見棄てること」になり「彼らと無関係にな」ってしまう、「ほんとうのところ、もはや無関係になっているかも知れないのに、そう自覚して決めてしまうのは、どうしてもできない」（六章）という感慨を覚えていく箇所から窺える。

引用箇所で大島は、自らの診断の不能を認めた上で、なお患者から眼を離さないことで、医師と患者という関係性の保持を試みる。間宮は煙突に登った医師らを見無視し、周囲を気にしている様子はない。そのため、患者の側からすれば、周囲と自身とは「もはや無関係になっっているかもしれない」。しかし、そ

のように自覚したとき、医師は自らの立場に伴う「責任を放棄」したことになる。そうならないため、大島は患者らと自身が無関係ではないという僅かな可能性に賭け、精神科医としての自己の立場を守ろうとするのである。

このような精神科医のありようを考えると、高橋哲哉が「応答可能性」という言葉で整理した主体の責任をめぐる思考は、極めて示唆的である。⁽¹⁷⁾ 高橋は「あらゆる人間関係の基礎には人と人が共存し共生していくための最低限の信頼関係として、呼びかけを聞いたら応答するという一種の『約束』がある」と述べた上で「人間はそもそも（中略）他者の呼びかけに応答しうる存在であり」、「応答可能性としての責任の内にある存在である」と述べる。高橋は人間関係の基底に、他者の呼びかけに対し「応答」する責任のあることを理論化している。ただ、高橋は一方で「人間と動物、動物と動物のあいだではどうなっているのか」という問題が発生するとも述べている。⁽¹⁸⁾ 高橋は、他者に対する呼びかけと、その呼びかけに「応答」する際の約束が、機能しない次元が存在することを述べているのだ。

であるとするならば『富士』では、人間同士の関係性が失われた状況の中で、主体がいかに自らの責任を志向していくのかという課題が模索されている。本節冒頭で確認したように、医師・大島と患者・間宮および岡村の関係性は絶たれていた。ただ、治療をあきらめた場合、医師は自らの責任を放棄した主体となってしまう。そうならないためにも医師は、自身と患者が

無関係な存在ではない可能性に賭け、自身の立場を再び確保していかなければならない。高橋の術語を用いて言えば、精神科医とは「応答」しているかどうか不明の他者に対し呼びかけ続けることで、かろうじて自己の責任を負い得る存在なのである。

そのような精神科医の主体のありようは、「集団発狂」下の大島の形象からも窺える。一条は「宮様」への直訴がきっかけで、憲兵から拷問を受け亡くなってしまう。一条の死を受けて「宮様」からは、戦争末期にも関わらず豊富な食材が下賜される。食材に病院はお祭り騒ぎとなり、医師と患者の区別はつかなくなる。大島も例外ではない。「集団発狂」の渦中、大島は「患者であり得なかったことの不自由、屈辱、まわりくどさをすべて突破して、何かしらあからさまな自然そのものの光線の下で裸の手足をのさばらせることの歓喜」を覚え、「患者になりうる、患者になりつつあることの快感と恍惚を味わ」（二七章）うのだ。ただ、大島はその渦中で、自身が患者のような状態になりゆくことに甘んじているわけではない。なぜなら大島は、以前に見た「黙狂」の岡村と中里さんに耳から長虫を打ち込まれる夢を思い出すことで、⁽¹⁹⁾ 自身を取り巻く状況の認識を試みるからだ。

私の脳と神経の内部に、この病院内で死んでいった多数の患者の面影（と言うより、なまなましい生きざま死にざま）が充満し、虫と虫が咬みあうようにしてうごめき、私

を苦しがらせた。私の目と私の耳は、私の体内にひしめく死せる患者のムシ集団のほかに、私の外界でざわめいている私の生ける同僚の、咬みあい騒動、ムシ闘争を感じとっていた。蟲類^{ムシ}。私は想い出す。想い出さずにはいられない。あの不吉な夢を。(中略)だが、あれは夢ではなかったのだ。

(一八章)

この箇所においては、自らが患者になりゆく過程が、体内が虫に食い荒らされていくことに喩えられている。大島は夢の語彙を用いて、周囲の状況や患者になりゆく自分を、何とか認識しようと試みる。大島は「集団発狂」下において、自らが狂気に侵されゆく過程の自覚を試みることで、かろうじて正気を保とうとしているのだ。さらに次の箇所で大島は、そのような自覚を連続させることで、精神科医としての主体性の回復を試みる。

正気でもあり狂気でもある我々は、何かしらその渦とは反対の極に到達できるという予感を持ちつづけている。何回も、くりかえし、その予感は裏切られる。裏切られることを、また我々は予感している。(中略)この予感が、正気の生みだすものであるのか、狂気のはぐくむものであるか。その審判を下し得る責任者、当局者が、我々精神病患者であるかと問われるさいの戦慄。その戦慄のみが、我々

をわずかに支えてくれているのであるが、困惑すべき中でも最も困惑すべきことには、我々はこの「予感」なしでは、つまり「戦慄」なしでは、一步の前進もできかねるのである。

(一八章)

病院の人々は「集団発狂」に巻き込まれてしまったため、「正気でもあり狂気でもある」。「正気でもあり狂気でもある」状態を離れ、「反対の極に到達できる」ことを、大島は「予感」している。しかし、その「予感」は「裏切られる」。大島の自覚は、誤ってしまう可能性があるので。ただ、大島は自覚の誤る可能性に思い至っても、あきらめずに「予感」が「裏切られる」可能性を再度「予感」する。引用部において大島は、自覚が誤る可能性の自覚を試みている。しかし、自覚が誤る可能性の自覚は、その自覚自体が誤っている可能性にさらされている。大島の認識は永久に安定することがない。そのため大島は「精神病患者であるかと問われるさいの戦慄」を感じてしまう。しかしその「戦慄」を感じていることによって大島は、自らを他の患者たちから差異化し、精神科医としての資格の回復を試みる。「集団発狂」の場面において大島は、自らの認識が誤る可能性を排除できないものの、その認識の不安定さを自覚することによって「精神病患者」であろうし、その「責任者、当局者」であることをかろうじて放棄しない主体として描かれているのである。⁽²⁰⁾このような大島の態度は、精神科医という主体のありよ

うを、端的に表現していると考えられよう。精神科医とは、はじめから患者との区別を前提としてあるわけではなく、むしろその区別が不明瞭であることを起点として自らの置かれた状況を自覚し、責任を志向していくような主体なのである。

以上の精神科医の主体のありようは、はじめから現在時の大島によつて知悉されていたのではなく、手記創作の過程で、次第に把握されたものと考えられる。²¹⁾「神の餌」や「神の指」の語を引きつつ、そのことを説明しよう。誤読されやすいが、本作は戦時下の部分だけが手記形式を採るのではなく、序章と終章の部分も含めて全編が手記形式として提示されている。そのことは、手記の書き手が「過去形」の文章から、現在形、現在進行形の文章に移る」(傍点・藤原、一章)と宣言していることから窺えよう。そして、手記の最初と最後では、手記の書き手の考えに、ある変化が見て取れる。

序章において大島は、「エサ。ああ、こんなにも手ひどい言葉はいまだかつて私は私の文章のはざまに混入させたことはない」、「私は、エサを与える神になどなりたくはなかった」と書いている。これは、大島がエサを与える対象である動物と、自らの自己同一性とを全く別のものとして考えていることの証左となろう。実際、大島はリスに対して、「もし私が彼らを「見る」ことをやめにしたって、それで私の生命がおびやかされるということなど、ありはしない。「見てやらない」からと言つて、私は私でありつつけることができる」(序章)と述べている。

大島はリスにエサをよく与えている。ただ、大島は、たとえ自分が世話をやめ、リスが死んでしまつても、自分とは何の関わりもないという態度を取り、自身とリスとを基本的に無関係の者同士として捉えているのである。

しかしながら、序章の最後の辺りから、大島の態度はぶれ始める。それは「リスにエサを与える「神」になど、なりたくない」と、この私は言う。だが、それは口さきでそう言うだけであつて、当の本人の本心は、はたしてそうなのであろうか(序章)と大島が書いていることから明らかであろう。そして、戦時下の顛末が記された後、終章において大島は「神の餌」について思いまどい、たどりついた末が「神の指」であつたことを、私は私の信じていない「神」に向かつて感謝したいと思う」(終章一)と述べ、自らが動物に対して餌を与え、指を用いて患者の治療を行うという支配的立場に立たねばならないことを引き受ける。「私が医師と患者の関係について、思いなやむときにはきまつて、人間と動物の運命的なつながりに話しがいきついでしまふ」(終章二)とあるように、大島は動物と精神病患者を、同様の存在と捉え、それらの存在と接していかねばならない自身の立場について再考する手記を書いていると考えられよう。以上を踏まえると、「神の指」と「神の餌」は大島が、精神科医が神のような特権的な地位にないにも関わらず、そのような地位を引き受けねばならないことを自覚するために書き付ける言葉だと解せる。『富士』は、大島が手記執筆を通じて自

らの立場を引き受け、動物や患者に対して責任の自覚を芽生えさせていく小説として読むことも可能なのである。

五 おわりに

最後に、本作において戦時下と戦後の時間が設定されることの意味を考察したい。手記の書き手は戦時下の自己を通じて、「応答」しているのかどうか不明の他者に対して呼びかけ続けることで、責任を自己のうちに抱え込もうとする主体を形象化していた。ただ、そのような戦時下の自身について書く現在の

大島の立場も安定してはいない。そのことは、院長の座は継げなかったものの、精神病に関する研究所に所属している現在の大島の、「神の指となつて神の餌をあたえる任務をすてたことになるのだろうか。いや、いや。そんな自由は、死に至るまで私に与えられるはずはない」(終章二)という自戒から明らかである。

大島がこのように述べるのは、旧院長の娘であり現在は彼の妻であるマリが、精神病患者となつているからだと考えられる。²²そのことは、甘野に代わつて赴任した現在の院長が「奥さんが希望なさるのでしたら、いつでも入院はひきうけますよ」(終章二)と述べていることから窺える。戦時下においてマリは、患者による二度の放火や、間宮の中里きんに対する暴行など、衝撃的な出来事を目撃した。それらが原因で彼女は、精神病と

なつてしまったのだろう。そして現在の大島は、マリとともに生きることを選び取る。大島は、過去にマリを見舞った衝撃的な出来事を桃園病院の患者が起し、その出来事を医師として防ぐことができなかった責任感から、彼女と生きることを選択したのではなからうか。現在の大島は精神科医とも近似した「精神病理学」の研究者という立場につくことで、自身の責任を引き受けようとする人物なのである。

このように、本作では精神科医という主体のありようが、戦時下に限らず戦後も継続されるものとして表現されている。泰淳は通常の間人同士の関係性が失われた中で、責任を背負わねばならない精神科医の主体性を、戦時下という特殊な状況下だけでなく、戦後にまで継続される普遍的なものとして思考していた。そのことは、泰淳が本作の連載中に発表した書評「馬鹿について」『文学界』一九七〇・二〇)からも窺える。この書評は、精神医学者であるホルスト・ガイヤーのエッセイ『馬鹿について』(満田久敏ほか訳、創元社、一九五八・二二)について書かれたものだ。本書の第二部第五章「戦争と平和」の節において、ガイヤーは第二次世界大戦の敗戦国だけでなく、戦勝国側にも「馬鹿」が多きくいることを述べる。それを受け泰淳は、書評中で「戦争のあるなしにかかわらず、結局、人間にはバカの問題をつきつめて行かねばならぬ、個人的責任、共同任務、あるいは逃れがたい使命がある」と述べる。本作の作中時間は大半が二五年前に設定されているため、「応答」不能の他者と関係を結ばね

ばならない主体を描く時期として戦時下が適当であると、泰淳が考えていた可能性は高い。しかし泰淳は本作において戦後の時間に、精神病患者と向き合い続ける人物を登場させている。泰淳は他者に対する非特権性を自覚することで自らの地位を差異化し、責任を抱え込む主体を普遍的なものと捉えていたのだ。

『富士』が発表された一九七〇年前後は、精神病院を批判するメディアの立場と、批判を受けつつも患者に相対せねばならない精神科医の立場が対立していた。本作では、両立場が登場人物の意見として構造化されている。さらに「集団発狂」の場面においては、患者との同質性を自覚することで、かろうじて患者から自己の地位を差異化し、精神科医であることを引き受ける主体のあり方が表現されていた。そのような主体は時代を越えてつねに問題となる。そのことは、戦時下と戦後の時間が作品時間として設定されていることの意味の考察から析出した通りだ。先の論述を振り返れば、『朝日新聞』の言説を泰淳は何か問題が起きたときだけ一時的に暴露を行うものとして批判していた。本作では医師の困難な立場がある特定の時代に限った問題でないことが表現されている。泰淳は、精神科医の主体の普遍性を踏まえた上で、同時代言説を批判していたと捉えられよう。『富士』は、精神科医の立場の困難さが一時的なものではなく、終わりのない自己への問いとしてあることを表現した作品なのである。

注

(1) 加賀乙彦「溶岩のような力強さ」『中央公論』一九七二・二にも、同様の指摘がある。また、小池房「武田泰淳著『富士』を読んで」『看護学雑誌』一九七二・九も、医療従事者による同時代評として注目に値する。

(2) このインタビュは全集未収録であるものの、久山康「滅亡感について」『学生の読書』一九七二・四がその存在を指摘している。

(3) フロイトは一九一一年に発表した「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」（渡辺哲夫ほか訳『フロイト全集11』岩波書店、二〇〇九・一二）の中で、「パラノイア」の診断が「容易でなく確かでない」と断っているため、自注における泰淳の言は誇張されたものと考えられる。ただ、本作の中には「フロイトも断念していた分裂病の精神療法」（五章）のような記載もあるため、フロイトの知見の不完全性を、泰淳が理解していた可能性もある。インタビュは新聞記者によって再構成されているため、作家の言が極端に伝えられたとも考えられる。本稿では、「精神病理学」の知見を用いた治療が必ずうまくいくわけではないと作家が捉えていたことを証するため、該当部を引用した。

(4) 一九六九年五月に行われた日本精神神経学会金沢大会では、医師の認定制度をめぐって議論が戦わされた。この議論については阿部あかね「一九七〇年代日本における精神医療改革運動と反精神医学」『Core Ethics』1101・10・11に詳しい。

(5) 東大では一九六八年に精神科医師連合が結成され、翌年から病棟の自主管理が始まった。この経緯は鈴木二郎「日本精神神経学会と東大精神科」(同著編集委員会編『東京大学精神医学教室120年』新興医学出版社、二〇〇七・三)に詳しい。

(6) 佐藤論に関しては特に一六六頁から一六七頁を参照。また兵藤正之助『富士』をめぐって『武田泰淳論』冬樹社、一九七八・五、樋口寛『武田泰淳の『富士』(『富士曼荼羅』五柳書院、二〇〇〇・一)、高橋正雄『武田泰淳の『富士』(『日本医事新報』二〇〇五・一一・二六)も同時代状況に言及しているが、登場人物形象と比較がなされているため佐藤論を引用した。ちなみに、佐藤は「生・政治と文学」(『敍説Ⅲ』二〇一一・九)でも『富士』を論じている。

(7) 泰淳の発言に着目した論としては、高橋春雄『富士』武田泰淳(『国文学 解釈と鑑賞』一九八四・五)や、清水靖子『武田泰淳論』(福岡大学日本語日本文学』二〇〇〇・一二)がある。特に後者は対談「異常と正常のあいだで」(『中央公論』一九七〇・七)に言及している。ただ、清水は本作に天皇制批判を読み込む立場から対談を引用しているため、本稿と論点は異なっている。

(8) 井村恒郎「精神病理学における実存主義」(『精神医学研究 I』みすず書房、一九六七・九)は、「精神病理学」を「病態意識の心理学的な構成を明らかにすることを課題としている」「精神医学の一分科」と定義している。本稿が「精神病理学」と述べるとき、その意味は井村の定義に従い、また斯学を支える体系を特に「精神病理学」の知見」と表記した。

(9) 初出と初刊以降の刊本で章数に関わる異同はないが、初出では終章のみ分載された。本稿は初出を底本とするため、章数を記す際は『海』一九七一年五月号の掲載分を「終章一」、一九七一年六月号の掲載分を「終章二」と表記する。

(10) 八章には「山本元帥」が「敵の射撃で撃墜された」、「大戦争に突入して緊張しきっている昭和十九年」とある。山本五十六の戦死は一九四三年四月一日であるため、戦時下の部分は一九四三年から一九四四年頃だと推定される。また「あのころから二十五年を経過して」(終章二)とあるため、大島が山荘で暮らす時間是一九六八年から一九六九年頃と考えられる。「二十歳の私」と五十二歳の私」(四章)と書かれてもいるが、この箇所は初刊にて「二十三歳と四十八歳の私」と改稿されている。

(11) 「幻聴」(『新潮』一九五二・七)、「恐怖と快感」(『別冊文芸春秋』一九五四・二)、「ゴーストアップ」(『週刊朝日別冊』一九五五・二)、「鶴のドンキホーテ」(『新潮』一九五八・一、三)などが、そのような作品群に該当する。

(12) 加賀が一九五四年頃のことを書いた自伝的小説『頭医者事始』(毎日新聞社、一九七六・五)では、「真夜中に火が出て、病院はほとんど焼け」「死んだ者が十八人」にものぼった火災が描写される。「式場精神病院(市川)の火事」(『読売新聞』夕刊、一九五五・六・一八)によれば、病院は一九五五年六月一八日の午前一時頃に出火、一八人の焼死者を出した。火災の起きた時間帯や、死者数の共通性から、加賀の勤めていたのが式場病院だと推定できる。

作が手記形式で書かれた意味を考察している。ただ、道園は「神の餌」や「神の指」という言葉の意味については論及していない。本稿ではそれらの語をめぐる現在の大島の認識が、序章と終章で変化する点を積極的に論じた。なお、石崎等『富士』、『国文学解釈と鑑賞』一九七二・七）、川西政明『遙かなる美の国』（福武書店、一九八七・七）、新見公康『武田泰淳『富士』を読む』（『国文学論考』二〇一五・三）も、本作の形式面に着目している。

（22）戦時下の経験が原因で、大島（甘野）マリが精神病患者になってしまっていることは、すでに柄谷行人「真理の彼岸」（『文芸』一九七二・二）や、道園（注21に同じ）が指摘している。先行論を踏まえ本稿では、マリが精神病患者となっっていることが、戦後の大島の立場を規定していることを積極的に論じた。

【付記】 武田泰淳の文章の引用は、特記したものを除き初出に拠った。原則として漢字は新字体に改め、ルビや参考資料の副題は適宜省略した。引用文中の（中略）、／（改行）、（一）（注記）は藤原による。なお本稿は、第一九回占領開拓期文化研究会（二〇一五年三月一四日、於龍谷大学）での口頭発表を経て作成した。各席上でご指導頂いた方々に感謝申し上げる。また、二〇一四年度日本近代文学会・秋季大会（一〇月一九日、於広島大学）にて、村上克尚氏のご発表「狂気と動物——武田泰淳『富士』における国家批判」を拝聴した。ご発表は「反精神医学」言説を参照しつつ、同時代における作品の位置を定めるものであった。ただ、本稿は対談における作家の態度を起点として作品を再考するものであ

るため、氏のご発表と本稿の論点は重ならないと判断した次第である。

日本近代文学館所蔵 武田泰淳草稿類

——『富士』『ある近代的な物語り』、精神病患者の物語り——

藤原 崇雅

解題

武田泰淳（一九二二・二―一九七六・一〇）は、はじめ中国文学研究者として活動し、戦後は埴谷雄高や梅崎春生らとともに第一次戦後派の文学者として認知されていく人物である。本稿では、泰淳の代表的長篇である『富士』の草稿類と、未発表作品の一部と考えられる「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」を翻刻・紹介したい。

はじめに、研究史における本稿の位置づけについて述べる。泰淳の書簡や原稿類については、山梨県立文学館や神奈川県近代文学館が所蔵しているが、いずれも点数としては小規模なものであった。しかし、二〇〇五年九月、遺族より日本近代文学館へ二〇〇〇点を超える資料が寄贈された。これら資料は同館において武田泰淳コレクションという名称のもと公開されている

が、その中には『司馬遷』（日本評論社、一九四三・四）や『快樂』『新潮』一九六〇・一―一九六四・二にかけて断続的に連載 など、作家の代表作として名高い作品の成立に関わる資料が多く含まれている。

同コレクションの所蔵は、泰淳文学の基礎研究に大きな影響を与えたといつてよい。コレクション公開までは、川西政明「武田泰淳の祖先」（『群像』二〇〇三・一〇）や長田真紀「武田泰淳家系考」（『二松学舎大学人文論叢』一九九四・三）など、僧侶の家系に生まれた作家の出自に関わる論考が多かった。しかしコレクション公開以降は、石崎等『『廬州風景』の成立』（『日本近代文学館年誌 資料探索』二〇〇六・九）や井上隆史「武田泰淳『司馬遷』の成立」（『日本近代文学館年誌 資料探索』二〇一二・三）など、コレクションの資料を参照することで、作品の成立過程を明らかにする研究が発表されている。本稿は、先行論のうち後者の流れ

を汲むものである。

つぎに、数ある資料の中で副題に掲げた二点の資料を採り挙げた理由について述べる。座談会「あさつて会のことなど」(『芸芸展望』一九七七・二)で埴谷雄高が「富士」は最後までできちんとした傑作だ」と述べているように、『富士』『海』一九六九・一〇(一九七一・六)は作家晩年の代表作として高く評価されてきた。ただ、その成立過程については、管見の限り論じられてこなかった。⁽¹⁾ 本稿では日本近代文学館蔵の資料を紹介することによって、以上の研究状況をささやかながらも更新したい。

また、『富士』では精神病院が舞台となっているが、泰淳がその他の作品においても精神病を創作の題材としていたことは、あまり知られていない。作家が精神病を題材として描いた作品群——「幻聴」(『新潮』一九五二・七)、「動物」(『文学界』一九五四・二)、「ゴーストストップ」(『週刊朝日別冊』一九五五・二)、「鶴のドンキホーテ」(『新潮』一九五八・一、三)、「物語「弱き夫」」(『朝日ジャーナル』一九六三・四・二二)など——は研究史において看過されてきたのである。原稿「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」は、タイトルの通り、精神病患者が登場する。そのような内容をもつ草稿の公開は、作家の精神病に対する関心を論証する資料として貴重であろう。⁽²⁾

それでは、最後に資料別の解題を述べたい。本稿で紹介する資料は次の八点である。なお、(1)～(7)は全て『富士』の

草稿であり、武田泰淳コレクションにおいては同一の資料番号で整理されているが、調査の結果、七種のもが含まれていることが分かったので、便宜的にAからGまでの区別を設けた。

(1) 『富士』草稿A 「ノート①」

(コクヨ原稿用紙20×10、ペン書き、1枚、資料番号T0056798)

(2) 『富士』草稿B 「題不明」

(コクヨ原稿用紙20×10、ペン書き、8枚、資料番号T0056798)

(3) 『富士』草稿C 「題不明」

(コクヨ原稿用紙20×10、ペン書き、1枚、資料番号T0056798)

(4) 『富士』草稿D 「題不明」

(コクヨ原稿用紙20×10、ペン書き、1枚、資料番号T0056798)

(5) 『富士』草稿E 「草をむしらせて下さい。」

(コクヨ原稿用紙20×10、ペン書き、4枚、資料番号T0056798)

(6) 『富士』草稿F 「草をむしらせて下さい。」

(コクヨ原稿用紙20×10、ペン書き、4枚、資料番号T0056798)

(7) 『富士』草稿G 「題不明」

(岩波書店原稿用紙 20×10、ペン書き、20枚、資料番号 T 0056798)

(8) 「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」原稿

(高知堂製原稿用紙 24×25、ペン書き、3枚、資料番号 T

0056515)

(1) 署名なし、ページ番号なし。成立時期は不明だが、「ノート①」と書かれていることから、創作ノートだと考えられる。内容は前半と後半、括弧のついていない部分と括弧つきの部分に分かれている。前半の部分は、霊安室にこもっていた大木戸夫人が、すでに亡くなったはずの一条から伝書鳩を渡されたと主張する一八章の場面についてのものと捉えられる。後半の部分は、「一条の第一の手紙」とあることから、一条実見からの手紙の一通目が引用される、八章の終盤から九章にかけての部分に関してのものと考えられる。

(2) 署名なし、ページ番号あり。登場人物「おれ」の富士山に対する抽象的な思考が展開されている。ただ、初出において草稿 B が活かされた箇所は確認できないため、創作の過程で削除された部分であると推定される。

(3) 署名なし、ページ番号なし。登場人物「九鬼」について書かれた部分で、彼が女性から非常に人気のあることが記されている。初出において、女性から高い人気を得ている

のは、宮様を自称する「嘘言症」患者の一条である。「嘘言症」のことは書かれていないため断定はできないが、草稿 C からは一条がもとと九鬼という名前で形象されようとしていたことが窺えよう。

(4) 署名なし、ページ番号なし。初出において草稿 D が活かされた箇所は確認されない。ただ、初出においてはヤスパースやマリイ・ボナパルト、斎藤茂吉など、ドイツやフランス、あるいは日本の理論が引かれているのに対し、草稿 D では「アメリカの医術」についての言及がある。泰淳はドイツやフランス、日本の理論以外に、アメリカの知見をも『富士』に取り込もうとしていたのかもしれない。

(5) 署名あり、ページ番号あり。港博士と神西女史という登場人物の会話。女史に相当する人物は初出において登場していないため、創作の過程で削除された部分だと考えられる。ただし、女史に語りかける港の発言は、初出の七章ほかで述べられる甘野院長の発言と似たものである。作品成立にあたって、女史の存在は削除され、港は甘野という名前に変更された後、登場人物として形象されたと考えるのが妥当だろう。

(6) 署名あり、ページ番号あり。前半部分と後半部分に分かれている。前半部分には、「二十三歳の青春」という言葉が確認できることから、この草稿は実習生・大島の内省が記されたものであることが窺える。後半部分は、夢につい

ての言及である。ただ、初出において大島の夢は複数回にわたって書かれているが、草稿 F のような記述は確認できない。

- (7) 署名なし、ページ番号あり。今回紹介する『富士』の草稿の中で、もっとも初出に表現が近いもの。初出七章における大島と甘野の対話部分の草稿である。ドストエフスキーへの言及が見られるなど、甘野の発言は初出と同一の箇所も多く見て取れる。ただ、大島の発言に関しては、初出においては火田軍曹への言及などがあり、異同も確認される。

- (8) 署名なし、ページ番号なし。プロレタリア文学運動に参加する青年が、精神病患者となってしまう物語。管見の限り、同一の筋をもつ作品は確認できないため、発表に至らなかった作品の一部と考えられる。

凡例

- 一、挿入、削除などはそれらの記号を残さず、確定した文章を記した。ただし、削除の跡が読解の助けとなる場合は、原文の上に取り消し線を引くことによって示した。
- 一、本文のカタカナとひらがなの表記と仮名づかいは、原文のままとした。ただし、促音や拗音については、現在通用している書法によって翻刻し、たとえば「つ」ではなく「っ」と表記した。

- 一、漢字は、原則として新字体で統一し、異体字などは通例の字体に直した。

- 一、ルビは必要なもの以外、適宜省略して表記した。

- 一、句読点、傍点、圈点、括弧、改行は原文のまま表記した。

- 一、判読不明の箇所については、一字分を□で示した。また判読が確定できていない箇所については「―」を挿入し、可能性として想定される言葉を補った。

- 一、記述の一部に、今日の見地からすれば不適切な表現があるが、当時の時代的背景を考慮し、原文のままとした。

翻刻資料

- (1) 『富士』草稿 A 「ノート①」

霊安室にこもっていた大木戸夫人は、夢のうちに一条が、マミヤの鳩をかかえて来て、わたしと語る。彼女は、たしかに伝書鳩をかかえている。大木戸が廊下を歩いているのを見たという者もいる。マミヤが煙突に上っているのを、岡村少年も見たらしい。

(未亡人となった場合、それでも奸通であるか)

(一条の第一の手紙にかかっている「奸通」は事実であるか。事実であれば、それを中里里江は知っているはずであるか)

- (2) 『富士』草稿 B 「題不明」

精神病とフジサン。このかわりあいには面白いかも知れない。メクラにとって富士は何物であるか。それを問うとなれば、どうしてもセイシン病プラス富士ということになるからである。「おれの『庭』」の中に、人民どもがウヨウヨとむらがつていることを、おれは許すべきか。とんでもない。おれは彼らを、動物園の動物のように飼育して、そしておれの庭のたのしみをゆたかにするように、こころみる。だが、それは決して奴らを幸福に、暮させてやるなんぞということとは無関係なんだ。たとえばフジがおれの庭の一部に突出しているとする。それは邪魔者だろうか。この火山の噴火が、おれの庭の秩序をみだすだろうか。そうあらせてはならないのだ。おれは、フジの独自性や立派などを、おれの『庭』の中では絶対に許さないのだ。フジはおれの意志にしたがつて配列される、一つの庭石にすぎない。そうでなければ、おれはフジを必要としないのだ。必要のあるものだけを配置し、必要のないものはきれいさっぱり一掃してしまうのが、おれの造園術なのだ。さて、まずぶつかる難問は、必要、不必要をどこできめるかということだ。一ばん手つとり早いのは、存在するすべては必要であると規定してしまうことだ。あるいは、感覚的に気に入らないものはすべて不必要なりと規定してしまうことだ。だが、存在するすべてとは一体何なのか。感覚的に気に入らないものとは一体何なのか。「月の沙漠」は私の庭に、必要なものなのか、それとも不必要なものなのか。

もしも自分の雲的感覚、庭園術を自分自身で制御、などなど、改革できるならば、何も「庭」などつくらなくても、万事このままで地球上のすべての凹凸を庭とみなして無為自然でいられるはずなのに、何のためにジタバタするのか。問題は自分の内心、自己のまぼろしのつくりかえであって、地形のつくりかえではないのではないか。

現存する庭は、南極や北極、つまりキョクを考慮に入れていない。それでも良いにしても、このキョクを考慮に入れたニワがよりすばらしいものであらうと、私は恐口「恐怖、恐懼」する。もちろん、内心のつくりかえが明確な形をとりえないため、どうしても外界の対象の自由なつくりかえに依存しなければならぬのが実情である。そこへ、そのような、切なる人間の欲望のしみついた、ぬきさしならぬ実情こそ、私の出発点であらねばならぬ。

ニワが表現すべきものは、人間存在の自由であるか、それとも不自由であるか。ニワによって人間はたしかに、自己を制約する地理的条件、つまり地上の一点にしばりつけられている不自由から解放され、あらゆる自然を掌中におさめ得る自由のよろこびにひたるにちがいない。にもかかわらず、人間がつくり出したすべてのニワは、どうしてかくもキュウクツな形式を甲冑の如く肌身にピッタリと装着させねばならないのだろうか。形式の自由、自由の形式を探し求めて、たどりついたのは結局、不自由きわまる形式の完成だったのである。

全人類の形式。それは、たしかに有るにちがいない。したがって全存在の形式を発見する、発見したがる欲望が人間をニワに導くことは当然である。したがって、ニワの本質とは、「形式」なるものとの人間のかかりあいにあるのである。地球の誕生とともに、形式は、あらかじめあたえられている。それが、一つの前提となりうる。しかし人間は、この全存在の形式なるものを目撃したり感触したりできないので、手さぐりで部分々々に於てたしかめて行く。「形式」が人間にとって、自由であるか不自由であるか。形式とは人間がその中に包みこまれている「全体」の□□なのであるから、人間は立ち上った四足獣というこの小形式によって、地球という大形式と、いやおうなしに結びつけられている。植物と動物とをたべて棲息する人間は、そのような条件によって、この二つの「自然」

(3)『富士』草稿C「題不明」

九鬼のあまりのウソの巧みさに、おどろかされる。それは、ねたましく思はれるぐらいだ。彼は、女性に好かれる。すこぶる好かれる。それも、私の彼に対するねたましさの原因ではあるが、いくらなんでもその程度のこと、彼におどろかされるわけではない。女たらしは、世上に多いことであるし、普通の女たらしなどだったら、ねたましくもないし、おどろかされもしない。彼の本質は、「女たらし」ではない。表面的に、理念として彼はそ

(4)『富士』草稿D「題不明」

冒険と計算。冷静と情熱が、どのようにして彼の中で調和されていたのだろうか。うまい具合に毒とクスリを調合させることのできる彼ではなかったにしろ、どんな具合にして彼の中で組み合わされ、せめぎあっていたのだろうか。そもそも「戦術」と称すべきものも彼は持ったことがあったろうか、持とうとしたのだろうか。

彼は、日本の医術とアメリカの医術しか信用できなかった。

(5)『富士』草稿E「草をむしろせて下さい。」

「患者の恋愛について、神西岬さんはどう思いますか。恋愛をする権利は、誰にでもありますね。ですから、恋愛をしていけないはずはない。」

港博士は、いつものように、やさしいやさしい声で、神西女史に語りかけていた。

「患者が愛しあったり、恋しあったりするのを、禁止するバカはいませんよ。だけど、やっぱり恋愛という行為は、熱のこもった、はげしいものですからね。神西さんも、観察しているでしょうし、こちらが観察しようとしなくても、彼らの恋愛の方が、ぼくたち医師に押しよせてくると、そう、ぼくはいつでも感じていますがね。」

「……………押しよせてくると、ええ、そうも言えると思います。」

港先生のおっしゃる意味は……。それは、たぶん、私たちが観察しようとしなくても、あるいは、観察するより先に、と言うような……」

「そう。正直なところ、精神病院の責任者としては、恥しいけれども、ぼくには彼らの恋愛について、うまく観察する自信がないのですね。観察できないから、それでぼくがなやむとか、そう言うわけはありません。わからないことは、わからないでも、それでイライラする方ではありませんからね。おそらく、患者の恋愛事件について、うまく観察できないでも、ぼくは平気なんでしょうね。冷静でいられると言えば、つごうがいけれども、ある程度、無関心ですごしていただけるわけですから。ですから、何も問題にしないで、よろしいのです。ですが、ときどき、もう少し観察したり、分析したり、まあ処理できるようなってもいいなとは、思うんだな。ぼくは男性だし、あなたは女性だし。それに、あなたには、ぼくには欠けている観察力や理性があるように感じられるのですね。」

(6)『富士』草稿F「草をむしらせて下さい。」

精神病者が善人であるか、悪人であるか。また、彼らの頭脳のはたらきは、はたして常人より劣っているものなのか、どうか。そして、彼ら患者たちの犯罪を、病者の犯罪と称すべきなのか、それとも一般的な「人間」の犯罪と申すべきなのか。

これらの、あまりにも根本的な難問を解決するには、私の

体験はまずしすぎるし、私の研究仲間は無熟そのものであり、そしてなにより若すぎることを、よく承知しているつもりだ。二十三歳の青春などというものは、精神病学を専攻する学徒にとつて、少しも特権ではない。むしろそれは、勝手な理論に飛躍したがる、あぶなつかしい状態を示すにすぎない。

患者は、どのような裏切者になりうるか。何回のどんぐがえいをなしうるか。実は何、その裏の実は何、そのまた裏の裏は何と言うように、どこまで裏の裏をもちうるか。つまり彼らは、どのあたりまで人間能力の限界として、予定したくらみどおりに行動しうるのか。

「夢の中でしか起りえないこと」

ソンナモノハナイ。夢ノ中デ起ッタコトハスベテ、夢ノ外デモ起リウルコトナノダ。それが^ア実際ニハ起ラナイノハ、何モノカニヨツテサマタゲラレイルカラニスギナイノダ。ソノ「何物」カトハ、コノ世ノイツワリノ「秩序」デアル。

(7)『富士』草稿G「題不明」

医長はなぜあんなに、すべての患者にやさしく接することができるのだろうか。私自身もそうありたいと努力しても、できないのに、なぜ院長は生れながらの性格として、自然にそう□□□□ようにして、あのような態度をたえず保ちつづけることができるのだろうか。一時的な口先だけでなく、日常の行動の

あらゆる部分を通じ、かわりなくそうありうるのだろうか。

院長は、こう言う。

「それはね。大島君。ぼくだって君と同じことさ。絶対にやさしくありつづけることなんぞ同じ人間だもの、できるわけはないんだよ。ただね。君にも少しは参考になるかも知れないから言うんだけど、一つだけぼくには心がけあるんだ。我々は、患者たちから誤解されることを怖れたり避けたりしてはいけない。誤解されることこそ、当然なことなんだから、みずからすすんでその誤解をひきうけなければならぬ。だって、我々は常に患者たちを誤解し、そして誤解することによってのみ患者たちに近づいて行くんだからね。自分たちが向うを誤解して暮しているのに、こっただけが相手の誤解におどろいたり、怒ったりすることはいけない。怒る、腹をたてる、いらいらする、それは我々には許されない。だって、もしかしたら患者たちの誤解こそ、我々に対する負の理解かもしれないんだからね。彼らは我々が自分自身では理解できていない我々の本質を発見し、教えてくれているのかも知れないじゃないか。いや、彼らこそ、彼らだけが我々を治療し教育してくれる、めったにない選ばれた人間だと称してもいいくらいなんだ。もしも彼らがいてくれなかったら、ぼくも君も、人間について何一つ新しい、今とはちがった観点に立つことなんぞ不可能になるはずだろうし。彼らが我々をひきよせるのだ。我々が彼らがをひきよせるんじゃないんだよ。なるほど、病院は彼らを集め、彼らを収容す

る。保護する。治療しようとする。だが実は、彼らはてんでんばらばらにこの社会、この地上に存在しているその時からすでに、ぼくらに向って呼びよせの声をかけていたはずなんだ。いはば彼らは、我々の研究材料になるようなそぶり、見せかけをしていながら、ほんとうは我々の精神的実質を根本的に改めるために、つかわされてきた使徒のようなものなんだ。彼らは全く、うんざりするほど明確鮮烈なやりかたで、我々に我々自身の本質を突きつける。いくらこっちがいやがっても、そのやり方で眼が痛くなるほど、こっちを目ざましてしまう。目ざましてくれないはおかしい。そんな残酷な、強力な攻撃者に対して、ぼくらがやさしいやり方で、接することなんぞ、ほとんど不可能なのだ。だから、根本的には、ぼくらはやさしくなんぞありはしない。だが、それでもぼくらが、やさしげな態度を唯一の戦術とするのは、彼らが絶対的に存在している、そのためなんだ。絶対的に、充滿するかたちで厳として存在している、しかもそれをぼくらが異常者としかうけとれない状態で生きつづけている。正常者の息の根までとめかねない堅固さで、はっきりと場所を占めてしまっている彼らと接近して、一体どんな態度が正しいと決められるだろうか。したがって、もしぼくらにやさしさが表現できるとして、それは全く、向うがいやおうなくそうさせてしまうだけなんだ。決して、こちらが自発的に意志の力で、そうできているわけじゃないんだよ。患者たちに、身も心もまかせてしまう。極端に言えば、そうなるかもしれない。」

「…………それは患者が絶対者だとすると、患者が上位にあり、患者が一方的にはたらかせてくる。患者が『動』であって、ぼくらは『反動』にすぎないということになるんでしょか。もし、そうだとすると、ぼくらを守ってくれるやさしさというの、患者の手でぼくらに著せられた拘束衣のようなものになってしまうのじゃないでしょうか」

「君のその反問は、もつともだと、ぼくは思うよ。ぼくだって毎晩、その反問を自分でやっては、解決のつかない壁に向いあうことだってあるのさ。もちろん、彼らは患者であり、ぼくらは医師である。この区別をあいまいにするわけにはいかない。人間は誰でも精神病患者なんだという議論くらい、甘ったれた、いやらしい、ずうずうしい言い方はないからね。それは、君だって、わかってくれるだろう。ぼくが理性ある医師としての任務と責任を、それほどごまかし口かいている男でないことはね。君が『やさしさ』について質問してくれたから、今、何とかして少しでもわかりやすく説明しようとしているだけなんでね。」

「ぼくはただ、ぼくがやさしくなれない瞬間が、あまりにも多すぎるもので、やさしくなりつづけられる先輩が、うらやましく感じられて、それで質問しただけなんで、……。この患者、こいつは一体何物なんだ、いくらなんでもこいつがぼくと同じ人間として権利を主張したり、ぼくたちをバカにしたり白眼視したり敵視することを、こっちは我まんしていなくちゃならないのかと、腹が立つてくることがあるもんですから。やさしく

しなければならぬ、先生の言はれた通り、戦術としてもやさしくしなくちゃならないと決心はしているんです。ですから表面的にはある程度まで、それができるんですが、内心では、こいつら生れていてくれない方がいいなと思うことだってあるんです。そんなときは、一体自分には、本心から彼らの生存を願っているのか、それとも彼らの消滅を心のどこかで望んでいるのか、わからなくなるんです」

「君の言うのは、患者全部のことじゃないだろう。一部にいてだろう」

「…………ええ、そうです。ですが、やさしくできるとすれば、患者全部についてでなくちゃ、いけないと思うんで」

「そうなんです。一部ではダメなんだ。全部についてでなくちゃ、ぼくらの責任がはたせないことになるからね。えこひいきなく、患者全員に対して……。大島君、ぼくだって、それができないことは、よく知っていますよ。君だって、ぼくを観察していれば、ぼくにそれができていないことは、よく見抜いているにちがいないんだ。ああ安易で、無責任な、全人間総精神病患者論には、ぼくはあくまで反対します。しかし、全部の患者に対して平等にやさしくありえない精神病院長として、ぼくは自分が一種の患者ではないか、いや、疑いなく患者そのものだと感ずることがあります。それほどニヒリスティックなデスパレートな感じ方ではなくて、冷静に理性的にそう自分に言ってきかせることは、ひそかにあります。異常な精神病患者を収

容する、国家施設の責任者である自分の正常性が、はなはだあぶなっかしい、矛盾のかたまりのように感ぜられてくることだつてあります。だが、よくよく考えてみると、患者が医者であるという真理を立証し、しかも患者という仮面をかぶつて生きているようにして、それと寸分のちがひもなく、私もまた私で国立保養所の院長として生きているという真理を立証し、その仮面をかぶつて生きつづけていることになります。彼らも私も、その真理と仮面から脱け出すことはできない、脱ぎずてゐるの内科、外科の場合は当然すぎるほど、当然なことです。しかし、精神異常患者の世界にあつては、患者と医師が同時に存在している、そのことがもともと対立であり矛盾であるのかも知れないんだからね。人間社会には、言うまでもなく、対立もあり矛盾もある。だが、その矛盾と対立とは全く別種の矛盾と対立によつて、ぼくらと患者たちが結びつけられていると、言つて言えないことはないんだからね。気持ちがいいになるぐらい考えつめなくちゃならない難問が、この世にはある。しかし、いわゆる気持ちがいいの世界において、気持ちがいいになるぐらい考えつめるといふ、そのきまじめな態度は一体、正常なのだろうか、それとも異常なのだろうか。いやこういうペダンティックな、先走りのすぎた言い方は、やめよう。後輩たる君のまじめな気持を、ちよつとでもかきみだしくないからね。はっきり申し上げておくが、ぼくはごく平凡な職業人です。およそ天才とか聖者

とかいう種別の人種とは、千里もへだたつた、ありきたりの社会人です。ただ、いくらかふつうの社会人、職業人たちがっている点は、たまたま彼ら患者たちに呼びよせられてしまった人間だということです。呼びよせられてしまったことに、危険を感じるので、ぼくは正常な安泰を求めている人間にすぎないんだ。君も、ドストエフスキイの愛好者らしいが。ドストエフスキイの『カラマゾフ兄弟』の、あのゾシマ長老。あのアリョーシャという宗教的美青年は、あのゾシマ長老が、すべての難問と直面し、それと斗ひ、それを解してしまつてゐる大先輩として、彼を尊敬してゐたでしょう。学僧アリョーシャの師に対する至誠、熱意、信頼は、読んでいて涙がこぼれてくるくらい感動するものだ。だがねえ、大島君。わが精神病科の医学者のあいだで、師と弟子のあいだに、あのような美しい信仰のなしみと喜びが生れうるとは、実に口おしいことだが、ありつこないとぼくも君も信じてゐるのではないだろうか。それは、資質生れつきのために、そうなるのではなくて、我々が向ひあつて一生それから逃れられない相手が、ギリシア正教の信徒や非信徒ではなくて、困つたことに精神病患者であるからではないだろうか。だから、もしも君やぼくが、とうてい不可能ではあるうが、一種のやさしさをもちつづけるとしたら、それはあのゾシマ長老や宗教青年アリョーシャのやさしさとは、全くちがつたやさしさでなくてはならないはずだ。そのやさしさとは、何だろう。それはうまく答えられないからと言つて、それが私た

ちの罪だろうか。

(8)「ある近代的な物語り、精神病患者の物語り」原稿

埃のかかったつつちの赤い花は同じく埃のかかった葉にひっかつたやうについて居た。赤松は、細く立っており影が土の上へのびておつた。まづい洋画の色彩は現実の世界においても同様に数限りなく見出された。だがだれも、元気の良い人々にはこれらの哀れな色彩に目もとめなかつたが、悲観もしなかつたにちがひない。太陽が出ると空が青くなり、雲や鳥が飛ぶので誰も、一時的に満足してゐたのかもしれない。高等学校の校庭はその日、太陽が暖かそうに照つてゐたが不幸そうな姿をした学生が一人ゐた。彼は赤松や、くぬぎや、枯草をみすてて、角ばつた影にみち／＼た、二階の教室で机にもたれて斜になつてゐた。やせた赤くない顔と手でもう彼は軽べつされるかもわからない。その上彼は一生懸命字を読んでゐた。彼はそれでも足に下駄をつつけて時々それをガタ／＼いはせてゐたが。かれの読んでゐる紙片には次の様にかかれてゐた。

「文学は芸術であるとは一体、真であるか。己は之を疑ふ。文学が芸術なる為には少くとも芸術に特有の脈搏をうつてゐなければならぬはずだ。そのミヤクハクこそは音楽にも、舞踏にも絵画にもあふれんばかりにおどつてゐるのだ。併しながら現在我々のなしつつある、ホームの文学には何パーセントの芸術のミヤクハクがあるか？ 我々の文学は音楽としたら広告屋の

ラッパだ。絵画としたら活動の看板だ。」子供らしい芸術論と笑つてはいけない。彼は此の学校のプロレタリア文学の青年作家の集団の一員になりたての人間だった。勿論、文学の探究のための道としては誠に恐しいトンネルであつた。欺瞞の煙はうづまいて、彼を窒息せしめたではないか。この学生は今、此の集団が首長としてあほいでゐる或る力の強い文学青年とこの論文について、喧嘩をしてきたのであつたが、別に血の氣ものぼらぬ風に頭をふつてゐた。そして時々前頭部をなぜが一寸赤い液体が指にそまつた。相手は文芸家としては力がありすぎたのである。鳥が窓に影を投げたので学生は立上がつてその紙片を破いて痰壺の中に、にらんで、張りのない肺の上をポンと片手でたたいて教室を逃げ出した。

二日ばかり立つて彼は又なぐられてしまつた。枯草の上へころがされて彼は、死にそんな母を思つた。勿論無抵抗だった彼は血を出して立ち上つた。彼は「同志を裏切つた」そうであつた。併し彼は「己みたいな、力のないやつを問題にして呉れたのかなー」とそれだけを感じて黙つてゐた。

秋、高くなつた天はあんまりまぶしいので、黒い土を見て下をむいてゐると、馬が強いなないた。

彼はかへりに電車の中で、セルの着物を着た男を見た。日光が、その着物と肉体との両方へ当つて明るい輪郭をとり、すべての線は力強かつた。そして頭にはカン／＼帽といふあの一般的な飾りをつけていたが、そのひさしの真直ぐな横の線も同じ

く正置物の力強さがあつた。鼻も黒い影をつくつており、ほほも、真直な傾斜をなしており、その上、全集物の真四角な白い表紙を真直な膝の上へおしつけてゐた。彼は、その男のこしかけてる緑色の、腰かけと窓の外の通過する雑色とで画を心の中でつくつてゐた。併し彼の下りる一つ手前の停留所でその男は驚く車掌を後にして、只乗りをして逃げていった。

五日たつてその学生は郊外の気違ひ病院へ入れられた。僕は彼を疾走する電車にのつて訪ねた。多くの精神病者はテニスや野球をしてゐたが彼はやっぱり黄色い室でツクネンとしてゐた。院長にきくと、『とても駄目ですよ』といつて光るメスで彼の鼻の腔をめくつて見せた。僕はかへりがけに精神病院の垣根はからたちの花でできているのがわかつた。僕は彼が気がちがつて、この病院に入つたのを残念におもつた。もしかれば正気でゐたら、恐ろしい顔で北原白秋氏を呪つたらうに。それから、電燈がついてから僕は、「あーあいつは恋なんかしないで終つちやつた。あんな美しいかほをしてゐて女性を知らなかつたなんて、近代的物語りなんて、みんな殺風景なもんだ」とくやしがつた。

注

(一) 野口武彦『現代小説言語の諸問題』(『小説の日本語』中央公論社、一九八〇・二二)では、『富士』八章の原稿が図版として挿入されている。この原稿は日本近代文学館に所蔵がない。野口の著作は

『海』を発行していた中央公論社から出版されているため、同社がその原稿を有しているとも想定されるが、現在のところその所蔵先は不明である。

(二) なお、武田泰淳コレクションには、本稿で紹介した草稿類の他にも、「精神病理学」に言及した題不明の原稿(原稿用紙20×10、ペン書き、2枚、資料番号T0056762)が存在する。

【付記】草稿の公開に当たつて、泰淳のご息女である武田花様や、その所蔵館である日本近代文学館より、格別のご配慮を賜つた。また資料の調査・閲覧に際して、同館の小川桃様・西村洋子様に変お世話になった。各館・各氏に、心より感謝申し上げます。

池田啓悟 『宮本百合子における女性労働と政治』

——一九三〇年代プロレタリア文学運動の一断面——

鳥木圭太

池田啓悟氏の初の単著となる『宮本百合子における女性労働と政治——一九三〇年代プロレタリア文学運動の一断面——』は、二〇一五年四月に風間書房より刊行された。

本書はこれまでの研究史において光のあてられることなかった宮本（中條）百合子のプロレタリア文学運動期から戦後の小説作品をとりあげ、百合子が作品の中で描こうとしたテーマ——社会における女性労働およびそこで女性が直面する問題と彼女が所属したプロレタリア文学運動の政治的要請との相克を明らかにした意欲作である。

以下、二〇一六年三月一三日に開催された第二十二回占領開拓期文化研究会における著者を交えた合評会（質問者鳥木・萬田慶太）での討論を踏まえ、本書の内容を紹介する。

*

本書の構成（目次）は以下の通りである。

序章

第一章 与えられたプロレタリアート——中條百合子「ズラかった信吉」論——

第二章 〈接点〉の発見——中條百合子「舗道」論——

第三章 運動の中の抑圧——「愛情の問題」をめぐる林房雄と中條百合子——

第四章 「宮本百合子」の生成——中條／宮本百合子「小祝の一家」論——

第五章 統御とダイナミズム——宮本百合子「雑踏」「海流」「道づれ」と社会主義リアリズム——

終章 〈空虚さ〉の行方——宮本百合子『二つの庭』論——

序章では、本書全体を俯瞰しつつ、百合子の「社会主義への目覚め」（二頁）というモチーフから論が説き起こされている。



る。ここでは、「彼女にとってプロレタリア文学に取り組むと言うことは、自己の生きる道を切り開きたいという欲求と、プロレタリアートという他者の解放との接点を探る試み」（六頁）とあるように、すでに彼女がプロレタリア文学作家の道を歩む時点で、一つの葛藤を意識の内に抱え込んでいたことが明らかにされている。この葛藤は、「運動の方針への忠実さ」（同前）と「社会の不当さへの闘い」（同前）という二つのテーマへとスライドしていったというのが、序章で示される大まかな見取り図である。本書はこの見取り図をもとに、第一章以下、「百合子作品が抱え込んだ矛盾がどのようなものである、それがどのような展開をたどった後の作品へとつながっていったか

を明らかに」（六頁）にしていく。

第一章では百合子の初期のプロレタリア文学作品「ズラかった信吉」「改造」（一九三二年六月―九月）を分析し、百合子としての社会主義とは何かを浮き彫りにしていく。百合子としての社会主義とは「新しい意識と制度とのつながりを実現する〈場〉」（二六頁）であると同時に「現状を相対化し批判するための〈場〉」（二七頁）としても機能している。こうした〈場〉としての社会主義は、彼女が自己実現を果たし、同一化を図っていくための規範として機能し、絶対的な「正しさ」として彼女を拘束していったという。この正しさは、むしろ現実における彼女の自己実現を阻む結果となっていたのではないか、という問いが本章の冒頭に設定されている。

また本章では、作品の執筆にあたり、百合子が依拠した規範が「一九三一年に於けるナツプの方針書」「ナツプ」（一九三二年四月）であることを指摘し、執筆の動機にソ連の社会制度や人々の社会意識の紹介という作家同盟の要請があったことを明らかにしている。そうした組織的要請をもとにながらも、百合子自身がソ連における女性の立場からその制度が抱え込んだ諸矛盾を感じし、それらを「新しい社会主義社会がどのように乗り越えていくか」（二五―六頁）をテーマに据えた作品である、というのが本章での分析である。しかし、同時にこの社会主義の「正しさ」が、こうしたソビエトにおける女性の抱えた問題を不可視化しているということも批判的に指摘されている。

第二章では、「女事務員」を主人公に据えた「舗道」(『婦人之友』一九三二年一月)を通じて、大正期以降の都市消費社会の中で新たな階級として見出されてきたいわゆる新中間層の労働について、百合子がどのようなまなざしを注いだのかが明らかにされている。

本作で重要な役割を占める文化サークルは、百合子自身の組織体験をもとに描かれており、この文化サークルによって女事務員たちの間に刻み込まれた溝を埋め、「独自の利害を持つ集団とはみなされていなかったはずの「女たち」、作品ではそれをひとつの階級として立ち上げようとしている」(五七頁)と同時に、それが現実の作品の読者に対して働きかける役割を持つと分析している。

しかし、こうした「女たち」による共闘は描かれるものの、「男の社員」たちとの間にある分断は解決の糸口がみえない」(五七頁)とも述べられている。この「経済的地位」とはこととなる性にもとづく階層化」(五八頁)の解決は、「方針の忠実な実践だけでもたらされることはないだろう」(五八頁)と結論づけられている。

第三章では一九二〇年代後半に本格的に日本に紹介されたコンタイズムをめぐる林房雄と百合子の応酬を軸に、作家同盟で提唱されたプロレタリア・リアリズムから唯物弁証法的創作方法、そしてそこで定式化された「題材の固定化」のテーゼという一連の蔵原理論の段階的發展とその内容を整理し、そこに

百合子が「愛情の問題」を通じて如何にコミットしていったかを分析している。

著者は社会主義における新たな人間関係や恋愛観を説く林房雄のコンタイズム論について、そこには一貫して男女間の身体的差異にもとづく非対称性、すなわち「生殖」の問題が欠落していること、「愛情の問題」にコミットした男性論者がみな一様に林房雄の論理構成をなぞっていることを指摘している。それはたとえば、「愛情の問題」をめぐる一連の作品で描かれた女性を抑圧する「変節者」が、運動全体のかなでなく一部の問題に過ぎず、それをもって運動全体を批判するにはあたらないという論理である。すなわち、過ちを運動の本質に関わりのない「異物」として排除」(八四頁)するという論理である。蔵原惟人は「芸術的方法についての感想」(『ナツプ』一九三一年九月一〇月)の中で、問題を運動の構造的な問題から男女間の愛情問題へとスライドさせているが、これは彼の提唱するリアリズム理論が、現実の問題を隠蔽していく過程でもあった。「愛情の問題」は、いわゆる「ハウスキーパー」を扱った作品群であり、百合子ですら運動の正当性を守るために、この「排除の理論」を行使することとなる。こうした「排除の理論」はリアリズムが運動に及ぼした現実的影響の一つであることを本章は明らかにしているのである。

第四章では百合子が「中條」から「宮本」に改姓する過程で、夫の宮本顕治からどのような抑圧を受けていたのかを、小説「小

祝の一家」『文芸』一九三四年一月）の分析を通して明らかにしている。本作はプロレタリア詩人今野大力の家族をモデルにした小説であるが、初出で大量に散見された伏せ字部分が単行本では補われ、同時にそこには初出に見られた夫婦間に横たわる「ねじれ」（二一六頁）が解消されているという。このねじれが解消されていく過程が、百合子自身が顕治の不当な要求（宮本姓への改姓）に反発しながらも屈服し、その論理を受け入れていく過程と重ねて論じられる。

また、「祝の一家」で主人公乙女が夫の活動費を稼ぐために行う「女給」という労働は、当時から「それまでにない合理性や新鮮さをもった「新しい」存在」（二〇九頁）であると認識されていたが、それは同時に雇用主との正規の労働関係を結ぶことのない「感情労働」（二二一頁）であり、一般的な賃労働に對し劣位に置かれていたことを著者は指摘している。そして作品内においても乙女がそうしたヒエラルキーを内面化していくことで自らに対する夫の優位を担保していくという構図が描かれるという。この構図は百合子自身の女性の感情労働に對するきわめて限定的な「まなざし」（二一五頁）によって形成されており、宮本顕治との関係に序列を持ち込むという構図がそのままあてはめられていると著者は分析している。

第五章ではいわゆる「雑踏」系列の作品について、登場人物を自由に焦点化し、その内面を描きながら統御し、価値判断をおこなう「イデオロジカルな語り手」（二一九頁）の存在を指摘

している。この語り手の存在こそが社会主義リアリズム論争の中で焦点化されていた「何を・如何に」というテーゼに對し百合子がバルザック研究を通して導き出した答えであったという。すなわち、作中に描かれた対象に如何に関わるかという作者の主体性にこそ作者自身の「階級性」（二二八頁）が関わってくるのであり、そこにこそ百合子の問題意識が反映されていると分析している。

終章では「雑踏」系列と題材の点で多くの共有点を持つ「二つの庭」（『中央公論』一九四七年一、三一九頁）を扱い、主人公伸子と共同生活を営む吉見素子の表象に注目し、伸子が中産階級の歪みや抑圧（『空虚さ』）からの脱出を図るために社会主義に自己同一化を果たす過程で、素子のセクシュアリティを「不自然」（二六〇頁）なものとして否定してゆくと分析している。

しかし、素子の感情自体は作中においては「異物」（二六二頁）とされながらも、「排除」（八四頁）されることなくそこに描きとどめられている。こうした百合子作品における「異物」そのものを（宮本百合子というテクスト）を読み解く際の指標とすることを掲げて本書は結ばれている。

*

本書は、個別の作品分析を通じてひとりの〈プチブルジョア・インテリゲンチヤ〉の女性がマルキシズム運動に参加し、その

理論や教義を内面化して「プロレタリア作家」になつ（一頁）ていくという（転向の物語）を描き出している。それはすなわち（宮本百合子）という一つの作家イメージが同時代の言説空間の中で形成されていく過程を検証していくという作業でもある。著者いわく、それは作家イメージを形成していく「表現技法」の分析でもあり、戦後日本共産党を中心に形成されてきた（正典^{カノン}）としての宮本百合子というイメージに対するカウンターイメージの創出でもあるという。

その際、彼女が内面化していくプロレタリア文学理論が、夫である宮本顕治や運動の理論的支柱であった蔵原惟人という具体的男性主体による言説を通して提示されていくということは注目に値するであろう。つまり、本書で浮き彫りにされている百合子の苦闘は、プロレタリア文学理論（≠男性性）との闘争（あるいは共犯）というフェミニズムの見取り図に収斂しているのだ。

しかし、にもかかわらず本書にはジェンダー・フェミニズム理論への言及や援用がほとんど見られない。合評会においても、その点について著者の意図や戦略を問う質問がなされた。著者はそれに対し、そもそも百合子自身はプロレタリア文学理論を男性性と認識していたのではなく、あくまで組織の規範としてその理論に従順であろうとしていたのであり、最初にそれをジェンダー・フェミニズムの立場から男性性として規定していくと、抑圧を構成するメカニズムの全体像を見失う恐れを指摘

している。

おそらくこの点が、本書が従来の百合子研究から決定的に分岐する点になるのではないだろうか。それは従来のジェンダー・フェミニズム理論にもとづく研究を否定するのではなく、（宮本百合子）というイメージ生成のメカニズムの別の側面を描き出すことで、従来の研究に接続され、あるいはこれを補完していくものであるということだ。

また、この問題については、討論の中で、百合子におけるインターセクショナリティをどう考えるのかという指摘もなされた。階級や人種、民族、宗教や国籍などジェンダーの軸だけでは解決できない差別構造、あるいは女性性という括り方でははみ出してしまうようなセクシュアリティのあり方をどう考えるのか。こうした百合子を論じる際に必ずぶつかる問題である、階級とジェンダーの間に横たわる溝を埋めるものは何か。少なくとも百合子が依拠した当時のマルキシズムの中には、これらの問題の解決の糸口は見いだせない。

この点については本書がいわゆるアンペイドワーク（家事などの無償労働）に言及している点と関連があるように思われる。つまり、再生産領域における女性労働の問題が、百合子の中でどのように位置づけられるべきかという問題である。たとえば第四章において「小祝の一家」の中で女給という職業が労働とはみなされていなかったこと、あるいは終章において「二つの庭」の吉見素子の家事労働が伸子によって否定的に捉えられて

いることの分析を通し、従来の研究の枠組みではこうした問題が「セクシュアリティの充足」(二四五頁)に収斂していきがちであるのに対し、本書ではそこに百合子自身の「階級意識」という分析項を加えることで、セクシュアリティは問題の原因ではなく結果の一つであることを明らかにしている。百合子のテクストが描き出すものは、日常における違和感がマルキシズムの内包する問題そのものを撃つ可能性であり、本書における一連の分析はそこに迫る糸口を提示しているのである。

同時に討論では、こうしたイメージに収斂していく百合子の主体というものが、作家というレベルで捉えた時にはたしてどこまで実体性を持つのかという問題についても議論が交わされた。たとえば、宮本百合子が作家として生成すると述べた時に、宮本顕治の影響をどの程度具体的に作品から推し量れるのかという問題である。題材の採り方や運動方針として影響は受けていたとしても、それは本文に傍線を引いてここからここまでに影響が見られると指摘できるようなものではないであろう。また、百合子という作家イメージの生成について、本書では主として作者の側から検討されているが、そうしたイメージの生成にはテクストの受け手である読者もまた大きく寄与したであろう。今後こうした読者論的な視点からの研究の深化も期待されるところである。

さらに、討論では作者および語り手の位相と、その階層性をどのように処理するのかという点にも言及された。本書の特徴

として、テクストの語り手と作者が同列に論じられている点が挙げられる。しかし、社会主義リアリズムにおける作者とは異なる位相を持つ語り手の構築は、百合子だけでなく他の作家にも見られる特徴である。また、両者の位相の違いについて百合子本人がどこまで認識していたのかという問題も残る。本書では主として林房雄と百合子の論争に焦点があてられているが、社会主義リアリズム論争全体の中で百合子の作品がどのように位置づけられるのかを問い直す必要があると思われる。著者本人も、通時的な縦軸のみでなく、文化や社会の状況という横軸の広がりの中で百合子作品を捉え直す意義について言及しており、今後の研究の進展が待たれるところである。

本書の末尾には百合子のテクストに刻まれた複数の「矛盾」(二六二頁)をどのように読み解くかという提言がなされている。それは中條／宮本百合子という主体にまつわるパーソナルな領域にのみ還元できる問題ではなく、まさにいまここにあるアクチュアルな問題としてどう読み解くかが問われているのだ。本書は様々な点において百合子とは異なる時間・空間を生きる現代の読者へも切実な問いを投げかけているのである。

「嬉美智章著『アニメーションの想像力』の著者に聞く」をふりかえる

水川敬章

このテキストは、第二二回占領開拓期文化研究会（二〇一六年三月一二日開催）で行われた合評会「嬉美智章著『アニメーションの想像力』の著者に聞く」を辿り直すものである。

合評会のテーマとなったのは、嬉美智章『アニメーションの想像力——文字テキスト／映像テキストの想像力の往還——』（風間書房、二〇一五）である。本書は、博士論文をベースにまとめ上げられたものである。

合評会は、著者と聞き手役の応答＝議論を軸にして展開した。聞き手役は、雨宮幸明（同志社大学人文科学研究所嘱託研究員）と水川敬章（愛知教育大学）が務めた。水川がコメントーター的役割を担って合評会の口火を切り、雨宮は水川の発言を受けて更なる問いを呈した。

まずは、水川のコメントと質問について概観しておこう。水川は、最初に本書の目次を確認しつつ、各章の議論のポイントを指摘した上で、本書の全体像を素描した。まず、本書の主たる章を、（１）「第一章」、（２）「第二章」から「第四章」、（３）

「第五章」から「第七章」、（４）「結び」の四パートに分け、それぞれ要点を次のように提示した。（１）は、事実上の序章部分に該当するとされた。本パートでは、トーマス・ラマー『アニメ・マシーン』（藤木秀朗監訳、名古屋大学出版会、二〇一三）を肯定的に継承する問題意識に立ちながら、リミテッド・アニメーションをめぐる整理を行った上で、脱物語としてのアニメーション研究を目指すという提言が確認された。（２）は、日本のアニメーションの歴史的記述パートであると規定された。「第二章」においては、現在のアニメーション作成に関わる労働問題が論じられ、所謂ソフトウェア問題に対する批判的検討が行われていることから、現況のかつポリテイカルな問いが提示されていた。そして、「第三章」では戦前の検閲などの問題が、「第四章」では戦後の占領政策との関わりや戦前との連続性について論じられていることが確認された。これらの章の構成は、所謂アナクロニクなものであつて、第二章のアクチュアルな政治的問いを歴史化する批評性を持つており、アニメーションの



政治的文脈化が行われた部分であると評価された。次いで、(3)は、本書の副題に掲げられている文学テキストとアニメーションの往還について、押井守などの具体的な作品を通じ議論されている部分であることが述べられた。とりわけ「第五章」と「第七章」では、小説・映画の固有のメデイウムや映像のデジタル技術に着目した分析から、かかる往還が論じられていることが指摘された。また、本パートの各章に共通する要素は「想像力の伝播」であることが確認された。そして、(4)は、押井守の言説に基づきながら本書をまとめ上げていると論述の方法が見定められた。

次いで、水川は、右の整理に基づき本書全体に関わる方法的問題について、コメントを行った。紙幅の都合上、全てを列挙することはいかないため、そのいくつかを紹介したい。

まず、水川は、アニメーションの歴史的記述と特定の作品を分析する記述が入り交じる本書の論述の戦略に言及した。そしてこの論述Ⅱ戦略が、個々の作品に潜在する政治的問題を活性化させるという意味で政治的であるだけでなく、アニメーションが歴史的な政治的存在であることを明らかにする有益な方法になっていると述べ、アニメーションをダイナミックに政治化させていると評した。また、それは、本書でも参照される大塚英志のスタンスとも響き合うと付言した。次に、本書は日本近代文学研究の成果のひとつと認められるとした上で、アニメーションに固有のメデイウムの問題Ⅱ映像表現上の技術的な問題を議論の中心に位置付けようとしている点で、従来の日本近代文学研究にはほとんど見受けられない新規性を保持していることを指摘した。更に、本書に押井守の言説が数多く引用参照され、一種の理論的装置として機能していることに注目し、それを平倉圭『ゴダールの方法』(インスクリプト二〇一〇)に倣い「押井守の方法」と呼んだ。この「押井守の方法」こそが、宮崎駿中心主義的アニメーション論とは決定的に異なる立場を生み出す源になっており、その点で、本書は大塚および上野俊哉のアニメに関する議論の系列に属すると主張した。

最後に、水川はいくつかの質問を行った。こちらもその一部を紹介しよう。まず、本書を貫くキーワード「想像力」についてである。本書において、想像力は弾力的に使用されている。観客にとってはイメージを読む際の力として示され、また

観客に「伝播」するものとしても記述されている。また、タイトルにもある「アニメーションの「想像力」という表現からはアニメーションが「想像する」という意味も看取できる。これらの「想像力」ということばの位置付けについて、ゴダールの映画の「思考」の問題などが引き合いに出されながら質問がなされた。さらに、本書におけるアニメーションというメディアウムの位置付けが問われた。アニメーションという独自の物理的支持体を指向するのか、あるいは、小説などの往還関係において、そのようなメディアウムの自立性を解体するような存在としてアニメーションを捉えるのか、そして、それが近代文学研究を脱領土化するような運動に進展するのか、禧美（のテクスト）の立場性に踏み込んだ質問が寄せられた。また、映画研究の理論的コンテキストに関わる部分も取り上げられた。特に、本書がしばしば言及する「情動」については、本書の中心的分析装置として援用されたドゥルーズの『シネマ』の理論的布置との関わりや、映画研究およびその隣接領域での「情動」研究との関係性が意識されているのかなどが質問のポイントとなった。

以上の水川のコメントおよび質問を受けて、雨宮は次の二点に関わる発言を行った。まず、第一点目として、本書が「文学的想像力」（中川成美）との関わりを強く持っている点を指摘した。その上で、アニメーションというジャンルが、文学というジャンルと密接な関係を持っているという立脚点に立って、本書の議論が成立していると述べた。この認識を前提にして、雨

宮は、アニメーションが文学以外の表現ジャンルとどのような関係性を結びうるのかを問うた。その際に、先駆的な漫画作家であるロドルフ・テプフェール (Rodolphe Töpffer、一七九九—一八四六) を引き合いに出した。雨宮曰く、テプフェールの漫画作品の中に、モンタージュのイメージの兆しがあることが既に論究されているという。これは、ひとつの表現ジャンルの中に、他の表現ジャンルのイメージが架橋される瞬間があること（禧美のことばでいえば「想像力」の「伝播」の証と言える。これを踏まえて、雨宮は、バンド・デシネを含めた漫画などの隣接ジャンルのイメージが、禧美の「想像力」に関わる理論的立場論的射程にどのように組み込まれているのか/れるのか、そして、なぜ本書では文学的想像力が優先されたのかを挑発的に問いかけた。次いで、本書が戦前のアニメーションの「プロバガンダ」の問題を扱っていることから、それを「情動」と関連させて議論を展開することが可能であるのか、禧美の今後の議論の発展に関わらせながら質問した。

禧美は、以上の聞き手の質問に対して以下の通り応じた。まず、本書において、「想像力」を制作者/作品/観客の間に介在するものとして捉えており、敢えて弾力的に使用したことを述べた。その上で、本書における「想像力」が持つ批評的ポイントを次のように解説した。まず、日本の「リミテッド・アニメ」が、イメージネーションを駆使しての観客の参入を求めるものであることから、イメージとイメージとの「間隙」を読む際

の観客の「力」が、「想像力」の含意の核にあると説明された。そして、複数のレイヤーのコンポジティングによってアニメーションが独自の「運動」を生み出すことが重要であることを再確認し、ゴダールの「映画が思考する」というテーゼに倣って、「アニメーションは新たなイメージを想像する」と定言的に述べた。映画がそのイメージによって、通常では思考し得ないものを思考する契機を観客に与えるように、アニメーションは、その独自の「運動」のイメージから、想像し得ないものを想像し思考する契機を観客に与えるとした。

次いで、隣接ジャンルの問題に関して、嬉美は、『鉄腕アトム』から始まった日本のテレビアニメがその問題の中心にあると述べた。まず、一般論的なレベルで、そもそも日本のテレビアニメが、記号的表現のイメージなど、隣接ジャンルとしての漫画とは切っても切り離せないものであることが確認された。そして、本書でも言及したが、手塚治虫自身が「物語を補足するためのアニメーションであればいい」と語ったように、フルアニメーションのような滑らかな「動き」で魅せることを諦め、(コマ割り漫画同様に)「物語」を語ることを追求してきたジャンルでもあることを強調した。この「アニメ」と「物語」の不即不離の関係を基点に、日本のアニメーションをめぐる文脈を「想像力」の「伝播」という観点から検討したのが、本書であると説明した。また、この見立ては、押井守がアニメーション・実写・小説・演劇とジャンル横断的に創作を続けていることにイ

ンスパイアされたものであると、論述の意図が明らかにされた。最後に、「情動」の問題に関しては、ドゥルーズの感覚運動図式やバラージュのクロスアップ理論など、映画研究の成果を参照したが、生身の役者の演技を切り取る実写映画とは差異があるため、分析の際に直接援用できた作品は限られていると回答した。ただし、制作過程のデジタル化によって、もはや「実写」映画もコマとコマの「つなぎ」だけでなく、複数のレイヤーのコンポジティングが重要な表現上の位置を占める状況に至っていると指摘し、このようなポストメディアウム状況に沿って、自身の研究を展開していく必要性があることを述べた。

以上のような応答があった後、議論は会場全体に開かれた。会場からは、作家や制作に直接関わった人々の証言と如何に連携を図るのかなど、研究の立場性の問題にまで踏み込んだ展開となり、議論が練り上げられた。

【付記】本テキストを執筆するにおいて、嬉美智章氏からご自身の発言について、概念の理解や表記などについて詳細にご教示いただいた。記して感謝申し上げます。

■書評

TOSAKA JUN : A CRITICAL READER (ed: Ken C. Kawashima, Fabian Schafer, Robert Stolz, Cornel East Asia Series 168, Cornell University, 2013)

雨宮幸明

一九三〇年代に活躍した哲学者、戸坂潤の著作および翻訳と、その哲学的業績を問い直す研究論文が一冊に収められた『TOSAKA JUN: A CRITICAL READER』が、二〇一三年にコーネル大学“Cornel East Asia Series”より刊行された。戸坂潤哲学の研究史において、戦後一九四八年に三一書房より刊行された追悼録『回想の戸坂潤』以来の、複数執筆者による公刊論文集として実に六五年ぶりの刊行である。¹⁾

戸坂潤の著作で最も有名なものは『日本イデオロギー論』(白揚社、一九三五年)であるといえる。戸坂潤はこの単著に収録された論説を、一九三〇年代の大衆社

会に密着しながら、まるで日々の出来事

を書きとどめていくように新聞や雑誌に書いた。『日本イデオロギー論』では特に日本主義という明確な概念が与えられていないプロパガンダ思想を詳細に検証し、日本主義の名のもとに日本という国民国家へすべての権力を集約させようとした政治的言説を徹底的に批判している。戸坂は友人たちと唯物論研究会を組織し生活と哲学の融合を目指したが、治安維持法により一九三八年に検挙され執筆禁止を命じられたまま、その後に投獄され一九四五年に獄死している。本書はそのような戸坂潤の哲学を再検証するものだが、二つの刊行意義を挙げ

ることができる。第一の意義として、ハルトゥーニアン(H. D. Harootunian)『近代による超克』(岩波書店、二〇〇七年、原著“Overcome by Modernity” Princeton University Press, 2001)によって英語圏にその概要が紹介された戸坂潤の哲学的著作が、今回の翻訳によって一般の英語圏読者にも容易に読まれるようになったことである。

もう一つの意義は研究論文が併録されていることが挙げられる。先述の『回想の戸坂潤』が獄死した戸坂潤を悼む趣旨のもとで編纂された追悼録であり、戸坂潤哲学自体の検証がされなかったことを考えると、本書は単なる翻訳書ではない総合的な研究書となっている。おそらくは戸坂潤の哲学を主題とした世界で最初の批評論集の出版となる。

本書は二部構成となっており、第一部「著作」“The Texts”では複数の翻訳者による戸坂潤の代表的な哲学著作十編の翻訳がまとめられ、第二部「批評」“Critical Expansions”では気鋭の研究

者たちによる七編の戸坂潤哲学に関する研究論文が収録されている。第一部の翻訳者の内、数人が第二部の研究論文執筆を兼務しており、習熟した翻訳と研究の統合的な成果が、各自の問題設定による問いを生み出し、本書全体へと展開していることがわかる。戸坂潤哲学を初めて読む読者にも、「著作」のガイドとして収録された「批評」がその読解を深める構成となっている。

本書の編集はケン・C・カワシマ (Ken C. Kawashima)、ファビアン・シェイファー (Fabian Schaefer)、ロバート・ストルツ (Robert Stolz) の三人の研究者が担当している。巻頭の「序」“Preface”では、まず戸坂潤が西欧の日本学及び哲学研究において不当な忘却に晒されている現状が指摘され、その改善が本書刊行の目的であることが示される。その理由として、戸坂のカントとマルクスを融合させた独自の思想が、グラムシ、ネグリ、ジジェクといった同時代から現代までの西欧マルクス主義哲学の影響を受けた思

想家たちと共通点を持つことと、戸坂潤の哲学が現代社会への批評と分析に有効な思想であることが主張されている。「未訳の著作と新たな論考を一つにしたこの本で戸坂が主要な唯物論哲学者であり批評家であることを明らかにしたい」と編集者たちの意気込みが示され、翻訳と収録論文の簡単な解説がまとめられている。続く「導入 生きられた瞬間の暗闇」

“Introduction The Darkness of the Lived Moment”ではアメリカにおける戸坂潤研究の第一人者であるハルトウーニアンが、戸坂潤の生涯とその哲学の重要性を物語る。特に戸坂の思想的先達であった西田幾多郎と三木清との思想的な差異が丁寧な検証によつて浮き彫りにされていく。その作業は戸坂潤の唯物論哲学がいかに同時代の西田や三木らと異なり、厳密な論理性と社会性を備えていたかを教えてくれるものであり、過酷な弾圧による執筆禁止や獄死に至るまでの戸坂潤の思想的背景をわかりやすく示す導入部となっている。

本編の前半となる第一部における「著作」では、精選翻訳された著作が紙面の許す限り収録され、戸坂潤哲学のエンサイクロペディア的な側面を示すことに成功している。例えば戸坂潤哲学の特徴とされる「日常性」を概念化した重要な論文「日常性の原理と歴史的時間」や、本書に収録された研究でもアンリ・ルフェーブルとの関連が指摘される「空間論」をはじめ、笑いの構造を解き明かす「笑い・喜劇・及びユーモア」など、その思想の多様性が示されている。

具体的には以下の十編が収録されている。「日常性の原理と歴史的時間」、「空間論」(抄訳)、「アカデミーとジャーナリズム」、「笑い・喜劇・及びユーモア」、「日本主義の帰趨」、「インテリゲンチヤ論と技術論」、「自由主義哲学と唯物論」、「警察機能」、「映画の写実的特性と風俗性及び大衆性」、「映画芸術と映画」。いずれの翻訳も勁草書房版『戸坂潤全集』(一九六六―六七年、別巻七九年)を底本にしている。英語を専門としない私にはと

ても判断がつくものではないが、素直に翻訳を読む限りでは全体的に原文における戸坂潤の厳密な論理性を損なうことなく翻訳を成功させているように思われる。

次に本編の後半、第二部「批評」に収録された研究論文について以下に執筆者と論考の簡単な概要を紹介したい。

ロバート・ストルツ“Here, Now”は、戸坂の重要な哲学概念である「日常性」を論じている。ストルツはカント、ハイデガー、ベルクソンと戸坂の思想的関わりを検証しながら、戸坂の「日常性」が物質的な時空間を基礎とした歴史的な概念であることを説明し、そのことが戸坂の批評に現実的な歴史性を備えさせ、同時代の西田幾多郎や和辻哲郎、フアシズムの言説における歴史的な空虚さを暴露する機能を得たことをストルツは証明していく。難解だが戸坂潤の思想が持つ批評性が、表題にあるように「今ここ」という現実的な時空間に基底を持つ歴史的側面にあることを示しており、非常に刺激的な論文であるといえる。

ファビアン・シェイファー“*The Actuality of Journalism and the possibility of Everyday Critique*”は、フランクフルト学派やタルド、ベンヤミンの思想や山川均、福本和夫、ローザ・ルクセンブルクなどのプロレタリア組織論との関わりから、戸坂潤のもう一つの主著『思想と風俗』（三笠書房、一九三六年）における風俗分析によって戸坂の多様な社会批評が可能となるまでの経緯を解説し、戸坂潤哲学の主軸にマスメディアと報道を重視したジャーナリズムの思想があることを論じている。

平野克弥 (Katsuya Hirano) “*The Dialectic of Laughter and Tosaka's Critical Theory*”は、戸坂の笑いについて書かれたエッセイを詳細に分析している。戸坂の『道徳の観念』『道徳論』『三笠書房、一九三六年』と『思想と風俗』を用いながら、ベルクソンの『笑い』（岩波文庫、一九七六年、原著“*Le rire*”, Alean, 1900）、アルチュセールの重層的決定性、ヴォロシノフの言語論、フレデ

リック・ジェイムソンのポストモダンニズム論まで多様な理論を参照し戸坂における「笑い」の両義性を追究している。

樹本健 (Takeshi Kimoto) “*Immaterial Technique and Mass Intelligence*”は、ポスト・フォードイズム時代における知性労働と技術論を提唱したパオロ・ヴィルノやアントニオ・ネグリの「一般知性」論と、戸坂の技術論及び「インテリゲンチヤ」による知的労働を含めた労働理論との、親縁性や先駆性を検証している。

ギャビン・ウォーカー (Gavin Walker) “*Filmic Materiality and Historical Materialism*”は『思想と風俗』に残された戸坂の映画論を検証している。戸坂は特に社会風俗の物質的な再現性を可能にする映画の写真的な実写性と映像の動きそのものを評価したが、本論は多様な映画理論とドゥルーズ、タルド、ベンヤミンなどを参照し、戸坂の映画論の根底に史的唯物論と表象への厳密な思想的試みがあることを検証していく。戸坂の友人でもあった中井正一や能勢克男、唯

物論研究会などで交流があった岩崎昶や上野耕三ら、戸坂の周辺に存在した同時代の映画言説の広がりを考える上でも非常に刺激的な論文である。

ケン・C・カワシマ“Notes Toward a Critical Analysis of Chronic Recession and Ideology”は、ロシア革命、米騒動、植民地期朝鮮における独立運動など、二〇世紀における群衆の時代の到来と、それに対応した日本の明治以降の近代的警察国家への移行を背景に、一九三〇年代後期の戸坂潤による警察権力への論考をもとにした戸坂の暴力批判論を展開している。

カツヒコ・エンドウ (Katsuhiko Endo) “The Multitude and Holy Family”は、一九三〇年代の戦線拡張的な軍部ファシズムと金融資本主義との協調的發展と、自由主義や家族主義にみられる文化現象との、同時代的な運動性を批判した戸坂潤の思想を、宇野弘蔵、河合栄治郎、浅田彰の理論を参照し現代のネオリベラリズムとも関連させて分析している。

全体を通じて批評用語を駆使した難解な分析が多い印象を受けるが、それらを乗り越えて各論文を精読していくと、すべての論考が独自の視点から戸坂潤の新たな魅力を提示していることに驚く。戸坂潤哲学の現代性をここまで徹底して考えつくした論考が集成されている様子は圧巻である。ここに収められた論考から各自の戸坂潤哲学の読解が深められていくことは間違いない。

ただ気になることは、アメリカにおける戸坂潤研究の高まりと並行して進展してきた近年における日本の戸坂潤研究の成果とその受容である。日本において戸坂潤の研究は戦後占領下での伊藤書店版『戸坂潤選集』（一九四六―四九年）と追悼録の刊行を経て、一九六〇年代において鶴見俊輔らの評価を反映し、ほぼすべての著作が収録された勁草書房版『戸坂潤全集』が刊行されることで、その基礎が築かれたといえる。しかしその後はテキストの充実と共にさらなる思想的検証が期待されつつも、一九七〇年代末頃から

一九八〇年代末頃まで活発な研究書の刊行などは確認できない状況が続いた。再評価はソヴィエト崩壊期以降における戸坂潤の著作復刻と、その現代性を問いつつ新たな研究によってもたらされた。そのすべてを紹介することはできないが、一例を挙げれば林淑美『昭和イデオロギー』（平凡社、二〇〇五年）では戸坂の『思想と風俗』における「制度習得感」とアルチュセール「国家のイデオロギー装置」論との親縁性が検証され、「社会的諸関係の再生産の分析を明瞭に行っている」（林淑美）と戸坂潤の先駆性が示されたことに研究の着実な進展が確認される。他にも今井伸英、小泉義之、津田雅夫らの意欲的な哲学的研究や資料復刻・伝記研究が発表され、戸坂潤研究の新たな発展が蓄積されつつあるといえる。²⁾

しかし、今回のアメリカにおける最新の研究書として、本書の各論考での先行研究への言及や引用を見る限り、これら近年の日本の研究蓄積が本書と十分な学術的関係を築いているようには思えない。

このことは日本の近年の研究においても同様に指摘できることであり、例えば日本の近代思想史研究に刺激を与えたハルトゥーニアン³の戸坂潤論をはじめとした海外の諸研究についても、簡単な研究紹介や先述した今井伸英などによる補足的な言及はあっても、十分な学術的な検証はあまり見当たらないのが現状である。

もちろん本書だけで日米の研究状況を正確に判断することはできないが、本書の刊行ははからずも日米における戸坂潤研究の在り方に疑問を提示するように思える。世界中の研究者が戸坂潤という同じテキストを、いかに共有して研究しているかが問われ始めていくといえるだろう。

もう一つ、個人的な関心からは、戸坂潤が提示した道徳・モラルの哲学的考察に関して、本書ではこれらを適切に解説しながらも、その可能性を問い直す論考が少なく気がになった。本書の刊行後のものになるが、最近の研究では平子友長がこの領域に新たな論考を提出している³。平子は戸坂のモラル論を「社会

科学的概念によってイデオロギーとして把握されたモラルを、他ならぬ自分一身のモラルとして身体化（感応化、感覚化）させた（身につけた）モラル」と要約しているが、この戸坂のモラル論の意義を最も深く教えてくれた思想家は、私にとつてはエドワード・サイードであった。戸坂潤が『道徳の観念』でモラルの概念を提示した「社会の問題が身についた形で提出され、自分一身上の独特な形態として解決されねばならぬということ」という言葉の意味がはつきりと分かったのは、サイードが自分自身と失われた祖国の問題をルポルタージュ的に著した『パレスチナとは何か』（岩波現代文庫、二〇〇五年、原著“After the Last Sky” Pantheon Books, 1986）を読んだ時である。それまで『オリエンタリズム』（平凡社ライブラリー、一九九三年、原著“Orientalism” Routledge & Kegan Paul Ltd, 1978）をポストコロニアリズムの理論書としてしか読んでいなかった私にとつて、サイードが一貫して書き続けて

いたものが自分という「一身上の問題」としての彼と他者をつなぐ社会への批評であつたということをその時にようやく理解できたように思う。戸坂を通してサイードを、サイードを通して戸坂を読むことで、両者が現実的な世界のあくどさや強大さに対して、自分だけの立場から自分の問題として日常の場面から具体的な事物に参与することが、モラルを持つ普遍的な手続きであると教えてくれたように私は思う。今後の研究において戸坂潤の批評家としての側面と共に、その原動力であつた彼のモラル論がより多角的に検証されることを希望したい。

以上のように、一九三〇年代におけるファシズムの時代を批判し続けた戸坂潤の哲学を、現代において国際的にも国内的にも深く読み直す触発物として、本書が示す高度な学術的達成を無視することはできないといえる。本書の「序」や「導入」、第二部「批評」に収録された論考は日本でもすぐに翻訳刊行されるべきものであり、また本書が契機となり戸坂潤

哲学を検証する新たな研究がさらに現れることを願いたい。

最後に、「最も根本的な存在は交渉的存在である」とし「この存在である吾々が又一つの存在に出逢う」ことで「存在が存在を理解し得る」『科学方法論』岩波書店、一九二九年」と、過去に希望を持って執筆した戸坂潤と、「自分」という個々の諸状況において各自の「一身上の問題」を問いつける現代の読者とが、刺激的な批評論集である本書によって新たに会えることを期待したい。

注

(1) 二〇一五年現在、公刊論文集という出版以外では、雑誌における戸坂潤特集号として以下の二誌がある。

「戸坂潤特集」『信州白樺』一九八五年一〇月号、「小特集 戸坂潤生誕一〇〇年」『唯物論と現代』二〇〇一年五月号。また、近年における他言語への戸坂潤著作の翻訳には以下の三誌がある。(英語

翻訳) Robert Stolz “Nichijosei no genri to rekishiteki jikan : The principle of everydayness & historical time” in From Japan’s modernity : a reader, ed. Tetsuo Najita (University of Chicago, 2002) / (ドイツ語翻訳) Fabian Schafer, “Tosaka Jun : Ideologie-Medien-Alltag”, (Leipziger Universitätsverlg, 2011) / (フランス語翻訳) Yoshinori Tsuzaki “L’espace en tant que caractère : aperçu de la théorie”, Philosophie japonaise (Vrin, 2013)

(2) 一九八九年以降の日本における主な戸坂潤研究として、以下のものを挙げる。
〈著作復刻〉

小川晴久解説『認識論』青木書店、一九八九年／芝田進午解説『科学論』青木書店、一九八九年／芝田進午他編『科学論』久山社、一九九〇年／芝田進午他編『道徳論』久山社、一九九〇年／川端俊英解説『思想としての文学』

日本図書センター、一九九二年／林淑美解説『思想と風俗』平凡社、二〇〇一年／吉田傑俊編『戸坂潤の哲学』こぶし書房、二〇〇一年／林淑美校訂『増補 世界の一環としての日本』全二巻、平凡社、二〇〇六年／『日本の哲学という魔』書肆心水、二〇〇七年／『イデオロギーとロジック』書肆心水、二〇〇七年／吉見俊哉監修『唯物論研究「選」』日本図書センター、二〇一一年／渋谷一夫・北林雅洋解説『唯研ニュース』不二出版、二〇一二年／北林雅洋編『戸坂潤全集未収録論文集』こぶし書房、二〇一六年

〈研究書・論文・批評・対談〉

山田洸『戸坂潤とその時代』花伝社、一九九〇年／鈴木正他編『近代日本の哲学者』北樹出版、一九九〇年／粟津啓有『戸坂家の文学』北國新聞社、一九九四年／今井伸英『丸山眞男と戸坂潤』論創社、二〇〇〇年／中川成美『近代化主義』というカノン』『日本文学』二〇〇〇年一二月号／古在由重・

丸山眞男『暗き時代の抵抗者たち』同時代社、二〇〇一年／上田浩「戸坂潤の道徳論と現代」『唯物論と現代』

二〇〇一年五月号）／岩崎允胤「唯物論研究会を中心とする戦前（戦中）の唯物論哲学」『唯物論と現代』二〇〇一年五月号）／藤田正勝編『京都学派の哲学』昭和堂、二〇〇一年／渋谷一夫「唯物論研究会の歴史」『サジアトーレ』

三二号／三八号、二〇〇三年／二〇〇九年）／林淑美『昭和イデオロギー』平凡社、二〇〇五年／小泉義之「直観空間と脳空間」『現代思想』二〇〇六年七月号）／北林雅洋「戸坂潤の『全集』未収録文献22編の発見」『科学史研究』二〇〇六年九月号）／井筒満「日中戦争下における芸術認識論の探究」『文学と教育』二〇〇七年八月号、十一月号）／後藤嘉宏「戸坂潤の常識概念と、三木清」『図書館情報メディア研究』二〇〇八年三月号）／中島隆博「日本思想を世界に返す」『U P』二〇〇九年八月号）／津田雅夫『戸坂潤と（昭

和イデオロギー』同時代社、二〇〇九年／岩倉博『ある戦時下の抵抗』花伝社、二〇一五年

また、海外戸坂潤研究の翻訳書としてハルトゥーニアン以下の著作を挙げる。

『近代による超克』全二巻、岩波書店、二〇〇七年／『歴史と記憶の抗争』み

すず書房、二〇一〇年／『歴史の不穏』こぶし書房、二〇一一年

（3）平子友長「戸坂潤における実践的唯物論構想」『思想間の対話』法政大学出版局、二〇一五年

竹内栄美子著『中野重治と戦後文化運動 デモクラシーのために』

村田 裕和

すぐれた知性は、己の弱点や過ちと向き合うことから生まれてくるだろう。

もし、中野重治が弱さや過ちのないまっきた正義の人だったとすれば、人々は彼を信じ、頼みとする気持ちにはなれなかったにちがいない。だが本書は、必ずしも中野重治の限界を語ろうとするものではない。

本書は全一五章（三部立て）となっている。第一部「プロレタリア文学を再読する」（第一―三章）では、中野重治を参照しつつ、プロレタリア文学の現代的意義が考察されている。第二部「ジェンダー・階級・民衆」（第四―八章）では、一九三〇年代の小林多喜二、松田解子、一九五〇年代の佐多稲子、山代巴の小説や書簡が具体的に分析されている。戦前

と戦後の文化運動が、とりわけジェンダーの視点から検証されている。

つづく第三部「中野重治と戦後文化運動」（第九―一五章）では、まず第一二章までで「文連」（日本民主主義文化連盟）やサークル詩運動、『松川詩集』などが中野重治との関わりを中心に論じられている。「戦後文化運動」と中野重治との関係を論じるのは主としてこの部分である。第一章からは、小説「おどる男」「軍楽」、戦時下の全集未収録文「ハイネの文章」、そして『鷗外その側面』の具体的な分析が行われている。

第一部第三章では、アナキズムの視点からプロレタリア文学史が再考されており、私はとりわけ興味を持った。本書はアナキズムとの関係についてそれほど多

くの言及があるわけではないが、あとがきによれば、アナキズムについて書かれた第三章は一番新しい論文であり、震災後の「いま現在の問題」として考えたところ。中野重治の持続的な読者としての著者が、今もつとも重要な関心事の一つとしてアナキズムと向き合っている。中野重治研究の延長においてアナキズムと出会うということは、当たり前道筋ではない。なぜなら、他ならぬ中野重治こそが、アナキズムとの出会いをばむ大きな壁だからだ。このことは、著者にとつての中野重治が、現実的な課題と向き合う際の支えであると同時に、最大の格闘相手でもあることを示している。本書は、中野重治およびプロレタリア文学の単なる再読を促しているのではなく、あたう限りの批判的検討を行った上で、現代社会の諸矛盾に向けてテキストを再起動させようとしているように思われる。

*

東日本大震災の地震そのものは偶然だとしても、そのことによって噴出した問

題の多くは、実はこの十年間著者が考えてきたものと根底においてつながっている。貧困の問題、都市と地方との格差、労働や家庭生活における男女の不均衡、これらの課題は、プロレタリア文学や戦後の文化運動の時代から途切れることなく続いている。原発はこの地域間および地域内格差の構造を固定化し維持する強力な再生産装置である。さらにいえば、原発は軍隊と同じく、労働におけるジェンダー規範を象徴的に示している。問題は、表面的な「男女比」などではない。社会的な構造と、私たちの意識の結びつき方、そして日常における生活実践。それらがどのように関係づけられているかを認識することだ。

プロレタリア文学は、たしかに貧困や差別と闘った。経済的・階級的な格差について、それを自己責任に帰すのではなく、社会の構造に目を向けるよう促した。しかし、マルクス主義的立場に立つ人々は、その目的の正しさの前で個の自由を犠牲にしてきた側面もあった。中央から

地方へ、指導部から細胞へと組織されたピラミッドを作り、この機構を成長させることが目的化してしまった。また、工場を労働者自身の手に取り戻すための闘争であるから、労働者自身の存在基盤でもある工場を、ひいては科学技術そのものを倫理的に問い直す視点は特に戦前にはほとんど見られない。むしろ科学こそが、人間を貧困や階級差別から解放するはずだった。

時代的制約というひと言で片付けられるものではないが、そこには私たちが振り返って見つめ直すべき問題がいくつもあるだろう。それでもなお——研究的な視点を離れても——プロレタリア文学は現在読むべきテキストなのか。本書のあとがきでは、原発に対する中野重治の沈黙ないし無関心について言及されている。中野が亡くなる約五ヶ月前にはスリーマイル島の原発事故も起こっている。また著者の言うように、中野と同じ福井県出身の水上勉は、原発が地域の文化や家族の繋がりを破壊することを繰り返し書いた

ていた。中野が語らなかったことについて、語らなかつたということの問題とすることの困難さを承知で、著者は問うている。著者の意図は、中野を合わせ鏡として私たち自身を問い直すところにある。

*

中野とアナキズムの関係を振り返ることとは、遠回りかもしれないが、このような課題に近づくための大切なステップなのである。拙論「交差する詩精神」(『論究日本文学』二〇〇九年五月)に一度書いたことがあるが、中野重治のアナキズム詩人に対する批判として有名な評論「詩に関する二三の断片」(『驢馬』一九二六年六月)の中の「叫喚詩派あるいは騒音詩派」や「革命の本質的なダイナミズム」といった文句は、前者はトロツキーの『文学と革命』(邦訳一九二五年)、後者はルナチャルスキーの『新芸術論』(邦訳一九二五年)をふまえている。この頃の『文芸戦線』には形だけを模倣したような前衛詩が溢れており、中野の批判はそうした模倣詩の中から萩原恭次郎や岡本潤を

すくい上げる意味もあったのだろう。しかしその詩人としての直感は、ソビエト文芸理論家の言葉によって補強されていた。

ここで私が想起するのは、中野の自伝的小説『むらぎも』（一九五四年）の末尾の場面である。本郷の下宿から出かけた主人公の大学生安吉は、白山の南天堂書店の前をよぎり、「行つてみていいナ」と思う。南天堂は当時実際に存在しアナキズム系の芸術家たちのたまり場として勇名を馳せていた書店・レストランである（寺島珠雄『南天堂——松岡虎王鷹の正・昭和』が詳しい）。しかし安吉はそれを意識しながらも南天堂に入らない。このすれ違いを中野は象徴的に描いている。一九二〇年代の半ばころにこのようなニアミスがあつたことを思い出し、小説化せずにはいられない中野が、一九五〇年代に居たのである。

一九三〇年代の文化運動は、本書の中でも繰り返し指摘されているとおり、共産党の指導下に置かれ、その合法面の傀

儡機関と化してしまった。そして戦後の文連も同じ轍を踏んだ。著者のいうように、「詩に関する二三の断片」は岡本潤との差異を際立たせる中野の高さを示すものでありながら、しかしそれゆえに、私には、中野のその後の歩みをより困難なものにするものが、そこにはすでにきざしていたように感じられる。

*

中野重治を扱う第三部は、二つの点で前半の第一部・第二部と共通している。一つは、中野重治を中心化するのではなく、文化運動を主として、その中での中野重治の立ち位置を示すような論じ方である。もう一つは、一九三〇年代と五〇年代の文化運動を批判的に架橋する試みである。

中野の歩みに即して時系列に沿って理解するためには、著者の『戦後日本、中野重治という良心』（二〇〇九年）を併せ読むとわかりやすい。二つを対にして読むことで、著者の主張はより立体的に理解できるだろう。だが本書に限って言え

ば、中野が果たした役割は高く評価されているものの、同時に、文化運動の〈矛盾の体現者〉としての姿があまり出されているように見える。

第九章「戦後文化運動における中野重治——日本民主主義文化連盟のなかで」では、文連（日本民主主義文化連盟）との関わりが論じられている。文連の加盟団体には「民主主義科学者協会」や「新日本文学会」から「民主紙芝居人集団」「民主保育連盟」まであり、戦前の「コップ」（日本プロレタリア文化聯盟）の拡大版のような大所帯である。その上、地方協議会には二七〇の団体が登録されていたという。加盟団体名の多くには「協会」や「連盟」と付いているから、そこにはさらに下部の参加団体があつたはずである。こうしたピラミッド構造が、文化・芸術の領域ごとに組み立てられ、さらに中央と地方の関係にもあつた。二重のピラミッド構造である。生身の人間が、このような巨大組織を有効に機能させるのはたやすいことではない。

＊

中野は新日本文学会や議員活動、執筆・講演などに多忙な中で、創立時の理事長の他、一九四七年の第一回全日本民主主義文化会議での一般報告や、議長の仕事、一九四九年の再建委員会の委員長などに尽力している。特に、一九四八年の朝鮮人学校閉鎖問題における文連および中野の取り組みは重要だが、こうした中野の努力が語られる一方で、文連それ自体は、東京だけの「頭でっかちの組織」（二〇八頁）だったことが当事者の証言によって示されている。

第一〇章「戦後文化運動と文連地方協議会」では、「文連地方協議会」が採り上げられ、戦前から大阪で左翼演劇に関わってきた北野照雄に言及されている。北野は後年になってから、戦前の多種多様なサークルがコップ時代になって行き詰まったと回想しているが、敗戦直後の文連は、こうした反省をふまえずに党の指導で作られ、北野や中野らによって担われたものだった。文連という組織形態

＊

の問題は、「複雑でそれぞれ特徴ある個々の運動体を統一組織に一本化しようとしたこのような戦前の問題と驚くほど似通っていた」（二六四頁）と著者は指摘している。このことは北野や中野の意識が、命がけで没頭した大阪戦旗座や作家同盟の時間をいまだに生き続けていたことの証でもあるだろう。それが彼らの青年期と重なるものであればなおさらだ。これから創立される新日本文学会のことを佐多稲子が「作家同盟」と呼んでいたエピソードが紹介されているが、その名前が彼らにとつてどれほど誇らしく輝かしいものであったかは想像に余りある。こうした意識の連続性ゆえに戦後の運動は困難さを増したのである。しかし、「マイナス点は限界として認めつつ」、「意欲ある人々の潜在的な可能性のうながしに寄与したことは疑い得ない」（二六五頁）と著者は言う。やや穿った見方をすれば、戦後の人々に、もはやコップは必要ないと気付かせることこそが文連の最大の役割だったのかもしれない。

第一章「戦後文化運動と詩誌『列島』」では、サークル誌運動を推進した詩誌『列島』が論じられている。ここでは「類型化された反権力的言辞」（二七四頁）に陥っていたナツプ世代に対して、「ユーモアと諧謔、哄笑」を打ち出した「列島」の関根弘に焦点が当てられている。直接に中野を論じているわけではないが、読者は必然的に中野たち戦前世代と、彼らが築いたものを乗り越えようとしている若い詩人たちとを対比的に見ることとなる。

前掲『戦後日本、中野重治という良心』で詳述されているように、中野は戦後のサークル詩に無関心だったわけではない（たとえば一九五二年の『祖国の砂』刊行）。第二章「中野重治と『松川詩集』」は、サークル詩運動そのものではないにせよ、中野が継続的に松川事件に関心を寄せていたことが示されていて、「社会構造の矛盾を批判する詩や政治運動に結びつくアクチュアルな問題を取り上げた詩」（三二三頁）としての『松川詩集』が、

サークル詩と同じく「運動」の中から生まれたことが確認されている。ただ、これらの章から受ける中野重治の印象は両義的である。新日本文学会での活動も含めて、膨大なエネルギーを文化運動に注いでいるが、彼自身の職責とそこでの働きは、時として政治に従属する文学（芸術）の温存に力を貸しているからだ。

ここまで読んできてようやく私は、本書の第Ⅱ部が中野ではなく女性作家たちに焦点が当てられている理由を悟らされたような気がした。山代巴を論じた第八章では、いち早く山代の作品を評価した中野について、「運動に内在する問題点を、戦後の出発期に提示することができたのは、文化運動の内部では、芸術大衆化論争に破れた中野重治しかいなかったと私は思うが、当時の中野にはそれができなかった」（二八四頁）とされている。

一方、山代については、「民衆とともにあり、つねに運動を推進しつつ、その運動のなから書くべきことを見出して書き続けていった作家であった」（二三八

頁）とされている。山代をはじめとして、女性作家たちの描く物語は、男性運動家によつて虐げられる女性や、労働運動の範疇から取りこぼされてきた農村女性たちを描くことで、文化運動が疎外しつけてきたものに光を当ててきた。そこでは、政治に従属する文化運動に対する根源的な批判が提示されていたのである。

山代の「露のとう」（『大衆クラブ』一九四八年三月）は、無名の女性のエピソードを、どこにでも起こりうる「あなた」の物語として語ろうとするものだという（一七九頁）。彼女たちの作品は、戦前も戦後も、差別や貧困の問題だけではなく、男たちが主導していた階級闘争や文化運動そのものの死角を女性の立場から照らし出している。

戦前の文化運動におけるジェンダー規範は一般社会と何ら変わることがなく、労働運動における党とサークルとの抑圧的な関係に複雑に絡み合つて構造化されていた。それらが別々の問題でないことは、多喜二の『党生活者』（一九三三年）

をみれば明らかである。戦前の中野の詩「今夜俺はお前の寝息を聞いてやる」では、田口タキに対する小林多喜二のように、女性を導く男性運動家という主体性が強調されていたが、そのことは共産主義者としての自覚と別のものではなかった。

本書の最後で一九四〇年代の中野が採り上げられねばならない理由はここにあるだろう。中野は、森鷗外が嫁姑の確執をテーマとした「半日」を一九四四年春に全文筆写している。著者によれば、ゲーテにとつてのクライスト的なものが鷗外の晩年に現れかけていたと中野は考えていたようだ（三七六頁）。クライスト的なものとは、若き時代に克服しようと努力した破滅的な性格であるが、克服したと思つても結局は逃れきることのできないものとされている。鷗外におけるそれが何であるかも興味深いが、中野にとつてのそれもまたきわめて興味深い。

家の論理・国家の論理の中で見失いそうになる芸術家としての信念を、中野は

鷗外の「半日」に読んだ。だとすれば森鷗外を「救拔」することは、中野自身を救拔することでもあったのだらう。それでも戦後の中野は、当然のごとく黨員芸術家という道を選んだ。中野が芸術大衆化論争から導いた結論は、文化運動の〈矛盾の体現者〉としての自己を引き受けて生きるということだったのかもしれない。私は主観や憶測を交えすぎた。しかし本書が、困難な文化運動にそれぞれの仕方方で立ち向かった人々に深く敬意を払い、そこから何かを学ぼうとする人々のための書であることは間違いない。

*

なお本書には以下の全集未収録文が収められている。

- ・中野重治「(第一回全日本民主主義文化会議 第一部 1 終戦後における文化動向に関する一般報告) A 芸術文化」『人民文化の建設』所収、日本民主主義文化連盟発行、一九四七年) * 演説であるため全集に採録されなかった。
- ・中野重治「有罪か無罪か」『松川詩集』

所収、宝文館発行、一九五四年) * 「われわれ自身のなかの一つの捨ておけぬ状態について」『新日本文学』一九五四年一月(三月)の一部抜粋再録。

・中野重治「ハイネの文章」『創元』第二号、一九四〇年三月) * 創元社PR誌。

(論創社 二〇一五年一〇月三〇日刊
四〇五頁 三八〇〇円+税)

■新刊紹介

黄霊芝著／下岡友加編

『戦後台湾の日本語文学』

黄霊芝小説選2

戦後台湾で六十年以上にわたり日本語で創作を行ってきた黄霊芝（一九二八～）の作品集である。一冊目は二〇一二年に刊行されており、この二冊目には小説七編、童話四編と自選俳句百句が収められている。

目次

- 「はじめに」（下岡友加）
- 「竜宮翁戒貝」
- 「ふうちゃん」
- 「台湾玉賈伝」
- 「蛇」
- 「喫茶店「青い鳥」」
- 「花子」
- 「五郎の日記」
- 「名画」
- 「聖」
- 「男耕女織」

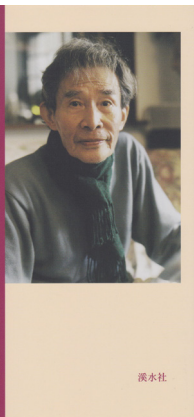
「ユートピア」

「俳句自選百句」

「解題」

私たちは安易に「日本語文学の可能性」などを語るべきではないだろう。下岡氏は著者黄霊芝の言葉を引きつつ「国境とはかわりなく、読者の心を動かす普遍性を黄は求めてきた」と述べ、そこにいかなる実が宿るかは自分の目で確かめよと読者に語りかけている。下岡氏の持続的な黄霊芝研究のエネルギーはこれからもたゆまず続くだろう。

関心のある方は『フェンスレス』第二号の下岡論もご覧いただきたい（オンライン版公開中）。



（二〇一五年六月 溪水社 二二一頁 定価
二〇〇〇円＋税）

■新刊紹介

田中英夫著 『損をしてでも良書を出す・ある出版人の生涯 洛陽堂河本亀之助小伝』

目次

- 一章 離郷
- 二章 印刷業
- 三章 洛陽堂草創期 一九〇九年～一九一二年
- 四章 俊三と千代田印刷所 一九一二年～一九一三年
- 五章 洛陽堂印刷所改称以後 一九一四年～一九一六年
- 六章 雑誌経営の転記 一九一七年～一九一八年
- 七章 亀之助経営の最後 一九一九年～一九二〇年
- 八章 歿後

大正時代の歴史や文化に関心のある人なら何度も目にしているはずの洛陽堂。この出版社がなければ大正時代の文化地

図はまったく別のものとなっていたはずである。にもかかわらずほとんど誰も河本亀之助を知らずにいた。大逆事件を生き延びた西川光二郎、山口孤剣に次いで著者三人目の評伝である。ここにも「大逆以後」の生を、その生涯の最後まで追い求める姿勢は貫かれている。著者は調査や執筆の進行状況を逐次手製の『洛陽堂雑記』（全32冊）にまとめ、配布されてきた。その徹底した調査も電話帳との格闘から始まったという。評伝の鬼に魅入られた者たちは幸いである。

（二〇一五年一月 燃焼社 六三八頁 定価 三二〇〇円＋税）



Alex Bates. The Culture of the Quake: The Great Kanto Earthquake and Taisho Japan. Ann Arbor, MI: The University of Michigan, 2015. (アレックス・ベイツ著『震災の文化 関東大震災と大正日本』)

目次

- 一章 震災文化
- 二章 震災後文学
- 三章 田山花袋、震災フラヌール
- 四章 震災メロドラマの中のスペクタクルな災害
- 五章 正宗白鳥「他人の災害」における静かな苦痛
- 六章 長田幹彦『大地は震ふ』における苦悩の生存者
- 七章 天譴およびその批評
- 八章 作家たちと朝鮮人騒ぎ
- 九章 大衆と大虐殺——責任と虐殺

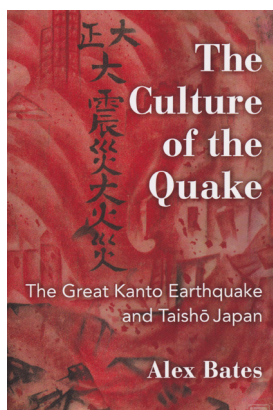
表象における朝鮮問題

結論

「本書は大正時代の語りと虚構に関する最初の、そして最も重要な研究である。私小説作家からモダニストまで、プロレタリア作家たちから大衆小説作家まで、誰もが震災について何かを書いた。すべての主要なフィルムスタジオは震災映画を制作した。どのような場合でも、創作に対するそれまでの態度が、彼らが地震を描くときの方法として応用されていた。圧倒的な破壊と大きな苦難にもかかわらず、表現の中には独自の挑戦が形をとどめてもいた。どのようにすれば搾取／エクスプロイテーションなしで痛みを示すことができただろう？ 研究者たちは作家たちや映画監督たちのいくつかのグループを個別に注目してきた。しかし、彼らがそれぞれのように同じ主題に取り組んだかということに注目する研究はなかった。

関東大震災は、つい最近になって欧米

の研究者たちの関心を引きつけている代役的 (understudied) 出来事である。ハイ・カルチャーおよびロー・カルチャーのなかに表現された方法に注目することによって、『震災文化』は、人々が災害をどのように経験したか、そしてその後の数年の間、彼らはどのように災害を解釈したのかということについての洞察を与えてくれる。本書は日本およびアジアの文学・映画・文化・歴史の研究者たち、そして災害研究の研究者たちの興味を引くにちがいない。」(巻末紹介文より)



編集後記

二〇一〇年七月に最初の研究会を開き、二〇一五年九月に二十回目を迎えた。その節目の会では本誌第三号の合評会を企画し、会員外のゲスト・コメンテーターとして「メディア・アーティスト／美術・音楽・パノラマ愛好家」の森下明彦氏にご参加いただいた。映像メディアに通暁する専門家の視点から数々の貴重な指摘を頂戴することができた。改めて感謝申し上げたい。

第二十一回研究会から、公式ブログ上で発表や質疑応答の様子を報告することとした。参加できなかった方は、ブログで当日の雰囲気を感じていただければと思う。

また、二〇一五年度から従来の「会費会員」に加え、「購読会員」という枠を設けた。会費は同額だが、前者は参加・発表・投稿を積極的に行っていただくことを、後者は遠方にお住まいの方でも気軽に入会していただいて会を支援していただくことを主として想定している。入会希望の方は、会員に声をかける

か、奥付のアドレスまでご連絡をいただきたい。もちろん購読会員の発表・投稿も大歓迎である。

発足から六年が経ち、会員は北海道から鹿児島まで、四十名を超えた。「党勢拡大」が目的ではないが、これからも関心を共有する方たちと研究分野を超えて交流できる拠点として活動が続けていきたい。研究会では毎回の担当幹事制を継続しているが、このところ発表者の確保に苦労している。ぜひ、萌芽的な段階の議論や発想を暖める場所として活用していただきたい。

また、とりわけ新しく参加してくださった方々や大学院生の皆さんにお願いしたいのは、誰かが始めた誰かのための研究会ではなく、自分たちの研究会として捉えていただきたいということだ。幹事は、硬直した制度は壊しながら新しい発想で研究会を企画してい。その延長において本誌を乗っ取るような斬新な特集が生まれることを期待している。

(M)

日程 二〇一五年九月一九日(土)
会場 立命館大学衣笠キャンパス 究論館一階プレゼンテーションルーム

【合評会】

・『フェンスレス』第三号合評会(コメンテーター／森下明彦、岩本知恵)

【研究発表】

- ・鳥木圭太「同化と異化の狭間で——佐多稲子「髪」の嘆き」にみる植民地的主体の形成
- ・和田崇「浅井花子の〈愛情の問題〉」
- ・伊藤純「プロレタリア文学運動をめぐる人物像——一九三〇年代の写真画像から」

第21回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一五年十二月二七日(日)

会場 立命館大学衣笠キャンパス 清心館

五四一号

【研究発表】

- ・小玉健志郎「田沢稲舟「小町湯」考」
- ・矢口貢大「愚痴をこぼす坑夫たち——宮嶋資夫「坑夫」論」

・伊藤純「プロレタリア文化運動と一九三二年テーゼ——『昭和前期プロレタリア文化

運動資料集成」から——序説」

・内藤由直「安部公房『闖入者』と〈新〉植民地主義」

・安藤陽平「安岡章太郎「月は東に」試論」

第22回占領開拓期文化研究会

日程 二〇一六年三月一日(日)

会場 立命館大学衣笠キャンパス 清心館

五〇一号

【研究発表】

・奥村華子「労働とエネルギー 鉱山／汽車／海上―坑内から〈外の世界〉へ―」

・藤原崇雅「武田泰淳「うつし絵」における

愈平伯」

【合評会】

・合評会1 池田啓悟著『宮本百合子における女性労働と政治』を読む(聞き手／鳥木圭太・萬田慶太)

・合評会2 榎美智章著『アニメーションの想像力』の著者に聞く(聞き手／水川敬章・雨宮幸明)

▼会員の研究(2015/4～2016/3)

二〇一五年度における会員の主な研究業績です(表紙裏の本誌第三号目次も)参照ください。

【単行本(単著)】

・池田啓悟『宮本百合子における女性労働と政治 一九三〇年代プロレタリア文学運動の一断面』(風間書房、二〇一五年四月)

・榎美智章『アニメーションの想像力 文字テクスト／映像テクストの想像力の往還』(風間書房、二〇一五年一〇月)

【単行本(共編著その他)】

・『大杉栄全集』第一〇巻(ばる出版、二〇一五年七月)「解説／村田裕和」

・『作家／作者とは何か テクスト・教室・サブカルチャー』(日本近代文学会関西支部編、和泉書院、二〇一五年一月)「論文／内藤由直・榎美智章、編集／和田崇」

・『浮雲』第七号(林芙美子の会、二〇一六年一月)「編集／野田敦子」

・『映画と文学 交響する想像力』(中村三春編、森話社、二〇一六年三月)「論文／友田義行、コラム／雨宮幸明」

【論文】

・内藤由直「野間宏『真空地帯』と国民国家論——国民化される肉体の裂け目」『立命館言語文化研究』二〇一五年一〇月

・鄧麗霞「在満」日系作家牛島春子の女性文学——以「女人」为中心『中日文化文学比較研究』二〇一五年一月

・澤辺真人「疑似ユートピアを穿つ「桃源郷」——戦時下の太宰治文学における理想郷表象を追って」『旭川国文』二〇一五年一月

・福岡弘彬「岩野泡鳴、「デカダン」の尖鋭性——『新自然主義』・表象・シエストフ的不安」『日本文学』二〇一五年二月

・佐々木幸喜「戯曲「最後の武器」にみる安部公房の翻案態度——加藤衛「世界に警告する」との比較から」『歴史文化社会論講座紀要』二〇一六年二月

・佐々木幸喜「安部公房「保護色」の素材と方法——シュルレアリスムとマルクス主義理論の実践として」『京都大学国際交流センター論攷』二〇一六年二月

・佐々木幸喜「安部公房における科学と文学」『博士論文、二〇一六年三月』

・安藤陽平「劣等兵から見出される「希望」

——安岡章太郎『遁走』『昭和文学研究』

二〇一六年三月

・坂堅太「東宝サラリーマン映画の出發——

家族主義的会社観について」『人文論叢』

二〇一六年三月

・野田敦子「南方における詩的実験——林芙

美子の詩篇「南の雨」を視座として」『R

IM』二〇一六年三月

・裨美智章「泉鏡花「龍潭譚」試論——「幻想」

へといざなう、その読者戦略」『近代文献

調査研究論集』二〇一六年三月

・武田悠希「日露戦争 写真画報」における

押川春浪——家庭を対象とした雑誌編輯の

実践」(同前)

・和田崇「南木佳士「急須」論——お茶屋の

主人の役割に関する考察」『三重大学教育

学部研究紀要(人文科学)』二〇一六年三月

・伊藤純「鳴門塩田争議(昭和二年)の再

検証——労働者側同時代資料を参照し

て」(徳島県立文学書道館研究紀要『水脈』

二〇一六年三月)

第四号編集委員／白井かおり・島木圭太・

友田義行(編集長)・内藤由直・村田裕和

*

資料掲載にあたり、左記の方々・機関にお

世話になった。感謝申し上げます。

武田花氏

日本近代文学館

市立小樽文学館

占領開拓期文化研究会会則

総則

第一条（会の名称）

本会は占領開拓期文化研究会と称する。

第二条（会の本部）

本会は別表に記載の代表幹事の所属研究室内に所在地を置く。

第三条（会の目的）

本会は昭和期日本とその周辺地域の占領と開拓に関わる芸術・文化の研究を目的とする。

第四条（会の事業）

本会は第三条の目的を達するために次の事業を行う。

一、研究発表会の開催。

二、機関誌の刊行。

三、その他必要と認められる事業。

会員

第五条（会員の資格）

本会は第三条の目的に賛同する個人および団体の会員をもって構成する。

第六条（会費の納入）

会員は付則に定める会費を負担するものとする。

第七条（会員の活動）

会員は本会の事業に参加し、機関誌の配布を受ける。

役員

第八条（役員）

第四条の各事業を遂行するために次の役員をおく。

代表幹事 一名

常任幹事 若干名

編集委員 若干名

研究会幹事 一名

監査 二名

第九条（役員の任期）

役員の任期は二年とする。但し研究会幹事は研究発表会ごとに改選する。重任および兼任を妨げない。ただし監査の兼任は認めない。

第一〇条（役員の選出）

役員は総会において選出する。

総会

第十一条（総会）

総会は年一回開催し、当該年度の事業および翌年度の事業その他の事項について審議決定する。但し必要に応じて代表幹事は臨時総会を招集することができる。

会計

第十二条（経費）

本会の経費は会費・投稿料・寄付金・その他の収入による。

第十三条（会計報告）

会計報告は総会において行う。

第十四条（会計年度）

本会の会計年度は毎年四月一日に始まり、翌年三月末日に終わる。

会則の変更

第十五条（会則の変更）

会則の変更は総会において行う。

設立年月日

第十六条（設立年月日）

本会の設立年月日を平成二二年六月一日とする。

付則（略）

「この会則は二〇一三年九月一日より施行する。」

フェンスレス 第4号

2016年9月20日発行

編集兼
発行人 占領開拓期文化研究会代表 村田裕和

発行所 北海道教育大学旭川校 村田裕和研究室内
占領開拓期文化研究会

(〒070-8621 北海道旭川市北門町9丁目)

ホームページ <http://senryokaitakuki.com/>

ブログ <http://senryokaitakukibunka.blog.fc2.com/>

メール senryokaitakukibunka@gmail.com

印刷所 洛西プリント社